

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特許公報(B2)

(11) 特許番号

特許第6769735号
(P6769735)

(45) 発行日 令和2年10月14日(2020.10.14)

(24) 登録日 令和2年9月28日(2020.9.28)

(51) Int.Cl.	F I
C07C 309/17 (2006.01)	C07C 309/17
C07C 381/12 (2006.01)	C07C 381/12
C08F 220/38 (2006.01)	C08F 220/38
G03F 7/004 (2006.01)	G03F 7/004 503A
G03F 7/039 (2006.01)	G03F 7/039 601

請求項の数 14 (全 104 頁) 最終頁に続く

(21) 出願番号	特願2016-90666 (P2016-90666)	(73) 特許権者	000002093 住友化学株式会社 東京都中央区新川二丁目27番1号
(22) 出願日	平成28年4月28日(2016.4.28)	(74) 代理人	110000202 新樹グローバル・アイピー特許業務法人
(65) 公開番号	特開2016-210982 (P2016-210982A)	(72) 発明者	西村 崇 大阪市此花区春日出中三丁目1番98号 住友化学株式会社内
(43) 公開日	平成28年12月15日(2016.12.15)	(72) 発明者	市川 幸司 大阪市此花区春日出中三丁目1番98号 住友化学株式会社内
審査請求日	平成31年3月6日(2019.3.6)	審査官	中村 英司
(31) 優先権主張番号	特願2015-97043 (P2015-97043)		
(32) 優先日	平成27年5月12日(2015.5.12)		
(33) 優先権主張国・地域又は機関	日本国(JP)		

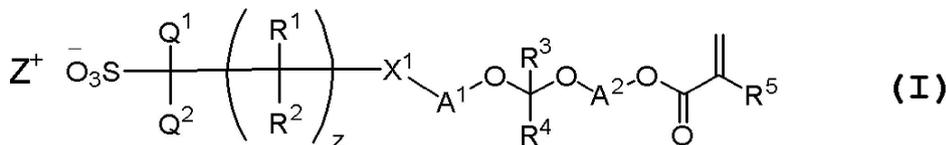
最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 塩、酸発生剤、樹脂、レジスト組成物及びレジストパターンの製造方法

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項1】

酸不安定基を有する式(I)で表される塩。



[式(I)中、

Q¹及びQ²は、互いに独立に、フッ素原子又は炭素数1～6のペルフルオロアルキル基を表す。 10

R¹及びR²は、互いに独立に、水素原子、フッ素原子又は炭素数1～6のペルフルオロアルキル基を表す。

zは、0～6の整数を表し、zが2以上のとき、複数のR¹及びR²は互いに同一であっても異なってもよい。

X¹は、* - CO - O -、* - O - CO - 又は* - O - を表し、*は、C(R¹)(R²)又はC(Q¹)(Q²)との結合位を表す。

A¹は、炭素数4～18の2価の脂環式炭化水素基を含む炭素数4～24の炭化水素基を表す。

A²は、炭素数2～12の2価の炭化水素基を表す。

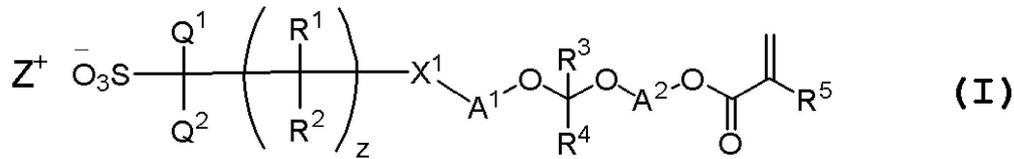
R^3 及び R^4 は、互いに独立に、水素原子又は炭素数1～6の1価の飽和炭化水素基を表す。

R^5 は、ハロゲン原子を有してもよい炭素数1～6のアルキル基、水素原子又はハロゲン原子を表す。

Z^+ は、有機カチオンを表す。]

【請求項2】

式(I)で表される塩。



10

[式(I)中、

Q^1 及び Q^2 は、互いに独立に、フッ素原子又は炭素数1～6のペルフルオロアルキル基を表す。

R^1 及び R^2 は、互いに独立に、水素原子、フッ素原子又は炭素数1～6のペルフルオロアルキル基を表す。

z は、0～6の整数を表し、 z が2以上のとき、複数の R^1 及び R^2 は互いに同一であっても異なってもよい。

20

X^1 は、 $*-\text{CO}-\text{O}-$ 、 $*-\text{O}-\text{CO}-$ 又は $*-\text{O}-$ を表し、 $*$ は、 $\text{C}(\text{R}^1)(\text{R}^2)$ 又は $\text{C}(\text{Q}^1)(\text{Q}^2)$ との結合位を表す。

A^1 は、炭素数4～18の2価の脂環式炭化水素基を含む炭素数4～24の炭化水素基を表す。

A^2 は、炭素数2～12の2価の炭化水素基を表す。

R^3 及び R^4 は、互いに独立に、水素原子又は炭素数1～6の1価の飽和炭化水素基を表す。ただし、 R^3 及び R^4 の少なくとも一方が炭素数1～6の1価の飽和炭化水素基である。

R^5 は、ハロゲン原子を有してもよい炭素数1～6のアルキル基、水素原子又はハロゲン原子を表す。

30

Z^+ は、有機カチオンを表す。]

【請求項3】

X^1 が、 $*-\text{CO}-\text{O}-$ であり、 $*$ は $\text{C}(\text{R}^1)(\text{R}^2)$ 又は $\text{C}(\text{Q}^1)(\text{Q}^2)$ との結合位を表す請求項1又は2記載の塩。

【請求項4】

A^1 が、アダマンタンジイル基を含む炭化水素基である請求項1～3のいずれか記載の塩。

【請求項5】

A^2 が、炭素数2～6のアルカンジイル基である請求項1～4のいずれか記載の塩。

【請求項6】

請求項1～5のいずれか記載の塩を含有する酸発生剤。

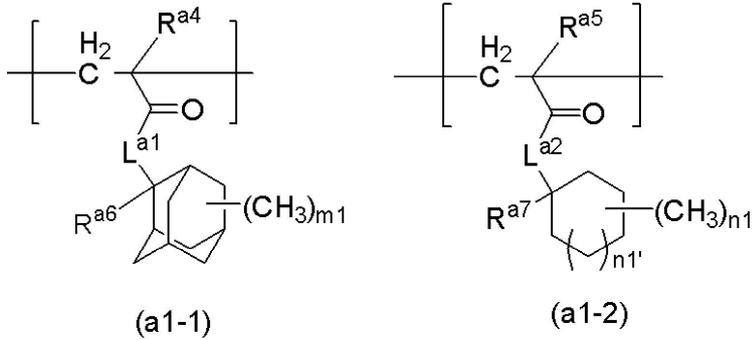
40

【請求項7】

請求項1～5のいずれか記載の塩に由来する構造単位0.5～50モル%と、式(I)で表される塩に由来する構造単位以外の酸不安定基を有する構造単位を含む(メタ)アクリル系の樹脂。

【請求項8】

酸不安定基を有する構造単位が、式(a1-1)で表される構造単位及び式(a1-2)で表される構造単位から選ばれる少なくとも1つである請求項7記載の樹脂。



10

[式 (a 1 - 1) 及び式 (a 1 - 2) 中、
 L^{a1} 及び L^{a2} は、互いに独立に、 $-O-$ 又は $*-O-(CH_2)_{k1}-CO-O-$ を表し、
 $k1$ は 1 ~ 7 の整数を表し、 $*$ は $-CO-$ との結合手を表す。
 R^{a4} 及び R^{a5} は、互いに独立に、水素原子又はメチル基を表す。
 R^{a6} 及び R^{a7} は、互いに独立に、炭素数 1 ~ 8 のアルキル基、炭素数 3 ~ 18 の脂環式炭化水素基又はこれらを組合せた基を表す。
 $m1$ は、0 ~ 14 の整数を表す。
 $n1$ は、0 ~ 10 の整数を表す。
 $n1'$ は、0 ~ 3 の整数を表す。]

【請求項 9】

請求項 7 又は 8 記載の樹脂と、酸発生剤とを含むレジスト組成物。

20

【請求項 10】

酸発生剤が、請求項 6 に記載の酸発生剤である請求項 9 記載のレジスト組成物。

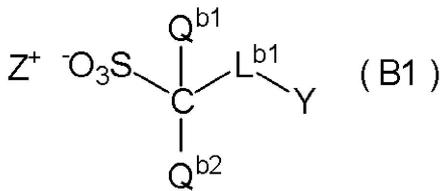
【請求項 11】

式 (I) で表される塩に由来する構造単位以外の酸不安定基を有する構造単位を含む樹脂と、請求項 6 に記載の酸発生剤とを含むレジスト組成物。

【請求項 12】

酸発生剤が、式 (B 1) で表される塩を含む請求項 9 ~ 11 のいずれか記載のレジスト組成物。

30



[式 (B 1) 中、
 Q^{b1} 及び Q^{b2} は、互いに独立に、フッ素原子又は炭素数 1 ~ 6 のペルフルオロアルキル基を表す。

L^{b1} は、炭素数 1 ~ 24 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる $-CH_2-$ は、 $-O-$ 又は $-CO-$ に置き換わっていてもよく、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基で置換されていてもよい。

40

Y は、置換基を有していてもよいメチル基又は置換基を有していてもよい炭素数 3 ~ 18 の 1 価の脂環式炭化水素基を表し、該 1 価の脂環式炭化水素基に含まれる $-CH_2-$ は、 $-O-$ 、 $-SO_2-$ 又は $-CO-$ に置き換わっていてもよい。

Z^+ は、有機カチオンを表す。]

【請求項 13】

酸発生剤から発生する酸よりも酸性度の弱い酸を発生する塩をさらに含有する請求項 9 ~ 12 のいずれか記載のレジスト組成物。

【請求項 14】

(1) 請求項 9 ~ 13 のいずれか記載のレジスト組成物を基板上に塗布する工程、

50

- (2) 塗布後の組成物を乾燥させて組成物層を形成する工程、
 (3) 組成物層に露光する工程、
 (4) 露光後の組成物層を加熱する工程、及び
 (5) 加熱後の組成物層を現像する工程、
 を含むレジストパターンの製造方法。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

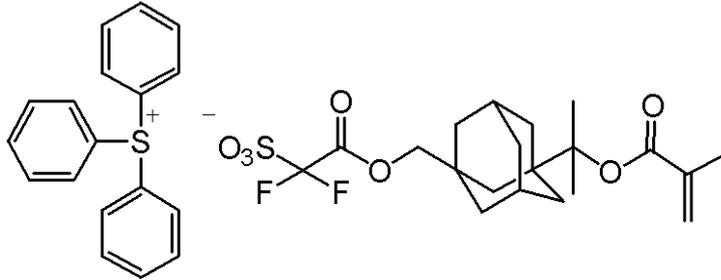
本発明は、塩、酸発生剤、樹脂、レジスト組成物及び該レジスト組成物を用いるレジストパターンの製造方法等に関する。

10

【背景技術】

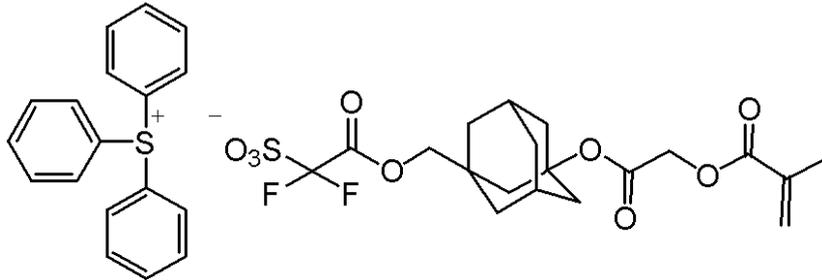
【0002】

特許文献1には、下記塩の合成方法が記載されている。



20

特許文献2には、下記塩に由来する構造単位を含む樹脂を含有するレジスト組成物が記載されている。



30

【先行技術文献】

【特許文献】

【0003】

【特許文献1】特開2011-215619号公報

【特許文献2】特開2014-197168号公報

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0004】

上記の塩に由来する構造単位を含む樹脂を使用したレジスト組成物では、ラインエッジラフネス(LER)が必ずしも満足できない場合があった。

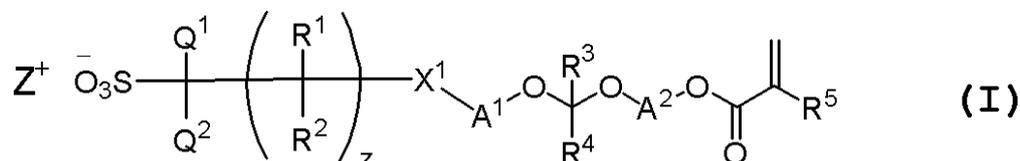
40

【課題を解決するための手段】

【0005】

本発明は、以下の発明を含む。

(1) 式(I)で表される塩。



50

[式(I)中、

Q^1 及び Q^2 は、互いに独立に、フッ素原子又は炭素数 1 ~ 6 のペルフルオロアルキル基を表す。

R^1 及び R^2 は、互いに独立に、水素原子、フッ素原子又は炭素数 1 ~ 6 のペルフルオロアルキル基を表す。

z は、0 ~ 6 の整数を表し、 z が 2 以上のとき、複数の R^1 及び R^2 は互いに同一であっても異なってもよい。

X^1 は、 $*-CO-O-$ 、 $*-O-CO-$ 又は $*-O-$ を表し、 $*$ は、 $C(R^1)(R^2)$ 又は $C(Q^1)(Q^2)$ との結合位を表す。

A^1 は、炭素数 4 ~ 18 の 2 価の脂環式炭化水素基を含む炭素数 4 ~ 24 の炭化水素基を表す。

A^2 は、炭素数 2 ~ 12 の 2 価の炭化水素基を表す。

R^3 及び R^4 は、互いに独立に、水素原子又は炭素数 1 ~ 6 の 1 価の飽和炭化水素基を表す。

R^5 は、ハロゲン原子を有してもよい炭素数 1 ~ 6 のアルキル基、水素原子又はハロゲン原子を表す。

Z^+ は、有機カチオンを表す。]

[2] X^1 が、 $*-CO-O-$ であり、 $*$ は $C(R^1)(R^2)$ 又は $C(Q^1)(Q^2)$ との結合位を表す [1] 記載の塩。

[3] A^1 が、アダマンタンジイル基を含む炭化水素基である [1] 又は [2] 記載の塩。

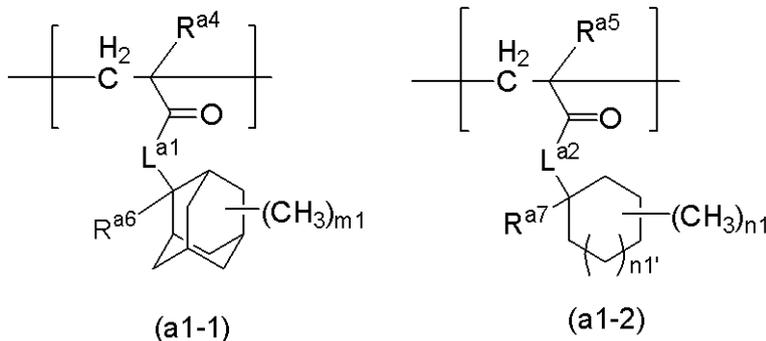
[4] A^2 が、炭素数 2 ~ 6 のアルカンジイル基である [1] ~ [3] のいずれか記載の塩。

[5] [1] ~ [4] のいずれか記載の塩を含有する酸発生剤。

[6] [1] ~ [4] のいずれか記載の塩に由来する構造単位を含む樹脂。

[7] さらに、式(I)で表される塩に由来する構造単位以外に、酸不安定基を有する構造単位を含む [6] 記載の樹脂。

[8] 酸不安定基を有する構造単位が、式(a1-1)で表される構造単位及び式(a1-2)で表される構造単位から選ばれる少なくとも1つである [6] 又は [7] 記載の樹脂。



[式(a1-1)及び式(a1-2)中、

L^{a1} 及び L^{a2} は、互いに独立に、 $-O-$ 又は $*-O-(CH_2)_{k1}-CO-O-$ を表し、 $k1$ は 1 ~ 7 の整数を表し、 $*$ は $-CO-$ との結合手を表す。

R^{a4} 及び R^{a5} は、互いに独立に、水素原子又はメチル基を表す。

R^{a6} 及び R^{a7} は、互いに独立に、炭素数 1 ~ 8 のアルキル基、炭素数 3 ~ 18 の脂環式炭化水素基又はこれらを組合せた基を表す。

$m1$ は、0 ~ 14 の整数を表す。

$n1$ は、0 ~ 10 の整数を表す。

$n1'$ は、0 ~ 3 の整数を表す。]

[9] [6] ~ [8] のいずれか記載の樹脂と、式(I)で表される塩以外に、酸発生剤とを含むレジスト組成物。

10

20

30

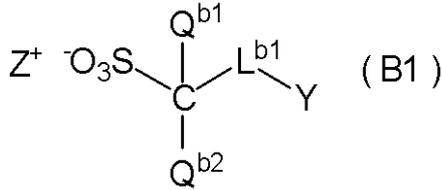
40

50

〔 1 0 〕 酸発生剤が、〔 5 〕 記載の酸発生剤である〔 9 〕 のレジスト組成物。

〔 1 1 〕 式 (I) で表される塩に由来する構造単位以外の酸不安定基を有する構造単位を含む樹脂と、〔 5 〕 記載の酸発生剤とを含むレジスト組成物。

〔 1 2 〕 酸発生剤が、式 (B 1) で表される塩である〔 9 〕 ~〔 1 1 〕 のいずれか記載のレジスト組成物。



10

〔 式 (B 1) 中、

Q^{b1} 及び Q^{b2} は、互いに独立に、フッ素原子又は炭素数 1 ~ 6 のペルフルオロアルキル基を表す。

L^{b1} は、炭素数 1 ~ 24 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる $-CH_2-$ は、 $-O-$ 又は $-CO-$ に置き換わっていてもよく、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基で置換されていてもよい。

Y は、置換基を有していてもよいメチル基又は置換基を有していてもよい炭素数 3 ~ 18 の 1 価の脂環式炭化水素基を表し、該 1 価の脂環式炭化水素基に含まれる $-CH_2-$ は、 $-O-$ 、 $-SO_2-$ 又は $-CO-$ に置き換わっていてもよい。

20

Z^+ は、有機カチオンを表す。]

〔 1 3 〕 酸発生剤から発生する酸よりも酸性度の弱い酸を発生する塩をさらに含有する〔 9 〕 ~〔 1 2 〕 のいずれか記載のレジスト組成物。

〔 1 4 〕 (1) 〔 9 〕 ~〔 1 3 〕 のいずれか記載のレジスト組成物を基板上に塗布する工程、

(2) 塗布後の組成物を乾燥させて組成物層を形成する工程、

(3) 組成物層に露光する工程、

(4) 露光後の組成物層を加熱する工程、及び

(5) 加熱後の組成物層を現像する工程を含むレジストパターンの製造方法。

【 発明の効果 】

30

【 0 0 0 6 】

本発明の化合物を使用したレジスト組成物を用いることにより、優れたラインエッジラフネス (LER) でレジストパターンを製造することができる。

【 発明を実施するための形態 】

【 0 0 0 7 】

本明細書では、特に断りのない限り、化合物の構造式の説明において「脂肪族炭化水素基」は直鎖状又は分岐状の炭化水素基を意味し、「脂環式炭化水素基」は脂環式炭化水素の環から価数に相当する数の水素原子を取り去った基を意味する。「芳香族炭化水素基」は芳香環に炭化水素基が結合した基をも包含する。立体異性体が存在する場合は、全ての立体異性体を包含する。

40

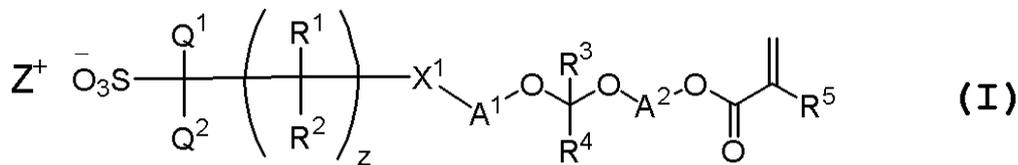
本明細書において、「(メタ)アクリル系モノマー」とは、「 $CH_2 = CH - CO -$ 」又は「 $CH_2 = C(CH_3) - CO -$ 」の構造を有するモノマーの少なくとも 1 種を意味する。同様に「(メタ)アクリレート」とは、それぞれ「アクリレート及びメタクリレートの少なくとも一種」を意味する。「(メタ)アクリル酸」や「(メタ)アクリロイル」等の表記も、同様の意味を有する。また、本明細書中に記載する基において、直鎖構造と分岐構造の両方を取り得るものについては、そのいずれでもよい。

本明細書において、「レジスト組成物の固形分」とは、レジスト組成物の総量から、後述する溶剤 (E) を除いた成分の合計を意味する。

【 0 0 0 8 】

< 式 (I) で表される塩 (以下、塩 (I) という場合がある。) >

50



[式(I)中、

Q^1 及び Q^2 は、互いに独立に、フッ素原子又は炭素数 1 ~ 6 のペルフルオロアルキル基を表す。

R^1 及び R^2 は、互いに独立に、水素原子、フッ素原子又は炭素数 1 ~ 6 のペルフルオロアルキル基を表す。

z は、0 ~ 6 の整数を表し、 z が 2 以上のとき、複数の R^1 及び R^2 は互いに同一であっても異なってもよい。

X^1 は、* - CO - O -、* - O - CO - 又は * - O - を表し、* は、 $\text{C}(\text{R}^1)(\text{R}^2)$ 又は $\text{C}(\text{Q}^1)(\text{Q}^2)$ との結合位を表す。

A^1 は、炭素数 4 ~ 18 の 2 価の脂環式炭化水素基を含む炭素数 4 ~ 24 の炭化水素基を表す。

A^2 は、炭素数 2 ~ 12 の 2 価の炭化水素基を表す。

R^3 及び R^4 は、互いに独立に、水素原子又は炭素数 1 ~ 6 の 1 価の飽和炭化水素基を表す。

R^5 は、ハロゲン原子を有してもよい炭素数 1 ~ 6 のアルキル基、水素原子又はハロゲン原子を表す。

Z^+ は、有機カチオンを表す。]

【0009】

Q^1 、 Q^2 、 R^1 及び R^2 のペルフルオロアルキル基としては、トリフルオロメチル基、ペルフルオロエチル基、ペルフルオロプロピル基、ペルフルオロイソプロピル基、ペルフルオロブチル基、ペルフルオロ *sec*-ブチル基、ペルフルオロ *tert*-ブチル基、ペルフルオロペンチル基、ペルフルオロヘキシル基などが挙げられる。

Q^1 及び Q^2 は、互いに独立に、好ましくはトリフルオロメチル基又はフッ素原子であり、より好ましくはフッ素原子である。

R^1 及び R^2 は、互いに独立に、好ましくは水素原子又はフッ素原子である。

z は、0 であることが好ましい。

【0010】

X^1 としては、* - CO - O - (* は $\text{C}(\text{R}^1)(\text{R}^2)$ 又は $\text{C}(\text{Q}^1)(\text{Q}^2)$ との結合位を表す。) であることが好ましい。

【0011】

A^1 の炭素数 4 ~ 18 の 2 価の脂環式炭化水素基を含む炭化水素基としては、炭素数 4 ~ 18 の 2 価の脂環式炭化水素基又は 2 価の脂環式炭化水素基と炭素数 1 ~ 6 のアルカンジイル基を組合せることにより形成される 2 価の基が挙げられる。つまり、ここでの炭化水素基の炭素数は、4 ~ 24 が挙げられ、好ましくは、5 ~ 20 である。

脂環式炭化水素基としては、シクロペンタンジイル基、シクロヘキサンジイル基、アダマンタンジイル基、ノルボルナンジイル基等が挙げられる。なかでも、シクロヘキサンジイル基及びアダマンタンジイル基が好ましく、アダマンタンジイル基がより好ましい。

アルカンジイル基としては、メチレン基、エチレン基、プロパン - 1, 3 - ジイル基、ブタン - 1, 4 - ジイル基、ペンタン - 1, 5 - ジイル基及びヘキサン - 1, 6 - ジイル基等の直鎖状アルカンジイル基、並びに当該直鎖状アルカンジイル基に、アルキル基(特に、炭素数 1 ~ 4 のアルキル基、メチル基、エチル基、プロピル基、イソプロピル基、ブチル基、*sec*-ブチル基、*tert*-ブチル基等)の側鎖を有したものの、エタン - 1, 1 - ジイル基、プロパン - 1, 2 - ジイル基、ブタン - 1, 3 - ジイル基、2 - メチルプロパン - 1, 3 - ジイル基、2 - メチルプロパン - 1, 2 - ジイル基、ペンタン - 1, 4 - ジイル基及び 2 - メチルブタン - 1, 4 - ジイル基等の分岐状アルカンジイル基が挙げ

10

20

30

40

50

られる。

【0012】

A¹の炭素数4～18の2価の脂環式炭化水素基を含む炭化水素基としては、アダマンタンジイル基を有する炭化水素基が挙げられ、アダマンタンジイル基又はアダマンタンジイル基とアルカンジイル基を組合せることにより形成される2価の基が好ましく、アルカンジイル基又はアダマンタンジイル基とメチレン基を組合せることにより形成される2価の基がより好ましく、アダマンタンジイル基とメチレン基とを組合せることにより形成される2価の基がさらに好ましい。

【0013】

A²の炭素数2～12の2価の炭化水素基としては、アルカンジイル基、2価の脂環式炭化水素基、2価の芳香族炭化水素基又はこれらを組合せることにより形成される2価の基が挙げられる。

アルカンジイル基としては、エチレン基、プロパン-1,3-ジイル基、ブタン-1,4-ジイル基、ペンタン-1,5-ジイル基及びヘキサン-1,6-ジイル基等の直鎖状アルカンジイル基、並びに当該直鎖状アルカンジイル基に、アルキル基(特に、炭素数1～4のアルキル基、メチル基、エチル基、プロピル基、イソプロピル基、ブチル基、sec-ブチル基、tert-ブチル基等)の側鎖を有したものの、エタン-1,1-ジイル基、プロパン-1,2-ジイル基、ブタン-1,3-ジイル基、2-メチルプロパン-1,3-ジイル基、2-メチルプロパン-1,2-ジイル基、ペンタン-1,4-ジイル基及び2-メチルブタン-1,4-ジイル基等の分岐状アルカンジイル基が挙げられる。

【0014】

脂環式炭化水素基としては、シクロペンタンジイル基、シクロヘキサンジイル基、アダマンタンジイル基、ノルボルナンジイル基等が挙げられる。なかでも、シクロヘキサンジイル基及びアダマンタンジイル基が好ましく、アダマンタンジイル基がより好ましい。

【0015】

芳香族炭化水素基としては、フェニレン基、ナフチレン基、p-メチルフェニレン基、p-tert-ブチルフェニレン基、トリル基、キシリレン基、クメニレン基、メシチレン基、ピフェニレン基、2,6-ジエチルフェニレン基、2-メチル-6-エチルフェニレン基等が挙げられる。

【0016】

A²の炭素数2～12の2価の炭化水素基としては、炭素数2～6のアルカンジイル基が好ましく、炭素数2～4のアルカンジイル基がより好ましい。

【0017】

R³及びR⁴の炭素数1～6の1価の飽和炭化水素基としては、メチル基、エチル基、プロピル基、ブチル基、イソブチル基、sec-ブチル基、tert-ブチル基、ペンチル基、ヘキシル基等のアルキル基；シクロペンチル基、シクロヘキシル基等のシクロアルキル基；及びこれらを組合せることにより形成される基が挙げられる。

R³及びR⁴は、それぞれ独立に、水素原子、メチル基又はエチル基であることが好ましく、水素原子又はメチル基であることがより好ましく、一方が水素原子、他方がメチル基であることがさらに好ましい。

【0018】

R⁵のアルキル基としては、メチル基、エチル基、n-プロピル基、イソプロピル基、n-ブチル基、sec-ブチル基、tert-ブチル基、n-ペンチル基及びn-ヘキシル基等が挙げられ、好ましくは炭素数1～4のアルキル基が挙げられ、より好ましくはメチル基及びエチル基が挙げられる。

R⁵のハロゲン原子としては、フッ素原子、塩素原子、臭素原子及びヨウ素原子が挙げられる。

R⁵のハロゲン原子を有するアルキル基としては、トリフルオロメチル基、ペルフルオロエチル基、ペルフルオロプロピル基、ペルフルオロイソプロピル基、ペルフルオロブチル基、ペルフルオロsec-ブチル基、ペルフルオロtert-ブチル基、ペルフルオロ

10

20

30

40

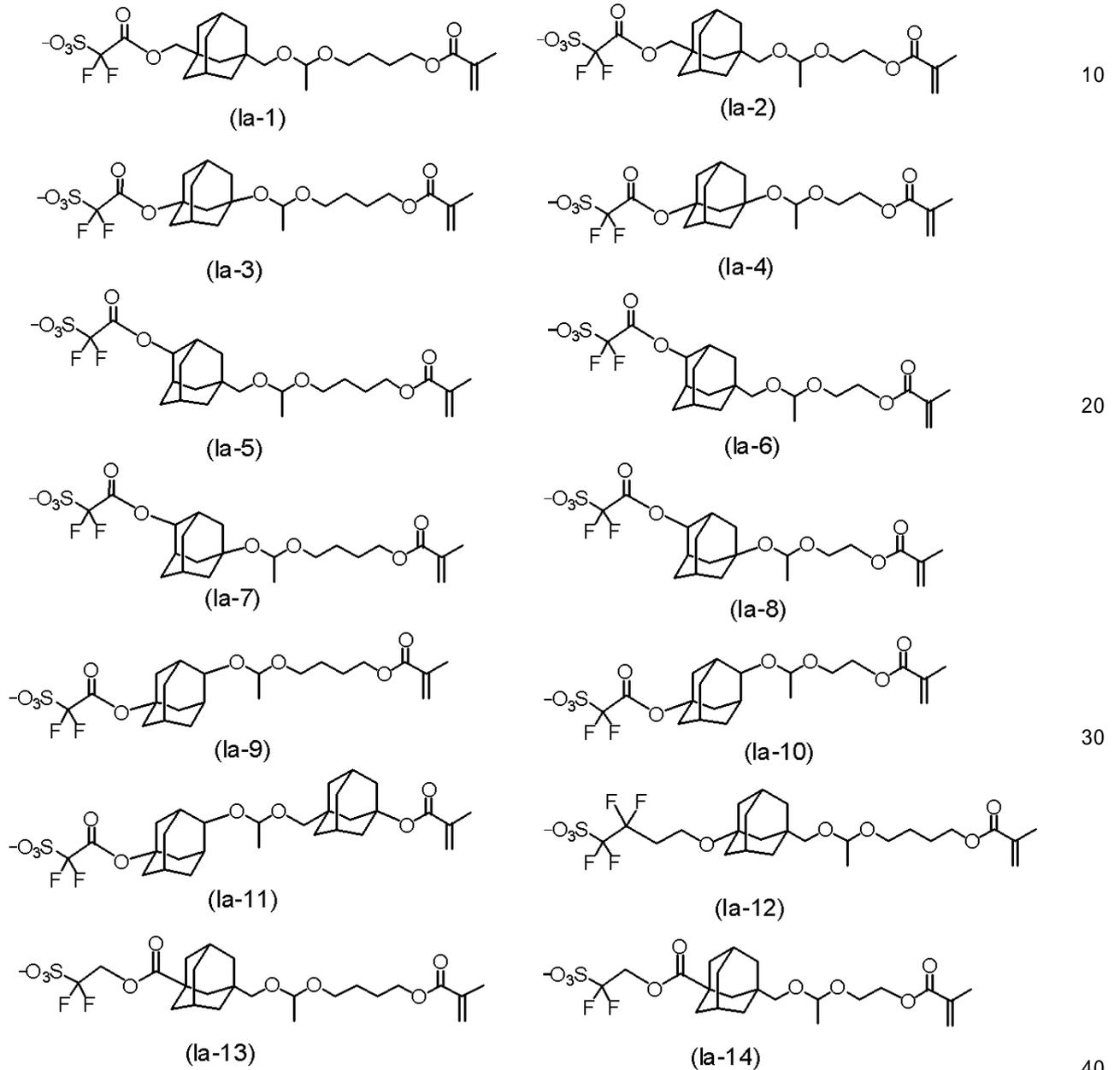
50

ペンチル基、ペルフルオロヘキシル基、ペルクロロメチル基、ペルプロモメチル基及びペルヨードメチル基等が挙げられる。

R⁵ は、水素原子又はメチル基であることが好ましい。

【0019】

アニオン(I)としては、例えば、以下のアニオンが挙げられる。なかでも、式(Ia-1)~式(Ia-10)で表されるアニオンが好ましく、式(Ia-1)~式(Ia-4)で表されるアニオンがより好ましい。

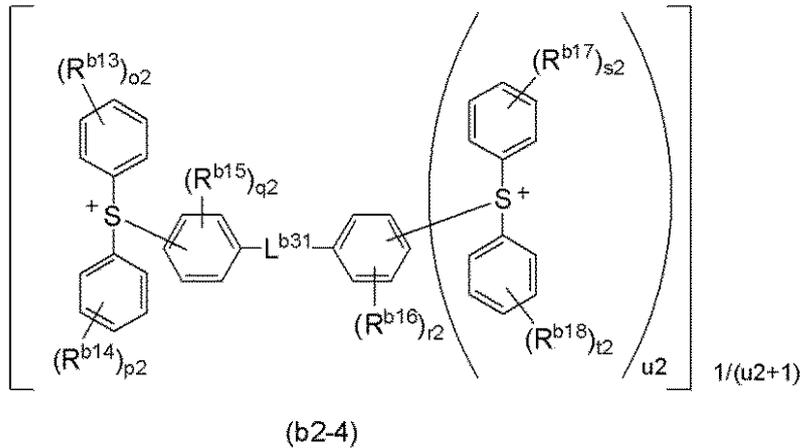
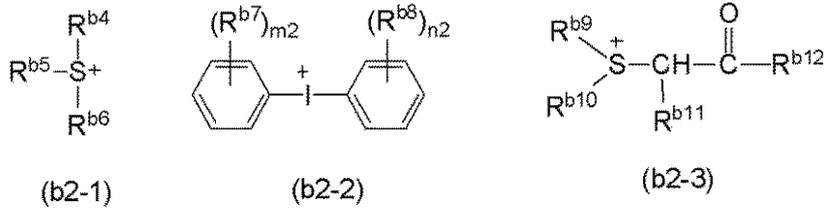


【0020】

塩(I)におけるカチオンZ⁺は、有機オニウムカチオン、例えば、有機スルホニウムカチオン、有機ヨードニウムカチオン、有機アンモニウムカチオン、ベンゾチアゾリウムカチオン、有機ホスホニウムカチオン等が挙げられ、好ましくは有機スルホニウムカチオン又は有機ヨードニウムカチオンが挙げられ、より好ましくはアリアルスルホニウムカチオンが挙げられる。

中でも、式(b2-1)~式(b2-4)のいずれかで表されるカチオン(以下、式番号に応じて「カチオン(b2-1)」等という場合がある。)が好ましい。

【0021】



10

20

[式(b2-1)～式(b2-4)において、

$R^{b4} \sim R^{b6}$ は、互いに独立に、炭素数1～30の脂肪族炭化水素基、炭素数3～36の脂環式炭化水素基又は炭素数6～36の芳香族炭化水素基を表し、該脂肪族炭化水素基に含まれる水素原子は、ヒドロキシ基、炭素数1～12のアルコキシ基、炭素数3～12の脂環式炭化水素基又は炭素数6～18の芳香族炭化水素基で置換されていてもよく、該脂環式炭化水素基に含まれる水素原子は、ハロゲン原子、炭素数1～18の脂肪族炭化水素基、炭素数2～4のアシル基又はグリシジルオキシ基で置換されていてもよく、該芳香族炭化水素基に含まれる水素原子は、ハロゲン原子、ヒドロキシ基又は炭素数1～12のアルコキシ基で置換されていてもよい。

R^{b4} と R^{b5} とは、一緒になってそれらが結合する硫黄原子を含む環を形成してもよく、該環に含まれるメチレン基は、酸素原子、スルフィニル基又はカルボニル基に置き換わってもよい。

30

【0022】

R^{b7} 及び R^{b8} は、互いに独立に、ヒドロキシ基、炭素数1～12の脂肪族炭化水素基又は炭素数1～12のアルコキシ基を表す。

$m2$ 及び $n2$ は、互いに独立に、0～5の整数を表す。

$m2$ が2以上のとき、複数の R^{b7} は同一であっても異なってもよく、 $n2$ が2以上のとき、複数の R^{b8} は同一であっても異なってもよい。

【0023】

R^{b9} 及び R^{b10} は、互いに独立に、炭素数1～36の脂肪族炭化水素基又は炭素数3～36の脂環式炭化水素基を表す。

R^{b9} と R^{b10} とは、一緒になってそれらが結合する硫黄原子を含む環を形成してもよく、該環に含まれるメチレン基は、酸素原子、スルフィニル基又はカルボニル基に置き換わってもよい。

40

R^{b11} は、水素原子、炭素数1～36の脂肪族炭化水素基、炭素数3～36の脂環式炭化水素基又は炭素数6～18の芳香族炭化水素基を表す。

R^{b12} は、炭素数1～12の脂肪族炭化水素基、炭素数3～18の脂環式炭化水素基又は炭素数6～18の芳香族炭化水素基を表し、該脂肪族炭化水素基に含まれる水素原子は、炭素数6～18の芳香族炭化水素基で置換されていてもよく、該芳香族炭化水素基に含まれる水素原子は、炭素数1～12のアルコキシ基又は炭素数1～12のアルキルカルボ

50

ニルオキシ基で置換されていてもよい。

R^{b11} と R^{b12} とは、一緒になってそれらが結合する - CH - CO - を含む環を形成していてもよく、該環に含まれるメチレン基は、酸素原子、スルフィニル基又はカルボニル基に置き換わってもよい。

【0024】

$R^{b13} \sim R^{b18}$ は、互いに独立に、ヒドロキシ基、炭素数 1 ~ 12 の脂肪族炭化水素基又は炭素数 1 ~ 12 のアルコキシ基を表す。

L^{b31} は、硫黄原子又は酸素原子を表す。

o_2 、 p_2 、 s_2 、及び t_2 は、互いに独立に、0 ~ 5 の整数を表す。

q_2 及び r_2 は、互いに独立に、0 ~ 4 の整数を表す。

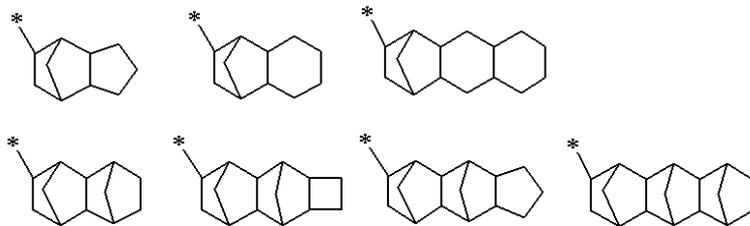
u_2 は 0 又は 1 を表す。

o_2 が 2 以上のとき、複数の R^{b13} は同一であっても異なってもよく、 p_2 が 2 以上のとき、複数の R^{b14} は同一であっても異なってもよく、 q_2 が 2 以上のとき、複数の R^{b15} は同一であっても異なってもよく、 r_2 が 2 以上のとき、複数の R^{b16} は同一であっても異なってもよく、 s_2 が 2 以上のとき、複数の R^{b17} は同一であっても異なってもよく、 t_2 が 2 以上のとき、複数の R^{b18} は同一であっても異なってもよい。

【0025】

脂肪族炭化水素基としては、メチル基、エチル基、*n*-プロピル基、イソプロピル基、*n*-ブチル基、*sec*-ブチル基、*tert*-ブチル基、*n*-ペンチル基、*n*-ヘキシル基、*n*-オクチル基及び 2-エチルヘキシル基のアルキル基が挙げられる。特に、 $R^{b9} \sim R^{b12}$ の脂肪族炭化水素基の炭素数は、好ましくは 1 ~ 12 である。

脂環式炭化水素基は、単環式又は多環式のいずれでもよく、単環式の脂環式炭化水素基としては、シクロプロピル基、シクロブチル基、シクロペンチル基、シクロヘキシル基、シクロヘプチル基、シクロオクチル基、シクロデシル基等のシクロアルキル基が挙げられる。多環式の脂環式炭化水素基としては、デカヒドロナフチル基、アダマンチル基、ノルボルニル基及び下記の基等が挙げられる。



【0026】

特に、 $R^{b9} \sim R^{b12}$ の脂環式炭化水素基の炭素数は、好ましくは 3 ~ 18、より好ましくは 4 ~ 12 である。

【0027】

水素原子が脂肪族炭化水素基で置換された脂環式炭化水素基としては、メチルシクロヘキシル基、ジメチルシクロヘキシル基、2-アルキルアダマンタン-2-イル基、メチルノルボルニル基、イソボルニル基等が挙げられる。水素原子が脂肪族炭化水素基で置換された脂環式炭化水素基においては、脂環式炭化水素基と脂肪族炭化水素基との合計炭素数が好ましくは 20 以下である。

【0028】

芳香族炭化水素基としては、フェニル基、トリル基、キシリル基、クメニル基、メチル基、*p*-エチルフェニル基、*p*-*tert*-ブチルフェニル基、*p*-シクロヘキシルフェニル基、*p*-アダマンチルフェニル基、ビフェニル基、ナフチル基、フェナントリル基、2,6-ジエチルフェニル基、2-メチル-6-エチルフェニル基等のアリール基が挙げられる。

なお、芳香族炭化水素基に、脂肪族炭化水素基又は脂環式炭化水素基が含まれる場合は、炭素数 1 ~ 18 の脂肪族炭化水素基又は炭素数 3 ~ 18 の脂環式炭化水素基が好ましい

10

20

30

40

50

。水素原子がアルコキシ基で置換された芳香族炭化水素基としては、*p*-メトキシフェニル基等が挙げられる。

水素原子が芳香族炭化水素基で置換された脂肪族炭化水素基としては、ベンジル基、フェネチル基、フェニルプロピル基、トリチル基、ナフチルメチル基、ナフチルエチル基等のアラルキル基が挙げられる。

【0029】

アルコキシ基としては、メトキシ基、エトキシ基、プロポキシ基、ブトキシ基、ペンチルオキシ基、ヘキシルオキシ基、ヘプチルオキシ基、オクチルオキシ基、デシルオキシ基及びドデシルオキシ基等が挙げられる。

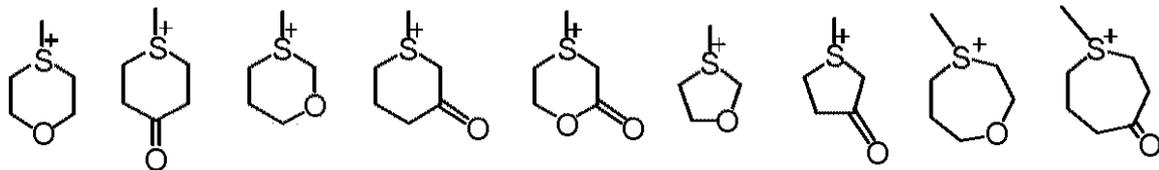
アシル基としては、アセチル基、プロピオニル基及びブチリル基等が挙げられる。

ハロゲン原子としては、フッ素原子、塩素原子、臭素原子及びヨウ素原子等が挙げられる。

アルキルカルボニルオキシ基としては、メチルカルボニルオキシ基、エチルカルボニルオキシ基、*n*-プロピルカルボニルオキシ基、イソプロピルカルボニルオキシ基、*n*-ブチルカルボニルオキシ基、*sec*-ブチルカルボニルオキシ基、*tert*-ブチルカルボニルオキシ基、ペンチルカルボニルオキシ基、ヘキシルカルボニルオキシ基、オクチルカルボニルオキシ基及び2-エチルヘキシルカルボニルオキシ基等が挙げられる。

【0030】

R^{b4} と R^{b5} とが一緒になって形成する硫黄原子を含む環は、単環式、多環式、芳香族性、非芳香族性、飽和及び不飽和のいずれの環であってもよい。この環は、炭素数3~18の環が挙げられ、好ましくは炭素数4~18の環が挙げられる。また、硫黄原子を含む環は、3員環~12員環が挙げられ、好ましくは3員環~7員環が挙げられる。具体的には、下記の環が挙げられる。



【0031】

R^{b9} と R^{b10} とが一緒になって形成する環は、単環式、多環式、芳香族性、非芳香族性、飽和及び不飽和のいずれの環であってもよい。この環は、3員環~12員環が挙げられ、好ましくは3員環~7員環が挙げられる。具体的には、チオラン-1-イウム環(テトラヒドロチオフェニウム環)、チアン-1-イウム環、1,4-オキサチアン-4-イウム環等が挙げられる。

R^{b11} と R^{b12} とが一緒になって形成する環は、単環式、多環式、芳香族性、非芳香族性、飽和及び不飽和のいずれの環であってもよい。この環は、3員環~12員環が挙げられ、好ましくは3員環~7員環が挙げられる。具体的には、オキソシクロヘプタン環、オキソシクロヘキサン環、オキソノルボルナン環、オキソアダマンタン環等が挙げられる。

【0032】

カチオン($b2-1$)~カチオン($b2-4$)の中でも、好ましくはカチオン($b2-1$)が挙げられる。

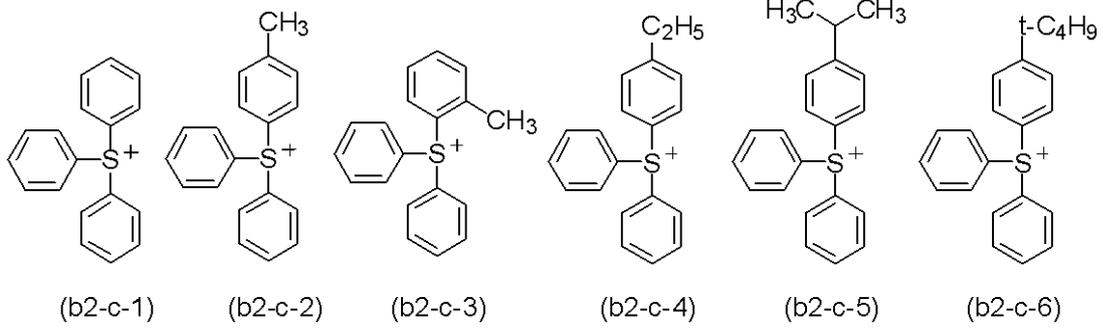
カチオン($b2-1$)としては、以下のカチオンが挙げられる。

10

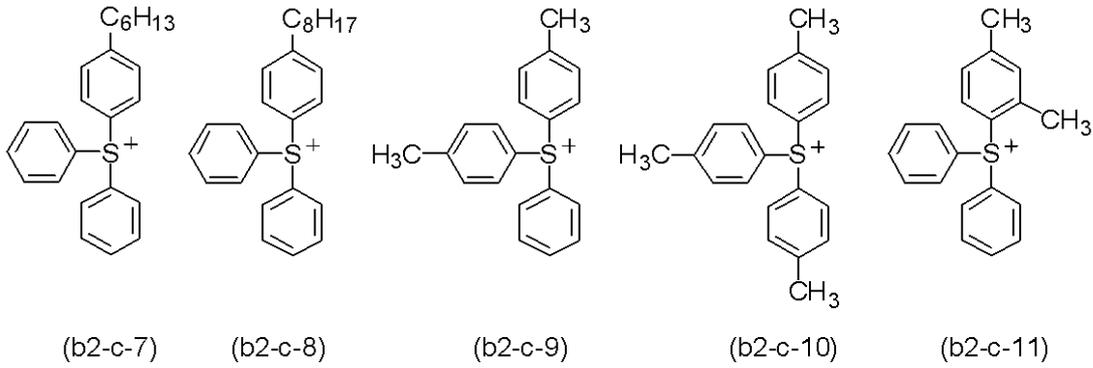
20

30

40

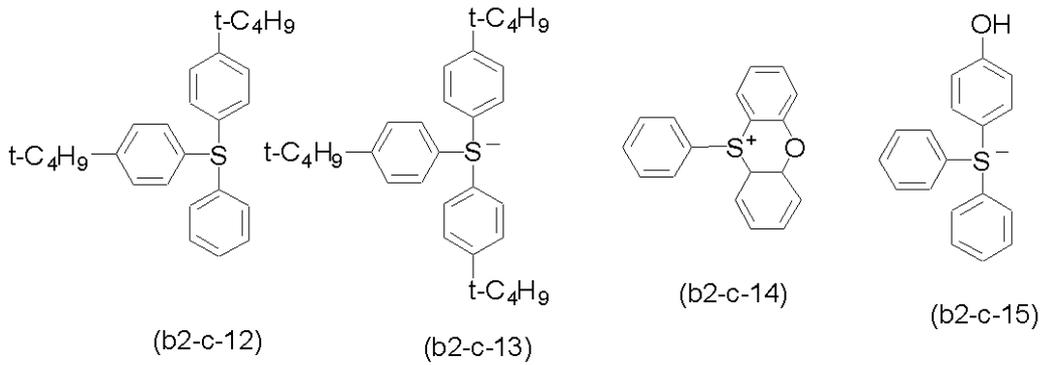


10

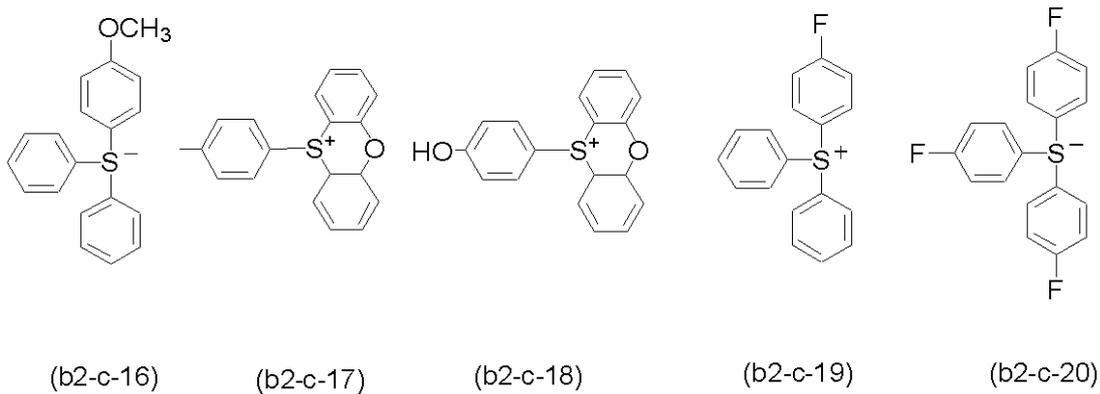


【 0 0 3 3 】

20

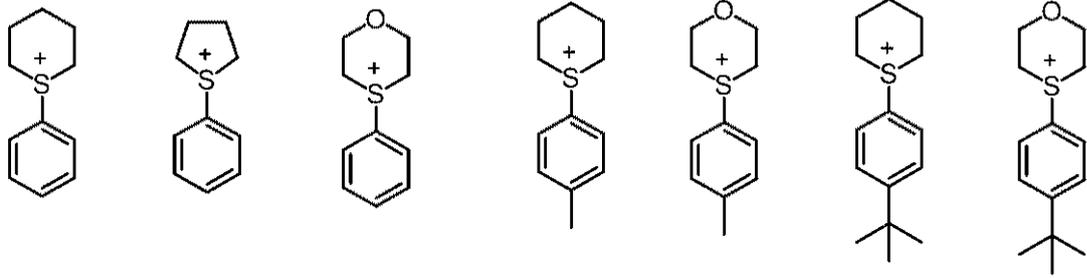


30



40

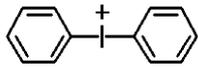
【 0 0 3 4 】



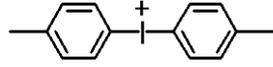
(b2-c-21) (b2-c-22) (b2-c-23) (b2-c-24) (b2-c-25) (b2-c-26) (b2-c-27)

【 0 0 3 5 】

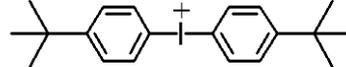
カチオン (b 2 - 2) としては、以下のカチオンが挙げられる。



(b2-c-28)



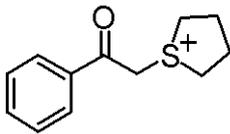
(b2-c-29)



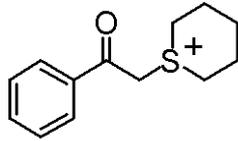
(b2-c-30)

【 0 0 3 6 】

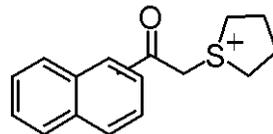
カチオン (b 2 - 3) としては、以下のカチオンが挙げられる。



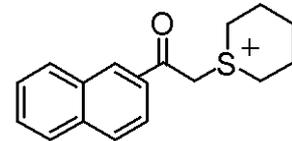
(b2-c-31)



(b2-c-32)



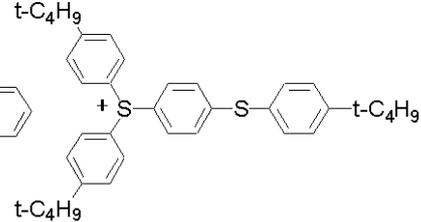
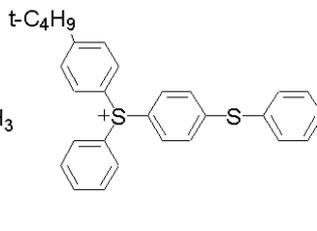
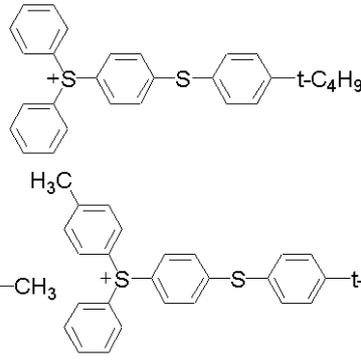
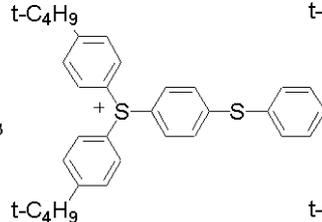
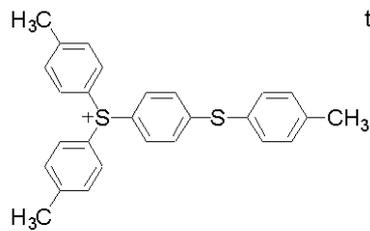
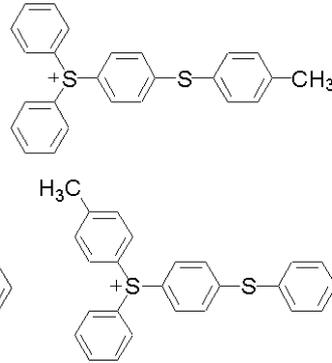
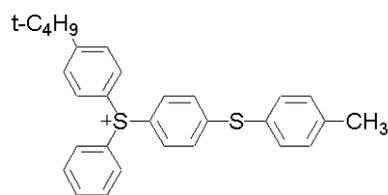
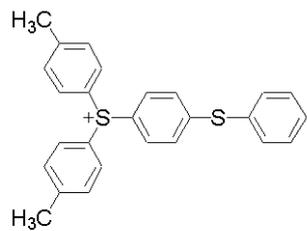
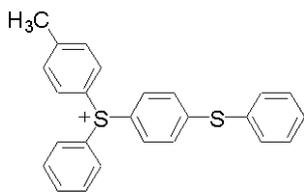
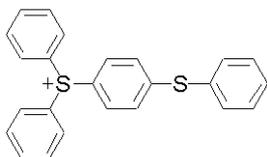
(b2-c-33)



(b2-c-34)

【 0 0 3 7 】

カチオン (b 2 - 4) のとしては、以下のカチオンが挙げられる。



なかでも、式 (b 2 - c - 1) 、 (b 2 - c - 1 0) 、 (b 2 - c - 1 2) 、 (b 2 -

10

20

30

40

50

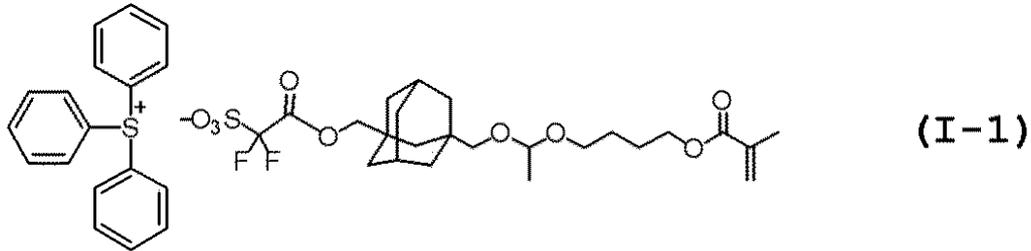
c - 14)、(b2 - c - 27)、(b2 - c - 30)及び(b2 - c - 31)で表されるカチオンが好ましい。

【0038】

塩(I)は、上述のスルホン酸アニオン及び有機カチオンの組合せである。これらのアニオンとカチオンとは任意に組合せることができる。塩(I)の具体例を表1に示す。

【0039】

表1において、塩(I-1)は以下に示す塩である。



10

【0040】

【表 1】

塩 (I)	スルホン酸アニオン	有機カチオン
(I-1)	(Ia-1)	(b2-c-1)
(I-2)	(Ia-2)	(b2-c-1)
(I-3)	(Ia-3)	(b2-c-1)
(I-4)	(Ia-4)	(b2-c-1)
(I-5)	(Ia-5)	(b2-c-1)
(I-6)	(Ia-6)	(b2-c-1)
(I-7)	(Ia-7)	(b2-c-1)
(I-8)	(Ia-8)	(b2-c-1)
(I-9)	(Ia-9)	(b2-c-1)
(I-10)	(Ia-10)	(b2-c-1)
(I-11)	(Ia-11)	(b2-c-1)
(I-12)	(Ia-12)	(b2-c-1)
(I-13)	(Ia-13)	(b2-c-1)
(I-14)	(Ia-14)	(b2-c-1)
(I-15)	(Ia-1)	(b2-c-10)
(I-16)	(Ia-2)	(b2-c-10)
(I-17)	(Ia-3)	(b2-c-10)
(I-18)	(Ia-4)	(b2-c-10)
(I-19)	(Ia-5)	(b2-c-10)
(I-20)	(Ia-6)	(b2-c-10)
(I-21)	(Ia-7)	(b2-c-10)
(I-22)	(Ia-8)	(b2-c-10)
(I-23)	(Ia-9)	(b2-c-10)
(I-24)	(Ia-10)	(b2-c-10)
(I-25)	(Ia-11)	(b2-c-10)
(I-26)	(Ia-12)	(b2-c-10)
(I-27)	(Ia-13)	(b2-c-10)
(I-28)	(Ia-14)	(b2-c-10)
(I-29)	(Ia-1)	(b2-c-12)
(I-30)	(Ia-2)	(b2-c-12)
(I-31)	(Ia-3)	(b2-c-12)
(I-32)	(Ia-4)	(b2-c-12)
(I-33)	(Ia-5)	(b2-c-12)
(I-34)	(Ia-6)	(b2-c-12)
(I-35)	(Ia-7)	(b2-c-12)
(I-36)	(Ia-8)	(b2-c-12)
(I-37)	(Ia-9)	(b2-c-12)
(I-38)	(Ia-10)	(b2-c-12)
(I-39)	(Ia-11)	(b2-c-12)
(I-40)	(Ia-12)	(b2-c-12)
(I-41)	(Ia-13)	(b2-c-12)
(I-42)	(Ia-14)	(b2-c-12)
(I-43)	(Ia-1)	(b2-c-14)
(I-44)	(Ia-2)	(b2-c-14)
(I-45)	(Ia-3)	(b2-c-14)
(I-46)	(Ia-4)	(b2-c-14)
(I-47)	(Ia-5)	(b2-c-14)
(I-48)	(Ia-6)	(b2-c-14)
(I-49)	(Ia-7)	(b2-c-14)
(I-50)	(Ia-8)	(b2-c-14)
(I-51)	(Ia-9)	(b2-c-14)
(I-52)	(Ia-10)	(b2-c-14)

10

20

30

40

塩 (I)	スルホン酸アニオン	有機カチオン
(I-53)	(Ia-11)	(b2-c-14)
(I-54)	(Ia-12)	(b2-c-14)
(I-55)	(Ia-13)	(b2-c-14)
(I-56)	(Ia-14)	(b2-c-14)
(I-57)	(Ia-1)	(b2-c-27)
(I-58)	(Ia-2)	(b2-c-27)
(I-59)	(Ia-3)	(b2-c-27)
(I-60)	(Ia-4)	(b2-c-27)
(I-61)	(Ia-5)	(b2-c-27)
(I-62)	(Ia-6)	(b2-c-27)
(I-63)	(Ia-7)	(b2-c-27)
(I-64)	(Ia-8)	(b2-c-27)
(I-65)	(Ia-9)	(b2-c-27)
(I-66)	(Ia-10)	(b2-c-27)
(I-67)	(Ia-11)	(b2-c-27)
(I-68)	(Ia-12)	(b2-c-27)
(I-69)	(Ia-13)	(b2-c-27)
(I-70)	(Ia-14)	(b2-c-27)
(I-71)	(Ia-1)	(b2-c-30)
(I-72)	(Ia-2)	(b2-c-30)
(I-73)	(Ia-3)	(b2-c-30)
(I-74)	(Ia-4)	(b2-c-30)
(I-75)	(Ia-5)	(b2-c-30)
(I-76)	(Ia-6)	(b2-c-30)
(I-77)	(Ia-7)	(b2-c-30)
(I-78)	(Ia-8)	(b2-c-30)
(I-79)	(Ia-9)	(b2-c-30)
(I-80)	(Ia-10)	(b2-c-30)
(I-81)	(Ia-11)	(b2-c-30)
(I-82)	(Ia-12)	(b2-c-30)
(I-83)	(Ia-13)	(b2-c-30)
(I-84)	(Ia-14)	(b2-c-30)
(I-85)	(Ia-1)	(b2-c-31)
(I-86)	(Ia-2)	(b2-c-31)
(I-87)	(Ia-3)	(b2-c-31)
(I-88)	(Ia-4)	(b2-c-31)
(I-89)	(Ia-5)	(b2-c-31)
(I-90)	(Ia-6)	(b2-c-31)
(I-91)	(Ia-7)	(b2-c-31)
(I-92)	(Ia-8)	(b2-c-31)
(I-93)	(Ia-9)	(b2-c-31)
(I-94)	(Ia-10)	(b2-c-31)
(I-95)	(Ia-11)	(b2-c-31)
(I-96)	(Ia-12)	(b2-c-31)
(I-97)	(Ia-13)	(b2-c-31)
(I-98)	(Ia-14)	(b2-c-31)

10

20

30

40

【0041】

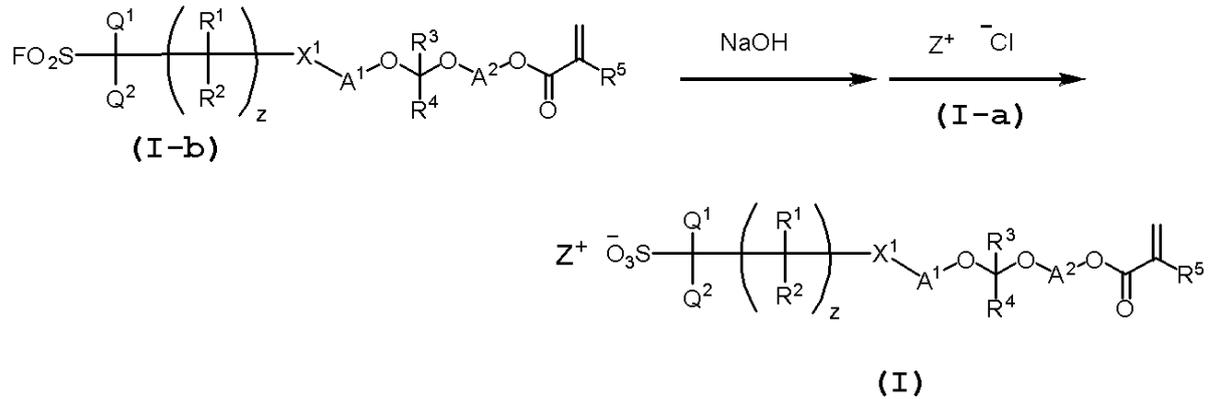
なかでも、塩 (I) は、塩 (I-1)、塩 (I-2)、塩 (I-3)、塩 (I-4)、塩 (I-15)、塩 (I-16)、塩 (I-17)、塩 (I-18)、塩 (I-29)、塩 (I-30)、塩 (I-31)、塩 (I-32)、塩 (I-43)、塩 (I-44)、塩 (I-45)、塩 (I-46)、塩 (I-57)、塩 (I-58)、塩 (I-59)、塩 (I-60)、塩 (I-71)、塩 (I-72)、塩 (I-73)、塩 (I-74)、塩 (I-85)、塩 (I-86)、塩 (I-87) 及び塩 (I-88) が好ましい。

【0042】

50

< 塩 (I) の製造方法 >

式 (I) で表される塩は、例えば、式 (I-b) で表される化合物を水酸化ナトリウムで処理した後、式 (I-a) で表される塩と、溶媒中で反応させることにより製造することができる。以下の式においては、特に断りのない限り、全ての符号はそれぞれ前記と同じ意味を表す。



10

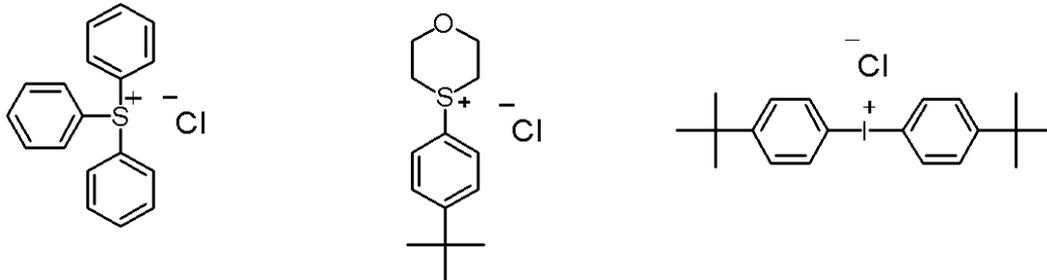
【0043】

反応は、-5 ~ 80 の温度範囲で、0.5 ~ 24 時間行うことが好ましい。

溶媒としては、クロロホルム、アセトニトリル、イオン交換水などが挙げられる。

式 (I-a) で表される塩は、下記式で表される塩等が挙げられ、市場より容易に入手することができる。

20

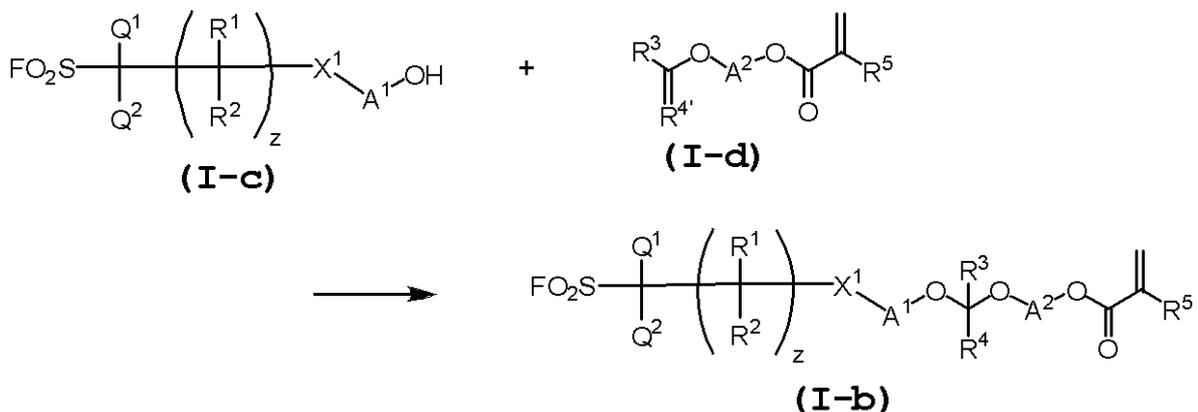


この塩の一方を代えることによって、式 (I) で表される種々の塩を、得ることができる。例えば、オキサチアニウムカチオンを有する式 (I) で表される塩は、ジフェニルヨードニウムを有する式 (I) で表される塩を、二安息香酸銅 (II) の存在下で、1,4-オキサチアンと反応させることにより、得ることができる。

30

【0044】

式 (I-b) で表される化合物は、式 (I-c) で表される化合物と、式 (I-d) で表される化合物とを、触媒の存在下、溶媒中で、反応させることにより得ることができる。



40

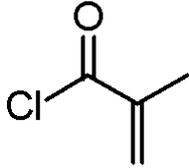
[式中、R^{4'} は、R⁴ から、水素原子を除いた基を表す。]

反応は、5 ~ 80 の温度範囲で、0.5 ~ 24 時間行うことが好ましい。

50

【 0 0 4 8 】

式 (I - h) で表される化合物は、下記式で表される化合物等が挙げられ、市場より容易に入手することができる。



【 0 0 4 9 】

< 式 (I) で表される塩を含む酸発生剤 >

本発明の酸発生剤は、塩 (I) を有効成分として含有する。酸発生剤においては、化合物 (I) は単独で用いてもよいし、2種以上を組み合わせ用いてもよい。

本発明の酸発生剤は、塩 (I) 以外の有効成分としてレジスト分野で公知の酸発生剤 (以下「酸発生剤 (B) 」という場合がある) を含有していてもよい。酸発生剤 (B) については後述する。

酸発生剤として塩 (I) 及び酸発生剤 (B) を含有する場合、塩 (I) と酸発生剤 (B) との含有量の比 (質量比、塩 (I) : 酸発生剤 (B)) は、通常、1 : 99 ~ 99 : 1、好ましくは 2 : 98 ~ 98 : 2、より好ましくは 5 : 95 ~ 95 : 5 であり、さらに好ましくは 10 : 90 ~ 40 : 60 であり、特に好ましくは 15 : 85 ~ 30 : 70 である。

【 0 0 5 0 】

< 式 (I) で表される塩に由来する構造単位を含む樹脂 >

本発明の樹脂は、式 (I) で表される塩に由来する構造単位 (以下「構造単位 (I) 」という場合がある。) を含む樹脂 (以下「樹脂 (A) 」という場合がある。) である。

樹脂 (A) は、1種の構造単位 (I) を含む単独重合体でもよいし、2種以上の構造単位 (I) を含む共重合体でもよい。

構造単位 (I) の含有量は、樹脂 (A) の全量に対して、通常 0 . 1 ~ 1 0 0 モル % であり、好ましくは 0 . 5 ~ 5 0 モル % であり、より好ましくは 0 . 8 ~ 3 0 モル % であり、さらに好ましくは 1 ~ 1 0 モル % である。

【 0 0 5 1 】

樹脂 (A) は、構造単位 (I) に加えて、さらに、構造単位 (I) 以外の酸不安定基を有する構造単位 (以下「構造単位 (a 1) 」という場合がある) を有していてもよい。ここで、「酸不安定基」は、脱離基を有し、酸との接触により脱離基が脱離して、構成単位が親水性基 (例えば、ヒドロキシ基又はカルボキシ基) を有する構成単位に変換する基を意味する。

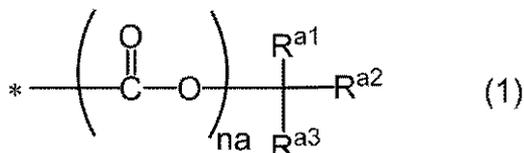
樹脂 (A) は、さらに、構造単位 (a 1) 以外の構造単位を含んでいることが好ましい。構造単位 (a 1) 以外の構造単位としては、酸不安定基を有さない構造単位 (以下「構造単位 (s) 」という場合がある)、その他の構造単位 (以下「構造単位 (t) 」という場合がある) 等が挙げられる。

【 0 0 5 2 】

< 構造単位 (a 1) >

構造単位 (a 1) は、酸不安定基を有するモノマー (以下「モノマー (a 1) 」という場合がある) から導かれる。

樹脂 (A) に含まれる酸不安定基は、基 (1) 及びノ又は基 (2) であることが好ましい。



10

20

30

40

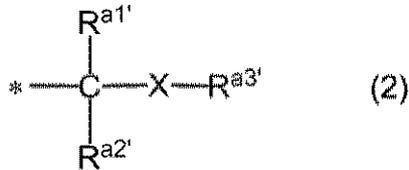
50

[式(1)中、 R^{a1} ~ R^{a3} は、互いに独立に、炭素数 1 ~ 8 のアルキル基、炭素数 3 ~ 20 の脂環式炭化水素基又はこれらを組合せた基を表すか、 R^{a1} 及び R^{a2} は互いに結合してそれらが結合する炭素原子とともに炭素数 3 ~ 20 の 2 価の脂環式炭化水素基を形成する。

n_a は、0 又は 1 を表す。

* は、結合手を表す。]

【0053】



10

[式(2)中、 $R^{a1'}$ 及び $R^{a2'}$ は、互いに独立に、水素原子又は炭素数 1 ~ 12 の炭化水素基を表し、 $R^{a3'}$ は、炭素数 1 ~ 20 の炭化水素基を表すか、 $R^{a2'}$ 及び $R^{a3'}$ は互いに結合してそれらが結合する炭素原子及び X とともに炭素数 3 ~ 20 の 2 価の複素環基を形成し、該炭化水素基及び該 2 価の複素環基に含まれる -CH₂- は、-O- 又は -S- で置き換わってもよい。

X は、酸素原子又は硫黄原子を表す。

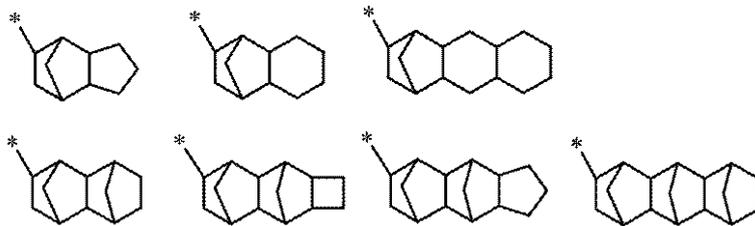
* は、結合手を表す。]

【0054】

20

R^{a1} ~ R^{a3} のアルキル基としては、メチル基、エチル基、プロピル基、*n*-ブチル基、*n*-ペンチル基、*n*-ヘキシル基、*n*-ヘプチル基、*n*-オクチル基等が挙げられる。

R^{a1} ~ R^{a3} の脂環式炭化水素基としては、単環式及び多環式のいずれでもよい。単環式の脂環式炭化水素基としては、例えば、シクロペンチル基、シクロヘキシル基、シクロヘプチル基、シクロオクチル基等のシクロアルキル基が挙げられる。多環式の脂環式炭化水素基としては、例えば、デカヒドロナフチル基、アダマンチル基、ノルボルニル基及び下記の基 (* は、結合手を表す。) 等が挙げられる。 R^{a1} ~ R^{a3} の脂環式炭化水素基は、好ましくは炭素数 3 ~ 16 の脂環式炭化水素基である。



30

【0055】

アルキル基と脂環式炭化水素基とを組合せた基としては、例えば、メチルシクロヘキシル基、ジメチルシクロヘキシル基、メチルノルボルニル基、シクロヘキシルメチル基、アダマンチルメチル基、ノルボルニルエチル基等が挙げられる。

40

n_a は、好ましくは 0 である。

【0056】

R^{a1} 及び R^{a2} が互いに結合して 2 価の脂環式炭化水素基を形成する場合の -C(R^{a1})(R^{a2})(R^{a3}) としては、下記の基が挙げられる。2 価の脂環式炭化水素基は、好ましくは炭素数 3 ~ 12 である。* は、-O- との結合手を表す。

モノマー (a1) は、好ましくは、酸不安定基とエチレン性不飽和結合とを有するモノマー、より好ましくは酸不安定基を有する (メタ) アクリル系モノマーである。

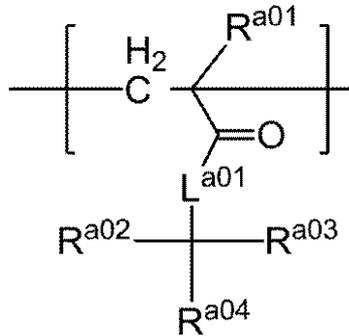
【0062】

酸不安定基を有する (メタ) アクリル系モノマーのうち、好ましくは、炭素数 5 ~ 20 の脂環式炭化水素基を有するものが挙げられる。脂環式炭化水素基のような嵩高い構造を有するモノマー (a1) に由来する構造単位を有する樹脂 (A) をレジスト組成物に使用すれば、レジストパターンの解像度を向上させることができる。

【0063】

式 (1) で表される基を有する (メタ) アクリル系モノマーに由来する構造単位として、好ましくは、式 (a1-0) で表される構造単位、式 (a1-1) で表される構造単位又は式 (a1-2) で表される構造単位が挙げられる。これらは単独で使用してもよく、2種以上を併用してもよい。本明細書では、式 (a1-0) で表される構造単位、式 (a1-1) で表される構造単位及び式 (a1-2) で表される構造単位を、それぞれ構造単位 (a1-0)、構造単位 (a1-1) 及び構造単位 (a1-2) と、構造単位 (a1-0) を誘導するモノマー、構造単位 (a1-1) を誘導するモノマー及び構造単位 (a1-2) を誘導するモノマーを、それぞれモノマー (a1-0)、モノマー (a1-1) 及びモノマー (a1-2) という場合がある。

【0064】



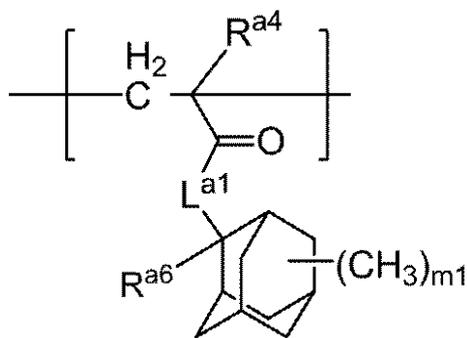
(a1-0)

[式 (a1-0) 中、
L^{a01} は、酸素原子又は * - O - (CH₂)_{k01} - CO - O - を表し、k01 は 1 ~ 7 の整数を表し、* はカルボニル基との結合手を表す。

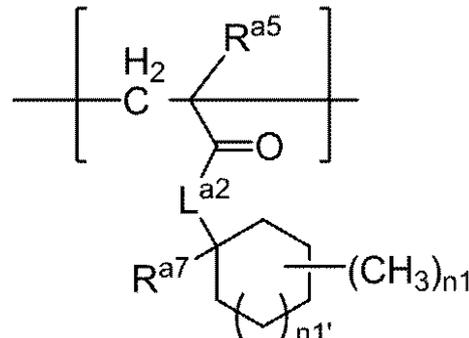
R^{a01} は、水素原子又はメチル基を表す。

R^{a02} ~ R^{a04} は、互いに独立に、炭素数 1 ~ 8 のアルキル基、炭素数 3 ~ 18 の脂環式炭化水素基又はこれらを組合せた基を表す。]

【0065】



(a1-1)



(a1-2)

[式 (a1-1) 及び式 (a1-2) 中、

10

20

30

40

50

L^{a1} 及び L^{a2} は、互いに独立に、 $-O-$ 又は $*-O-(CH_2)_{k1}-CO-O-$ を表し、 $k1$ は 1 ~ 7 の整数を表し、 $*$ は $-CO-$ との結合手を表す。

R^{a4} 及び R^{a5} は、互いに独立に、水素原子又はメチル基を表す。

R^{a6} 及び R^{a7} は、互いに独立に、炭素数 1 ~ 8 のアルキル基、炭素数 3 ~ 18 の脂環式炭化水素基又はこれらを組合せることにより形成される基を表す。

$m1$ は、0 ~ 14 の整数を表す。

$n1$ は、0 ~ 10 の整数を表す。

$n1'$ は、0 ~ 3 の整数を表す。]

【0066】

L^{a01} は、好ましくは、酸素原子又は $*-O-(CH_2)_{k01}-CO-O-$ であり (但し、 $k01$ は、好ましくは 1 ~ 4 の整数、より好ましくは 1 である。)、より好ましくは酸素原子である。

$R^{a02} \sim R^{a04}$ のアルキル基、脂環式炭化水素基及びこれらを組合せた基としては、式 (1) の $R^{a1} \sim R^{a3}$ で挙げた基と同様の基が挙げられる。

$R^{a02} \sim R^{a04}$ のアルキル基の炭素数は、好ましくは 6 以下である。

$R^{a02} \sim R^{a04}$ の脂環式炭化水素基の炭素数は、好ましくは 8 以下であり、より好ましくは 6 以下である。

アルキル基と脂環式炭化水素基とを組合せた基は、これらアルキル基と脂環式炭化水素基とを組合せた合計炭素数が、18 以下であることが好ましい。このような基としては、例えば、メチルシクロヘキシル基、ジメチルシクロヘキシル基、メチルノルボルニル基、メチルアダマンチル基、シクロヘキシルメチル基、メチルシクロヘキシルメチル基、アダマンチルメチル基、ノルボルニルメチル基等が挙げられる。

R^{a02} 及び R^{a03} は、好ましくは炭素数 1 ~ 6 のアルキル基であり、より好ましくはメチル基又はエチル基である。

R^{a04} は、好ましくは炭素数 1 ~ 6 のアルキル基又は炭素数 5 ~ 12 の脂環式炭化水素基であり、より好ましくはメチル基、エチル基、シクロヘキシル基又はアダマンチル基である。

【0067】

L^{a1} 及び L^{a2} は、好ましくは、 $-O-$ 又は $*-O-(CH_2)_{k1'}-CO-O-$ であり (但し、 $k1'$ は、1 ~ 4 の整数であり、好ましくは 1 である。)、より好ましくは $-O-$ である。

R^{a4} 及び R^{a5} は、好ましくはメチル基である。

R^{a6} 及び R^{a7} のアルキル基、脂環式炭化水素基及びこれらを組合せた基としては、式 (1) の $R^{a1} \sim R^{a3}$ で挙げた基と同様の基が挙げられる。

R^{a6} 及び R^{a7} のアルキル基の炭素数は、好ましくは 6 以下である。

R^{a6} 及び R^{a7} の脂環式炭化水素基の炭素数は、好ましくは 8 以下であり、より好ましくは 6 以下である。

$m1$ は、好ましくは 0 ~ 3 の整数であり、より好ましくは 0 又は 1 である。

$n1$ は、好ましくは 0 ~ 3 の整数であり、より好ましくは 0 又は 1 である。

$n1'$ は好ましくは 0 又は 1 である。

【0068】

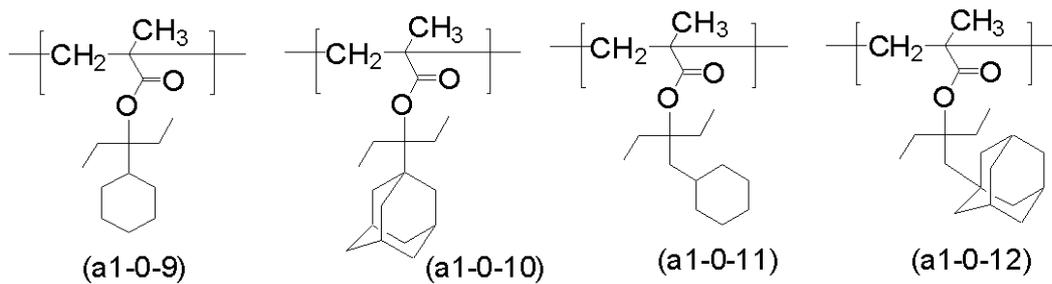
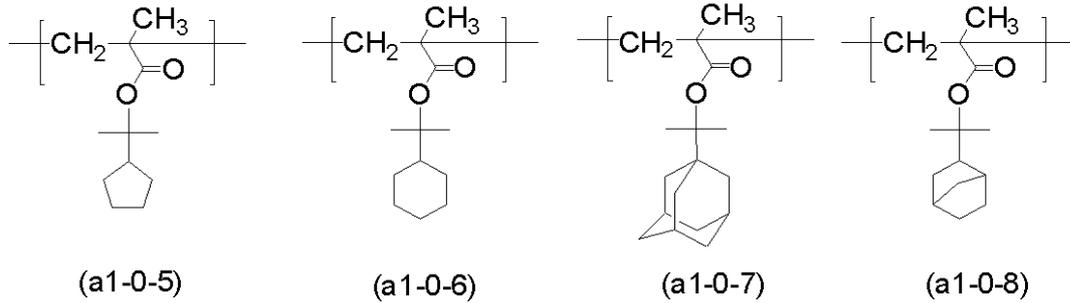
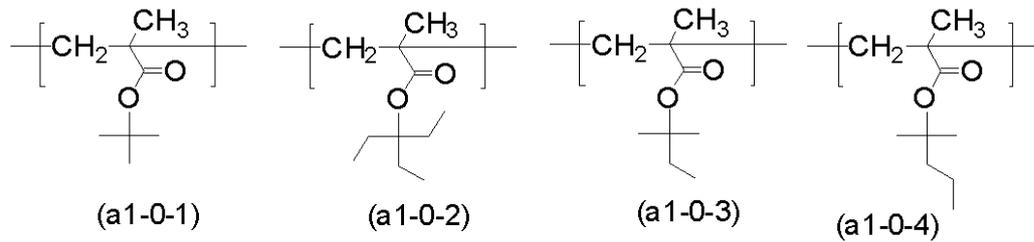
モノマー (a1-0) としては、例えば、式 (a1-0-1) ~ 式 (a1-0-12) のいずれかで表されるモノマーが好ましく、式 (a1-0-1) ~ 式 (a1-0-10) のいずれかで表されるモノマーがより好ましい。

10

20

30

40

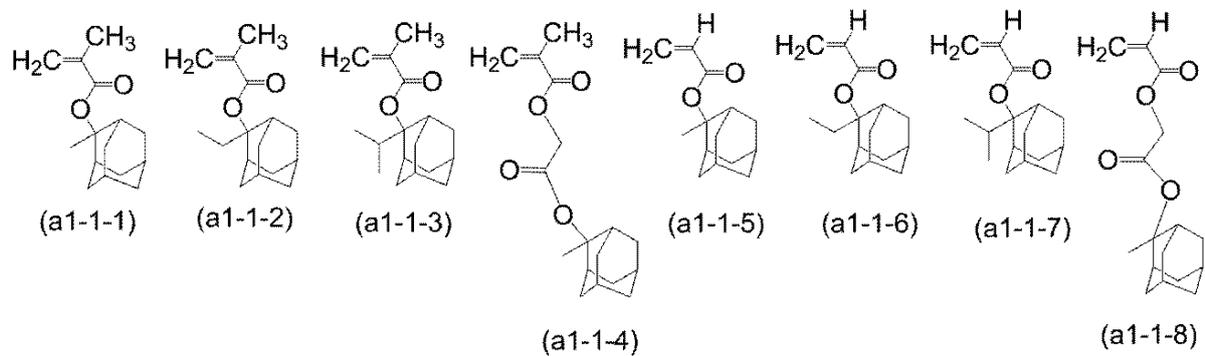


【 0 0 6 9 】

上記の構造単位において、 R^{a01} に相当するメチル基が水素原子に置き換わった構造単位も、構造単位(a1-0)の具体例として挙げることができる。

【 0 0 7 0 】

モノマー(a1-1)としては、例えば、特開2010-204646号公報に記載されたモノマーが挙げられる。中でも、式(a1-1-1)~式(a1-1-8)のいずれかで表されるモノマーが好ましく、式(a1-1-1)~式(a1-1-4)のいずれかで表されるモノマーがより好ましい。



【 0 0 7 1 】

モノマー(a1-2)としては、例えば、1-メチルシクロペンタン-1-イル(メタ)アクリレート、1-エチルシクロペンタン-1-イル(メタ)アクリレート、1-メチルシクロヘキサン-1-イル(メタ)アクリレート、1-エチルシクロヘキサン-1-イル(メタ)アクリレート、1-エチルシクロヘプタン-1-イル(メタ)アクリレート、1-エチルシクロオクタン-1-イル(メタ)アクリレート、1-イソプロピルシクロペンタン-1-イル(メタ)アクリレート、1-イソプロピルシクロヘキサン-1-イル(メタ)アクリレート等が挙げられる。式(a1-2-1)~式(a1-2-12)のいずれかで表されるモノマーが好ましく、式(a1-2-3)、式(a1-2-4)、式(a

10

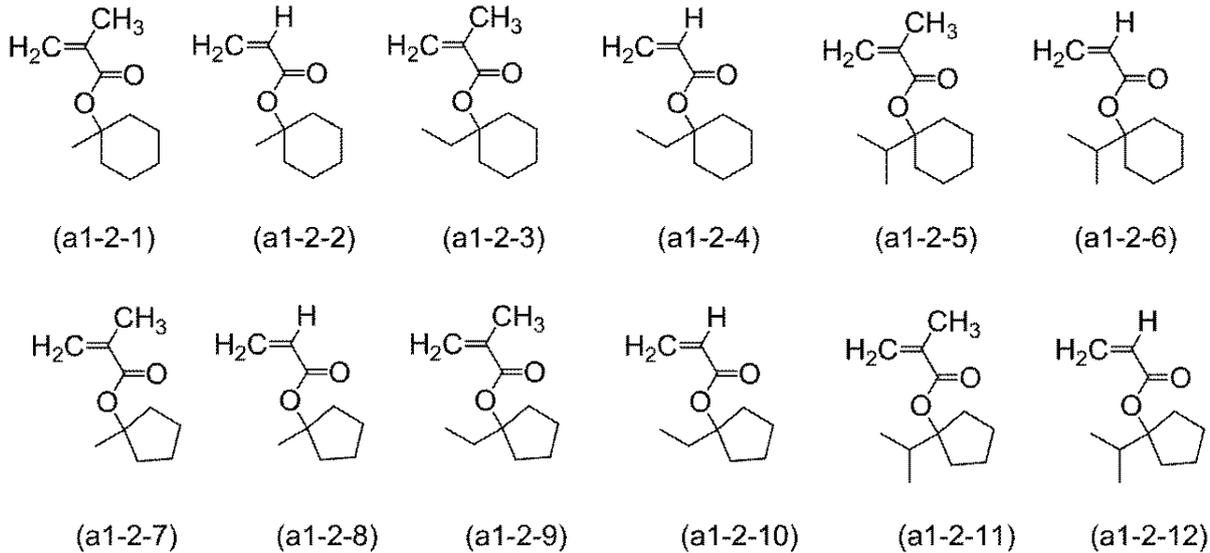
20

30

40

50

1 - 2 - 9) 及び式 (a 1 - 2 - 1 0) で表されるモノマーがより好ましく、式 (a 1 - 2 - 3) 及び式 (a 1 - 2 - 9) で表されるモノマーがさらに好ましい。



10

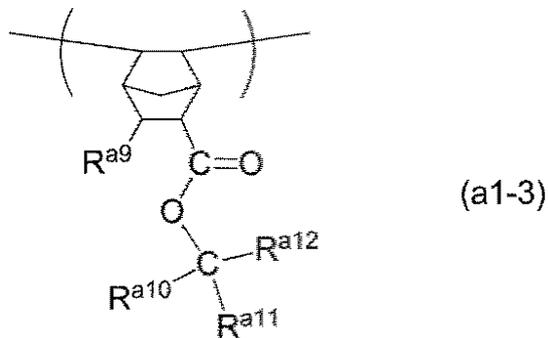
【 0 0 7 2 】

樹脂 (A) が構造単位 (a 1 - 0) 及び / 又は構造単位 (a 1 - 1) 及び / 又は構造単位 (a 1 - 2) を含む場合、これらの合計含有率は、樹脂 (A) の全構造単位の合計に対して、通常 1 0 ~ 9 5 モル % であり、好ましくは 1 5 ~ 9 0 モル % であり、より好ましくは 2 0 ~ 8 5 モル % である。

20

【 0 0 7 3 】

さらに、基 (1) を有する構造単位 (a 1) としては、式 (a 1 - 3) で表される構造単位も挙げられる。式 (a 1 - 3) で表される構造単位を、構造単位 (a 1 - 3) という場合がある。また、構造単位 (a 1 - 3) を誘導するモノマーを、モノマー (a 1 - 3) という場合がある。



30

[式 (a 1 - 3) 中、

R^{a9} は、ヒドロキシ基を有していてもよい炭素数 1 ~ 3 の脂肪族炭化水素基、カルボキシ基、シアノ基、水素原子又は $-COOR^{a13}$ を表す。

R^{a13} は、炭素数 1 ~ 8 の脂肪族炭化水素基、炭素数 3 ~ 2 0 の脂環式炭化水素基、又はこれらを組合せることにより形成される基を表し、該脂肪族炭化水素基及び該脂環式炭化水素基に含まれる水素原子は、ヒドロキシ基で置換されていてもよく、該脂肪族炭化水素基及び該脂環式炭化水素基に含まれる $-CH_2-$ は、 $-O-$ 又は $-CO-$ に置き換わっていてもよい。

40

$R^{a10} \sim R^{a12}$ は、互いに独立に、炭素数 1 ~ 8 のアルキル基、炭素数 3 ~ 2 0 の脂環式炭化水素基又はこれらを組合せることにより形成される基を表すか、 R^{a10} 及び R^{a11} は互いに結合して、それらが結合する炭素原子とともに炭素数 3 ~ 2 0 の 2 個の脂環式炭化水素基を形成する。]

【 0 0 7 4 】

R^{a9} のヒドロキシ基を有していてもよい脂肪族炭化水素基としては、メチル基、エチ

50

ル基、プロピル基、ヒドロキシメチル基及び2-ヒドロキシエチル基等が挙げられる。

-COOR^{a13}は、例えば、メトキシカルボニル基及びエトキシカルボニル基等のアルコキシ基にカルボニル基が結合した基が挙げられる。

R^{a13}の炭素数1~8の脂肪族炭化水素基としては、メチル基、エチル基、プロピル基、イソプロピル基、n-ブチル基、sec-ブチル基、tert-ブチル基、n-ペンチル基、n-ヘキシル基、n-ヘプチル基、2-エチルヘキシル基、n-オクチル基等が挙げられる。

R^{a13}の炭素数3~20の脂環式炭化水素基としては、シクロペンチル基、シクロプロピル基、アダマンチル基、アダマンチルメチル基、1-アダマンチル-1-メチルエチル基、2-オキソ-オキサラン-3-イル基及び2-オキソ-オキサラン-4-イル基等が挙げられる。

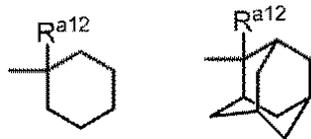
10

R^{a10}~R^{a12}のアルキル基としては、メチル基、エチル基、n-プロピル基、イソプロピル基、n-ブチル基、sec-ブチル基、tert-ブチル基、n-ペンチル基、n-ヘキシル基、n-ヘプチル基、2-エチルヘキシル基、n-オクチル基等が挙げられる。

R^{a10}~R^{a12}の脂環式炭化水素基としては、単環式又は多環式のいずれでもよく、単環式の脂環式炭化水素基としては、例えば、シクロプロピル基、シクロブチル基、シクロペンチル基、シクロヘキシル基、メチルシクロヘキシル基、ジメチルシクロヘキシル基、シクロヘプチル基、シクロオクチル基、シクロヘプチル基、シクロデシル基等のシクロアルキル基が挙げられる。多環式の脂環式炭化水素基としては、例えば、デカヒドロナフチル基、アダマンチル基、2-アルキルアダマンタン-2-イル基、1-(アダマンタン-1-イル)アルカン-1-イル基、ノルボルニル基、メチルノルボルニル基及びイソボルニル基等が挙げられる。

20

R^{a10}及びR^{a11}が互いに結合して、それらが結合している炭素原子とともに2価の脂環式炭化水素基を形成する場合の-C(R^{a10})(R^{a11})(R^{a12})としては、下記の基が好ましい。



30

【0075】

モノマー(a1-3)は、具体的には、5-ノルボルネン-2-カルボン酸-tert-ブチル、5-ノルボルネン-2-カルボン酸1-シクロヘキシル-1-メチルエチル、5-ノルボルネン-2-カルボン酸1-メチルシクロヘキシル、5-ノルボルネン-2-カルボン酸2-メチル-2-アダマンチル、5-ノルボルネン-2-カルボン酸2-エチル-2-アダマンチル、5-ノルボルネン-2-カルボン酸1-(4-メチルシクロヘキシル)-1-メチルエチル、5-ノルボルネン-2-カルボン酸1-(4-ヒドロキシシクロヘキシル)-1-メチルエチル、5-ノルボルネン-2-カルボン酸1-メチル-1-(4-オキソシクロヘキシル)エチル及び5-ノルボルネン-2-カルボン酸1-(1-アダマンチル)-1-メチルエチル等が挙げられる。

40

【0076】

構造単位(a1-3)を含む樹脂(A)は、立体的に嵩高い構造単位が含まれることとなるため、このような樹脂(A)を含む本発明のレジスト組成物からは、より高解像度でレジストパターンを得ることができる。また、主鎖に剛直なノルボルナン環が導入されるため、得られるレジストパターンは、ドライエッチング耐性に優れる傾向がある。

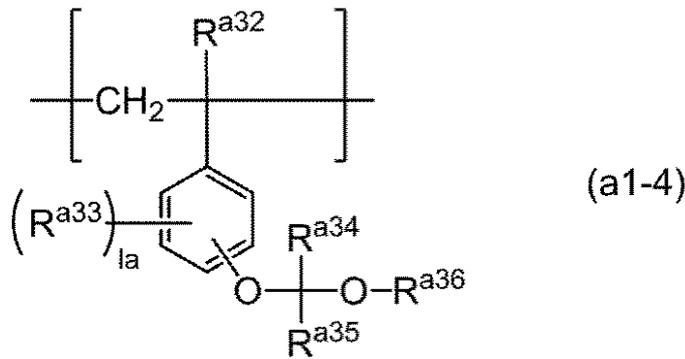
【0077】

樹脂(A)が構造単位(a1-3)を含む場合、その含有率は、樹脂(A)の全構造単位の合計に対して、10~95モル%であることが好ましく、15~90モル%であることがより好ましく、20~85モル%であることがさらに好ましい。

【0078】

50

基(2)で表される基を有する構造単位(a1)としては、式(a1-4)で表される構造単位(以下、「構造単位(a1-4)」という場合がある。)が挙げられる。



10

[式(a1-4)中、

R^{a32} は、水素原子、ハロゲン原子、又は、ハロゲン原子を有してもよい炭素数1~6のアルキル基を表す。

R^{a33} は、ハロゲン原子、ヒドロキシ基、炭素数1~6のアルキル基、炭素数1~6のアルコキシ基、炭素数2~4のアシル基、炭素数2~4のアシルオキシ基、アクリロイルオキシ基又はメタクリロイルオキシ基を表す。

l_a は0~4の整数を表す。 l_a が2以上である場合、複数の R^{a33} は互いに同一であっても異なってもよい。

20

R^{a34} 及び R^{a35} は、互いに独立に、水素原子又は炭素数1~12の炭化水素基を表し、 R^{a36} は、炭素数1~20の炭化水素基を表すか、 R^{a34} 及び R^{a35} は互いに結合してそれらが結合するC-Oとともに炭素数3~20の2価の複素環基を形成し、該炭化水素基及び該2価の複素環基に含まれる $-CH_2-$ は、 $-O-$ 又は $-S-$ で置き換わってもよい。]

【0079】

R^{a32} 及び R^{a33} のアルキル基としては、メチル基、エチル基、プロピル基、イソプロピル基、ブチル基、ペンチル基及びヘキシル基等が挙げられる。該アルキル基としては、炭素数1~4のアルキル基が好ましく、メチル基又はエチル基がより好ましく、メチル基がさらに好ましい。

30

R^{a32} 及び R^{a33} のハロゲン原子としては、フッ素原子、塩素原子及び臭素原子等が挙げられる。

ハロゲン原子を有してもよいアルキル基としては、トリフルオロメチル基、ジフルオロメチル基、メチル基、ペルフルオロエチル基、1,1,1-トリフルオロエチル基、1,1,1,2,2-ペルフルオロエチル基、エチル基、ペルフルオロプロピル基、1,1,1,2,2,2-ペルフルオロプロピル基、プロピル基、ペルフルオロブチル基、1,1,1,2,2,2,3,3,3,4,4-ペルフルオロブチル基、ブチル基、ペルフルオロペンチル基、1,1,1,1,2,2,2,3,3,3,4,4-ペルフルオロペンチル基、 n -ペンチル基、 n -ヘキシル基、 n -ペルフルオロヘキシル基等が挙げられる。

アルコキシ基としては、メトキシ基、エトキシ基、プロポキシ基、ブトキシ基、ペンチルオキシ基及びヘキシルオキシ基等が挙げられる。なかでも、炭素数1~4のアルコキシ基が好ましく、メトキシ基又はエトキシ基がより好ましく、メトキシ基がさらに好ましい。

40

アシル基としては、アセチル基、プロピオニル基及びブチリル基が挙げられる。

アシルオキシ基としては、アセチルオキシ基、プロピオニルオキシ基、ブチリルオキシ基等が挙げられる。

R^{a34} 及び R^{a35} の炭化水素基としては、式(2)の $R^{a1'}$ 及び $R^{a2'}$ と同様の基が挙げられる。

R^{a36} としては、炭素数1~18のアルキル基、炭素数3~18の脂環式炭化水素基、炭素数6~18の芳香族炭化水素基又はこれらが組合せることにより形成される基が挙

50

げられる。

【0080】

式(a1-4)において、 R^{a32} は、水素原子であることが好ましい。

R^{a33} は、炭素数1~4のアルコキシ基であることが好ましく、メトキシ基及びエトキシ基であることがより好ましく、メトキシ基であることがさらに好ましい。

l_a は、0又は1であることが好ましく、0であることがより好ましい。

R^{a34} は、好ましくは水素原子である。

R^{a35} は、好ましくは炭素数1~12の炭化水素基であり、より好ましくはメチル基又はエチル基である。

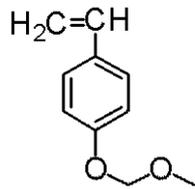
R^{a36} の炭化水素基としては、好ましくは炭素数1~18のアルキル基、炭素数3~18の脂環式炭化水素基、炭素数6~18の芳香族炭化水素基又はこれらを組み合わせることにより形成される基が挙げられ、より好ましくは炭素数1~18のアルキル基、炭素数3~18の脂環式脂肪族炭化水素基又は炭素数7~18のアラルキル基が挙げられる。 R^{a36} におけるアルキル基及び前記脂環式炭化水素基は無置換であることが好ましい。 R^{a36} における芳香族炭化水素基が置換基を有する場合、その置換基としては炭素数6~10のアリールオキシ基が好ましい。

10

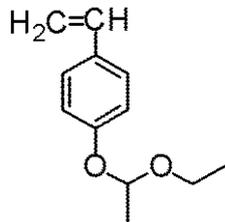
【0081】

構造単位(a1-4)を導くモノマーとしては、例えば、特開2010-204646号公報に記載されたモノマーが挙げられる。中でも、式(a1-4-1)~式(a1-4-8)でそれぞれ表されるモノマーが好ましく、式(a1-4-1)~式(a1-4-5)及び式(a1-4-8)でそれぞれ表されるモノマーがより好ましい。

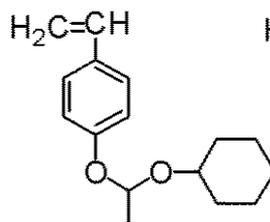
20



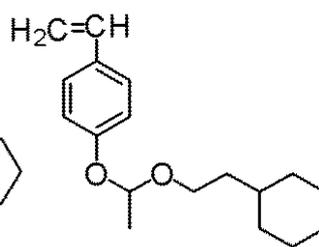
(a1-4-1)



(a1-4-2)

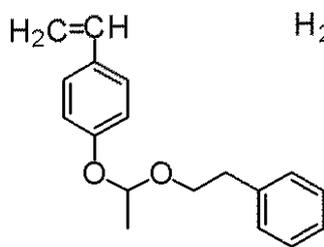


(a1-4-3)

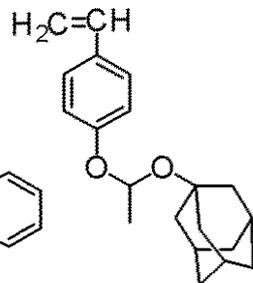


(a1-4-4)

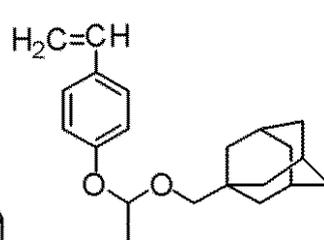
30



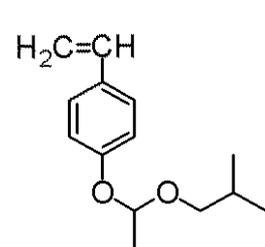
(a1-4-5)



(a1-4-6)



(a1-4-7)



(a1-4-8)

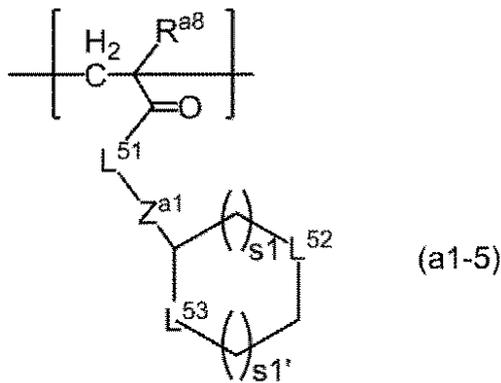
40

【0082】

樹脂(A)が、構造単位(a1-4)を有する場合、その含有率は、樹脂(A)の全構造単位の合計に対して、10~95モル%であることが好ましく、15~90モル%であることがより好ましく、20~85モル%であることがさらに好ましい。

【0083】

式(2)で表される基を有する(メタ)アクリル系モノマーに由来する構造単位としては、式(a1-5)で表される構造単位(以下「構造単位(a1-5)」という場合がある)も挙げられる。



10

[式(a1-5)中、

R^{a8} は、ハロゲン原子を有してもよい炭素数1~6のアルキル基、水素原子又はハロゲン原子を表す。

Z^{a1} は、単結合又は $* - (CH_2)_{h3} - CO - L^{54}$ を表し、 $h3$ は1~4の整数を表し、 $*$ は、 L^{51} との結合手を表す。

$L^{51} \sim L^{54}$ は、互いに独立に、 $-O-$ 又は $-S-$ を表す。

$s1$ は、1~3の整数を表す。

$s1'$ は、0~3の整数を表す。]

【0084】

20

ハロゲン原子としては、フッ素原子及び塩素原子が挙げられ、好ましくはフッ素原子が挙げられる。ハロゲン原子を有してもよい炭素数1~6のアルキル基としては、メチル基、エチル基、プロピル基、ブチル基、ペンチル基、ヘキシル基、ヘプチル基、オクチル基、フルオロメチル基及びトリフルオロメチル基が挙げられる。

式(a1-5)においては、 R^{a8} は、水素原子、メチル基又はトリフルオロメチル基であることが好ましい。

L^{51} は、酸素原子であることが好ましい。

L^{52} 及び L^{53} のうち、一方が $-O-$ であり、他方が $-S-$ であることが好ましい。

$s1$ は、1が好ましい。

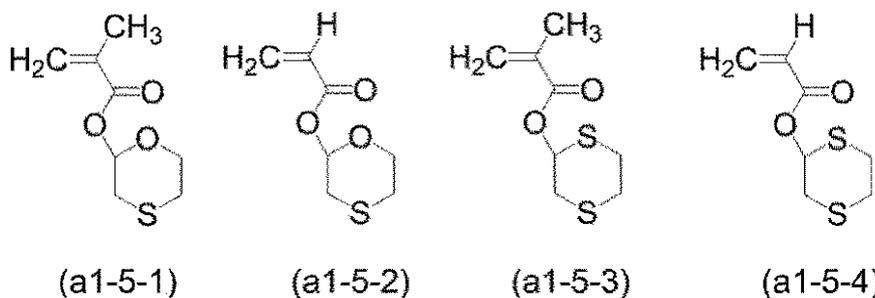
$s1'$ は、0~2の整数が好ましい。

30

Z^{a1} は、単結合又は $* - CH_2 - CO - O -$ であることが好ましい。

【0085】

構造単位(a1-5)を導くモノマーとしては、例えば、特開2010-61117号公報に記載されたモノマーが挙げられる。中でも、式(a1-5-1)~式(a1-5-4)でそれぞれ表されるモノマーが好ましく、式(a1-5-1)又は式(a1-5-2)で表されるモノマーがより好ましい。



40

【0086】

樹脂(A)が、構造単位(a1-5)を有する場合、その含有率は、樹脂(A)の全構造単位の合計に対して、1~50モル%であることが好ましく、3~45モル%であることがより好ましく、5~40モル%であることがさらに好ましい。

【0087】

樹脂(A)中の酸不安定基を有する構造単位(a1)としては、構造単位(a1-0)

50

、構造単位 (a 1 - 1)、構造単位 (a 1 - 2) 及び構造単位 (a 1 - 5) からなる群から選ばれる一種以上が好ましく、二種以上がより好ましく、構造単位 (a 1 - 1) 及び構造単位 (a 1 - 2) の組合せ、構造単位 (a 1 - 1) 及び構造単位 (a 1 - 5) の組合せ、構造単位 (a 1 - 1) 及び構造単位 (a 1 - 0) の組合せ、構造単位 (a 1 - 2) 及び構造単位 (a 1 - 0) の組合せ、構造単位 (a 1 - 5) 及び構造単位 (a 1 - 0) の組合せ、構造単位 (a 1 - 0)、構造単位 (a 1 - 1) 及び構造単位 (a 1 - 2) の組合せ、構造単位 (a 1 - 0)、構造単位 (a 1 - 1) 及び構造単位 (a 1 - 5) の組合せがさらに好ましく、構造単位 (a 1 - 1) 及び構造単位 (a 1 - 2) の組合せ、構造単位 (a 1 - 1) 及び構造単位 (a 1 - 5) の組合せがさらにより好ましい。

構造単位 (a 1) は、好ましくは構造単位 (a 1 - 1) を含む。

10

【 0 0 8 8 】

構造単位 (s)

本発明の樹脂 (A) は、さらに、酸不安定基を有さない構造単位 (以下「構造単位 (s) 」という場合がある) を有していてもよい。

構造単位 (s) は、酸不安定基を有さないモノマー (以下「モノマー (s) 」という場合がある) から導かれる。構造単位 (s) を導くモノマーは、レジスト分野で公知の酸不安定基を有さないモノマーを使用できる。

構造単位 (s) としては、ヒドロキシ基又はラクトン環を有し、かつ酸不安定基を有さない構造単位が好ましい。ヒドロキシ基を有し、かつ酸不安定基を有さない構造単位 (以下「構造単位 (a 2) 」という場合がある) 及びノ又はラクトン環を有し、かつ酸不安定基を有さない構造単位 (以下「構造単位 (a 3) 」という場合がある) を有する樹脂を本発明のレジスト組成物に使用すれば、レジストパターンの解像度及び基板との密着性を向上させることができる。

20

【 0 0 8 9 】

構造単位 (a 2)

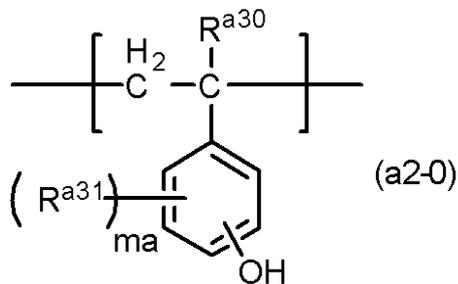
構造単位 (a 2) が有するヒドロキシ基は、アルコール性ヒドロキシ基でも、フェノール性ヒドロキシ基でもよい。

本発明のレジスト組成物からレジストパターンを製造するとき、露光光源として Kr F エキシマレーザ (2 4 8 n m)、電子線又は EU V (超紫外光) 等の高エネルギー線を用いる場合には、構造単位 (a 2) として、フェノール性ヒドロキシ基を有する構造単位 (a 2) を用いることが好ましい。また、Ar F エキシマレーザ (1 9 3 n m) 等を用いる場合には、構造単位 (a 2) として、アルコール性ヒドロキシ基を有する構造単位 (a 2) が好ましく、構造単位 (a 2 - 1) を用いることがより好ましい。構造単位 (a 2) としては、1 種を単独で含んでいてもよく、2 種以上を含んでいてもよい。

30

【 0 0 9 0 】

フェノール性ヒドロキシ基有する構造単位 (a 2) としては、式 (a 2 - 0) で表される構造単位 (以下「構造単位 (a 2 - 0) 」という場合がある。) が挙げられる。



40

[式 (a 2 - 0) 中、

R^{a 3 0} は、水素原子、ハロゲン原子又はハロゲン原子を有してもよい炭素数 1 ~ 6 のアルキル基を表す。

R^{a 3 1} は、ハロゲン原子、ヒドロキシ基、炭素数 1 ~ 6 のアルキル基、炭素数 1 ~ 6 のアルコキシ基、炭素数 2 ~ 4 のアシル基、炭素数 2 ~ 4 のアシルオキシ基、アクリロイ

50

ルオキシ基又はメタクリロイルオキシ基を表す。

$m a$ は 0 ~ 4 の整数を表す。 $m a$ が 2 以上の整数である場合、複数の $R^{a 3 1}$ は互いに同一であっても異なってもよい。]

【 0 0 9 1 】

$R^{a 3 0}$ のハロゲン原子を有してもよい炭素数 1 ~ 6 のアルキル基としては、トリフルオロメチル基、ジフルオロメチル基、メチル基、ペルフルオロエチル基、1, 1, 1 - トリフルオロエチル基、1, 1, 2, 2 - テトラフルオロエチル基、エチル基、ペルフルオロプロピル基、1, 1, 1, 2, 2 - ペンタフルオロプロピル基、プロピル基、ペルフルオロブチル基、1, 1, 2, 2, 3, 3, 4, 4 - オクタフルオロブチル基、ブチル基、ペルフルオロペンチル基、1, 1, 1, 2, 2, 3, 3, 4, 4 - ノナフルオロペンチル基、 n - ペンチル基、 n - ヘキシル基、 n - ペルフルオロヘキシル基等が挙げられる。 $R^{a 3 0}$ としては、水素原子又は炭素数 1 ~ 4 のアルキル基が好ましく、水素原子、メチル基又はエチル基がより好ましく、水素原子又はメチル基がさらに好ましい。

10

$R^{a 3 1}$ のアルコキシ基としては、メトキシ基、エトキシ基、プロポキシ基、 t - ブトキシ基、ペンチルオキシ基及びヘキシルオキシ基等が挙げられ、炭素数 1 ~ 4 のアルコキシ基が好ましく、メトキシ基又はエトキシ基がより好ましく、メトキシ基がさらに好ましい。

$R^{a 3 1}$ のアシル基としては、アセチル基、プロピオニル基及びブチリル基等が挙げられる。

$R^{a 3 1}$ のアシルオキシ基としては、アセチルオキシ基、プロピオニルオキシ基、ブチリルオキシ基等が挙げられる。

20

$m a$ としては、0、1 又は 2 が好ましく、0 又は 1 がより好ましく、0 が特に好ましい。

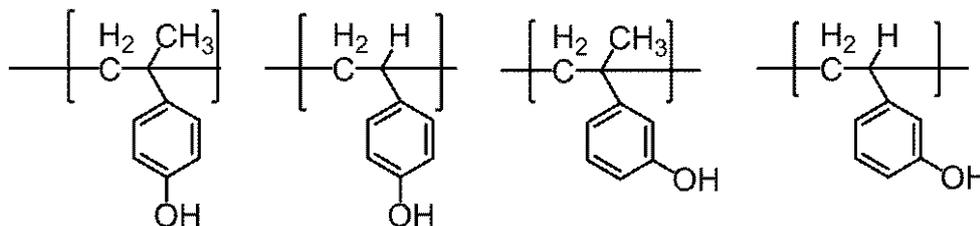
【 0 0 9 2 】

構造単位 (a 2 - 0) を誘導するモノマーとしては、例えば、特開 2 0 1 0 - 2 0 4 6 3 4 号公報に記載されているモノマーが挙げられる。

中でも、構造単位 (a 2 - 0) としては、式 (a 2 - 0 - 1)、式 (a 2 - 0 - 2)、式 (a 2 - 0 - 3) 及び式 (a 2 - 0 - 4) でそれぞれ表されるものが好ましく、式 (a 2 - 0 - 1) 又は式 (a 2 - 0 - 2) で表される構造単位がより好ましい。

【 0 0 9 3 】

30



(a2-0-1)

(a2-0-2)

(a2-0-3)

(a2-0-4)

【 0 0 9 4 】

40

構造単位 (a 2 - 0) を含む樹脂 (A) は、構造単位 (a 2 - 0) を誘導するモノマーが有するフェノール性ヒドロキシ基を保護基で保護したモノマーを用いて重合反応を行い、その後脱保護処理することにより製造できる。ただし、脱保護処理を行う際には、構造単位 (a 1) が有する酸不安定基を著しく損なわないようにして行う必要がある。このような保護基としては、アセチル基等が挙げられる。

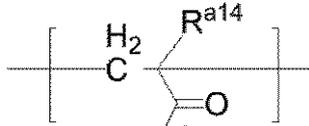
【 0 0 9 5 】

樹脂 (A) が、フェノール性ヒドロキシ基を有する構造単位 (a 2 - 0) を有する場合、その含有率は、樹脂 (A) の全構造単位の合計に対して、5 ~ 95 モル%であることが好ましく、10 ~ 80 モル%であることがより好ましく、15 ~ 80 モル%であることがさらに好ましい。

50

【0096】

アルコール性ヒドロキシ基を有する構造単位(a2)としては、式(a2-1)で表される構造単位(以下「構造単位(a2-1)」という場合がある。)が挙げられる。



(a2-1)

[式(a2-1)中、

L^{a3} は、 $-O-$ 又は $*-O-(CH_2)_{k2}-CO-O-$ を表し、

$k2$ は1~7の整数を表す。 $*$ は $-CO-$ との結合手を表す。

R^{a14} は、水素原子又はメチル基を表す。

R^{a15} 及び R^{a16} は、互いに独立に、水素原子、メチル基又はヒドロキシ基を表す。

$o1$ は、0~10の整数を表す。]

【0097】

式(a2-1)では、 L^{a3} は、好ましくは $-O-$ 、 $-O-(CH_2)_{f1}-CO-O-$ であり(前記 $f1$ は、1~4の整数である)、より好ましくは $-O-$ である。

R^{a14} は、好ましくはメチル基である。

R^{a15} は、好ましくは水素原子である。

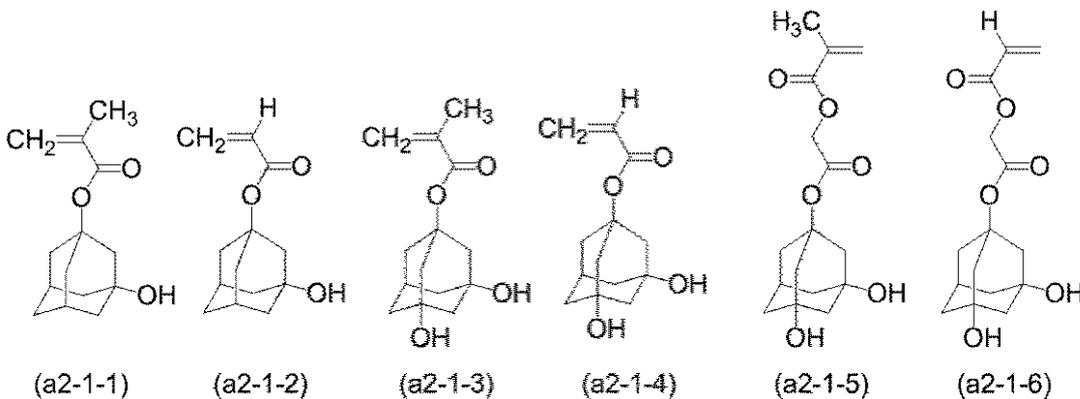
R^{a16} は、好ましくは水素原子又はヒドロキシ基である。

$o1$ は、好ましくは0~3の整数、より好ましくは0又は1である。

【0098】

構造単位(a2-1)を誘導するモノマーとしては、例えば、特開2010-204646号公報に記載されたモノマーが挙げられる。式(a2-1-1)~式(a2-1-6)のいずれかで表されるモノマーが好ましく、式(a2-1-1)~式(a2-1-4)のいずれかで表されるモノマーがより好ましく、式(a2-1-1)又は式(a2-1-3)で表されるモノマーがさらに好ましい。

【0099】



(a2-1-1)

(a2-1-2)

(a2-1-3)

(a2-1-4)

(a2-1-5)

(a2-1-6)

【0100】

樹脂(A)が構造単位(a2-1)を含む場合、その含有率は、樹脂(A)の全構造単位の合計に対して、通常1~45モル%であり、好ましくは1~40モル%であり、より好ましくは1~35モル%であり、さらに好ましくは2~20モル%である。

【0101】

構造単位(a3)

10

20

30

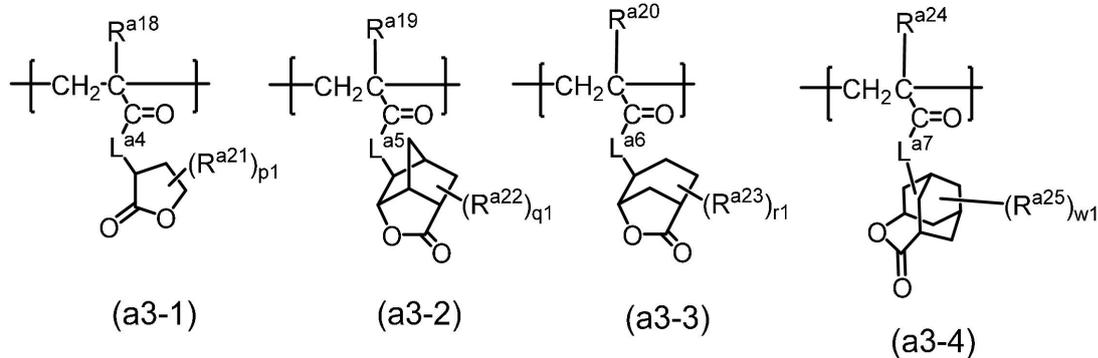
40

50

構造単位 (a 3) が有するラクトン環は、 γ -プロピオラクトン環、 γ -ブチロラクトン環、 δ -バレロラクトン環のような単環でもよく、単環式のラクトン環と他の環との縮合環でもよい。好ましくは、 γ -ブチロラクトン環、アダマンタンラクトン環又は γ -ブチロラクトン環構造を含む橋かけ環が挙げられる。

【 0 1 0 2 】

構造単位 (a 3) は、好ましくは、式 (a 3 - 1)、式 (a 3 - 2)、式 (a 3 - 3) 又は式 (a 3 - 4) で表される構造単位である。これらの 1 種を単独で含有してもよく、2 種以上を含有してもよい。



10

[式 (a 3 - 1) 中、
 L^{a4} は、 $-O-$ 又は $^*-O-(CH_2)_{k3}-CO-O-$ ($k3$ は 1 ~ 7 の整数を表す。)
 で表される基を表す。 * はカルボニル基との結合手を表す。] 20

R^{a18} は、水素原子又はメチル基を表す。

R^{a21} は、炭素数 1 ~ 4 の脂肪族炭化水素基を表す。

$p1$ は 0 ~ 5 の整数を表す。 $p1$ が 2 以上のとき、複数の R^{a21} は互いに同一であっても異なってもよい。

式 (a 3 - 2) 中、

L^{a5} は、 $-O-$ 又は $^*-O-(CH_2)_{k3}-CO-O-$ ($k3$ は 1 ~ 7 の整数を表す。)
 で表される基を表す。 * はカルボニル基との結合手を表す。

R^{a19} は、水素原子又はメチル基を表す。

R^{a22} は、カルボキシ基、シアノ基又は炭素数 1 ~ 4 の脂肪族炭化水素基を表す。] 30

$q1$ は、0 ~ 3 の整数を表す。 $q1$ が 2 以上のとき、複数の R^{a22} は互いに同一であっても異なってもよい。

式 (a 3 - 3) 中、

L^{a6} は、 $-O-$ 又は $^*-O-(CH_2)_{k3}-CO-O-$ ($k3$ は 1 ~ 7 の整数を表す。)
 で表される基を表す。 * はカルボニル基との結合手を表す。

R^{a20} は、水素原子又はメチル基を表す。

R^{a23} は、カルボキシ基、シアノ基又は炭素数 1 ~ 4 の脂肪族炭化水素基を表す。

$r1$ は、0 ~ 3 の整数を表す。 $r1$ が 2 以上のとき、複数の R^{a23} は互いに同一であっても異なってもよい。

式 (a 3 - 4) 中、] 40

R^{a24} は、ハロゲン原子を有してもよい炭素数 1 ~ 6 のアルキル基、水素原子又はハロゲン原子を表す。

R^{a25} は、カルボキシ基、シアノ基又は炭素数 1 ~ 4 の脂肪族炭化水素基を表す。

L^{a7} は、単結合、 $^*-O-$ 、 $^*-O-L^{a8}-O-$ 、 $^*-O-L^{a8}-CO-O-$ 、 $^*-O-L^{a8}-CO-O-L^{a9}-CO-O-$ 又は $^*-O-L^{a8}-O-CO-L^{a9}-O-$ を表す。

* は、カルボニル基との結合手を表す。

L^{a8} 及び L^{a9} は、互いに独立に、炭素数 1 ~ 6 のアルカンジイル基を表す。

$w1$ は、0 ~ 8 の整数を表す。 $w1$ が 2 以上のとき、複数の R^{a25} は互いに同一であってもよく、異なってもよい。]

【 0 1 0 3 】

50

R^{a21} 等の脂肪族炭化水素基としては、以下のアルキル基が挙げられる。

R^{a24} のハロゲン原子としては、フッ素原子、塩素原子、臭素原子及びヨウ素原子が挙げられる。

R^{a24} のアルキル基としては、メチル基、エチル基、*n*-プロピル基、イソプロピル基、*n*-ブチル基、*sec*-ブチル基、*tert*-ブチル基、*n*-ペンチル基及び*n*-ヘキシル基等が挙げられ、好ましくは炭素数1~4のアルキル基が挙げられ、より好ましくはメチル基又はエチル基が挙げられる。

R^{a24} のハロゲン原子を有するアルキル基としては、トリフルオロメチル基、ペルフルオロエチル基、ペルフルオロプロピル基、ペルフルオロイソプロピル基、ペルフルオロブチル基、ペルフルオロ*sec*-ブチル基、ペルフルオロ*tert*-ブチル基、ペルフルオロペンチル基、ペルフルオロヘキシル基、トリクロロメチル基、トリプロモメチル基、トリヨードメチル基等が挙げられる。

【0104】

L^{a8} 及び L^{a9} のアルカンジイル基としては、メチレン基、エチレン基、プロパン-1,3-ジイル基、プロパン-1,2-ジイル基、ブタン-1,4-ジイル基、ペンタン-1,5-ジイル基、ヘキサン-1,6-ジイル基、ブタン-1,3-ジイル基、2-メチルプロパン-1,3-ジイル基、2-メチルプロパン-1,2-ジイル基、ペンタン-1,4-ジイル基及び2-メチルブタン-1,4-ジイル基等が挙げられる。

【0105】

式(a3-1)~式(a3-3)において、 L^{a4} ~ L^{a6} は、互いに独立に、好ましくは-O-又は、 k_3 が1~4の整数である $*-O-(CH_2)_{k_3}-CO-O-$ で表される基であり、より好ましくは-O-及び、 $*-O-CH_2-CO-O-$ であり、さらに好ましくは酸素原子である。

R^{a18} ~ R^{a21} は、好ましくはメチル基である。

R^{a22} 及び R^{a23} は、互いに独立に、好ましくはカルボキシ基、シアノ基又はメチル基である。

p_1 、 q_1 及び r_1 は、互いに独立に、好ましくは0~2の整数であり、より好ましくは0又は1である。

【0106】

式(a3-4)において、

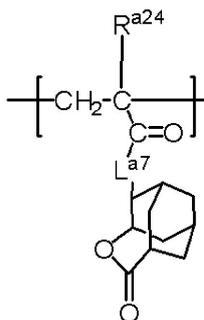
R^{a24} は、好ましくは水素原子又は炭素数1~4のアルキル基であり、より好ましくは水素原子、メチル基又はエチル基であり、さらに好ましくは水素原子又はメチル基である。

L^{a7} は、好ましくは、単結合、 $*-O-$ 又は $*-O-L^{a8}-CO-O-$ であり、より好ましくは単結合、 $*-O-$ 、 $*-O-CH_2-CO-O-$ 又は $*-O-C_2H_4-CO-O-$ である。

R^{a25} は、好ましくはカルボキシ基、シアノ基又はメチル基である。

w_1 は、好ましくは0~2の整数であり、より好ましくは0又は1である。

特に、式(a3-4)は、式(a3-4)'が好ましい。



(a3-4)'

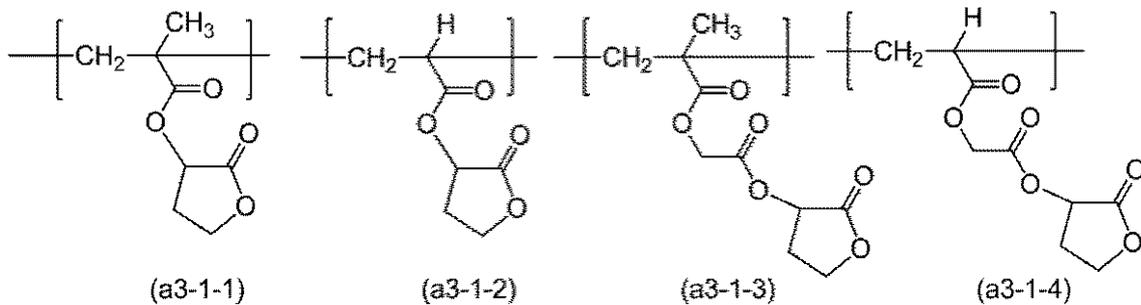
(式中、 R^{a24} 、 L^{a7} は、上記と同じ意味を表す。)

【0107】

構造単位(a3)を導くモノマーとしては、特開2010-204646号公報に記載されたモノマー、特開2000-122294号公報に記載されたモノマー、特開2012-41274号公報に記載されたモノマーが挙げられる。構造単位(a3)としては、式(a3-1-1)~式(a3-1-4)、式(a3-2-1)~式(a3-2-4)、式(a3-3-1)~式(a3-3-4)及び式(a3-4-1)~式(a3-4-12)のいずれかで表される構造単位が好ましく、式(a3-1-1)、式(a3-1-2)及び式(a3-2-3)~式(a3-2-4)及び式(a3-4-1)~式(a3-4-6)のいずれかで表される構造単位がより好ましく、式(a3-1-1)、式(a3-2-3)又は式(a3-4-2)で表される構造単位がさらに好ましい。

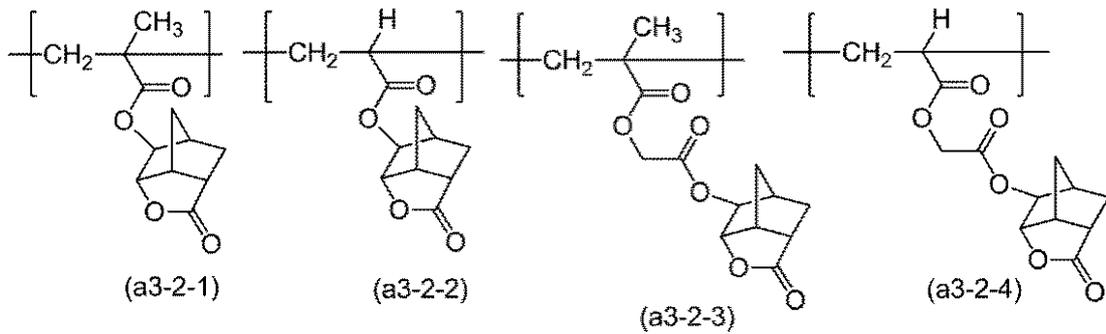
10

【0108】

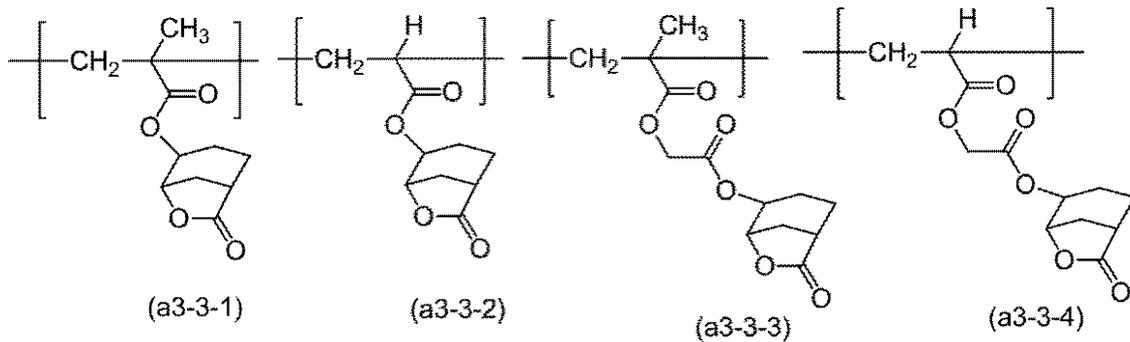


20

【0109】



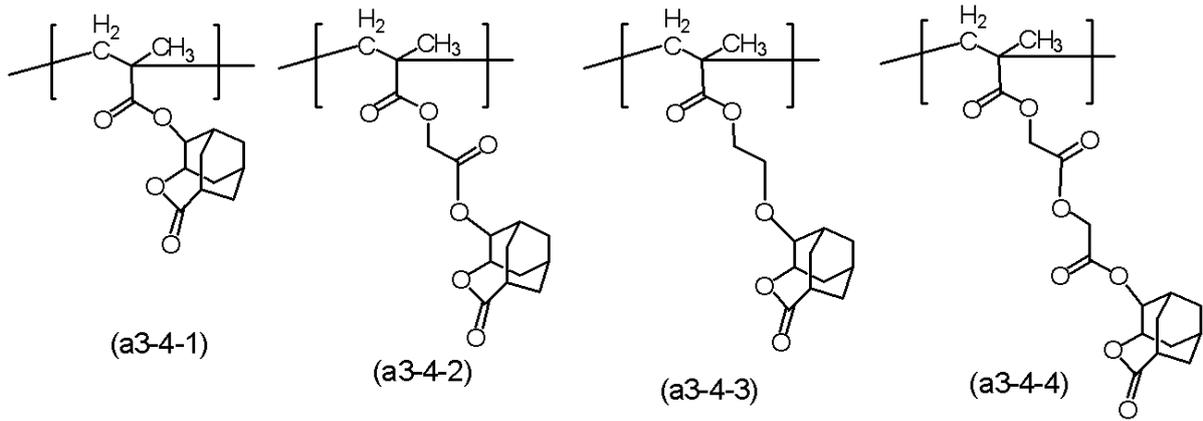
30



40

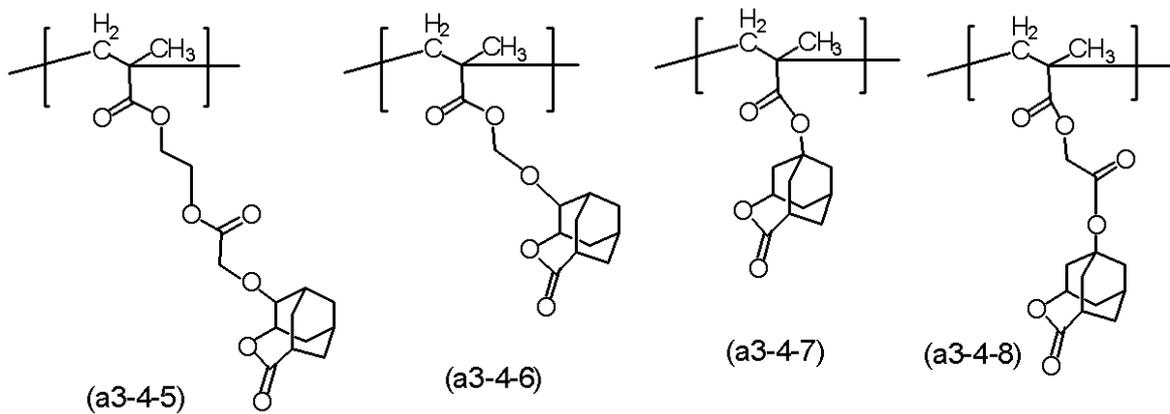
【0110】

以下の構造単位においては、 R^{a24} に相当するメチル基が水素原子に置き換わった化合物も、構造単位(a3-4)の具体例として挙げるができる。

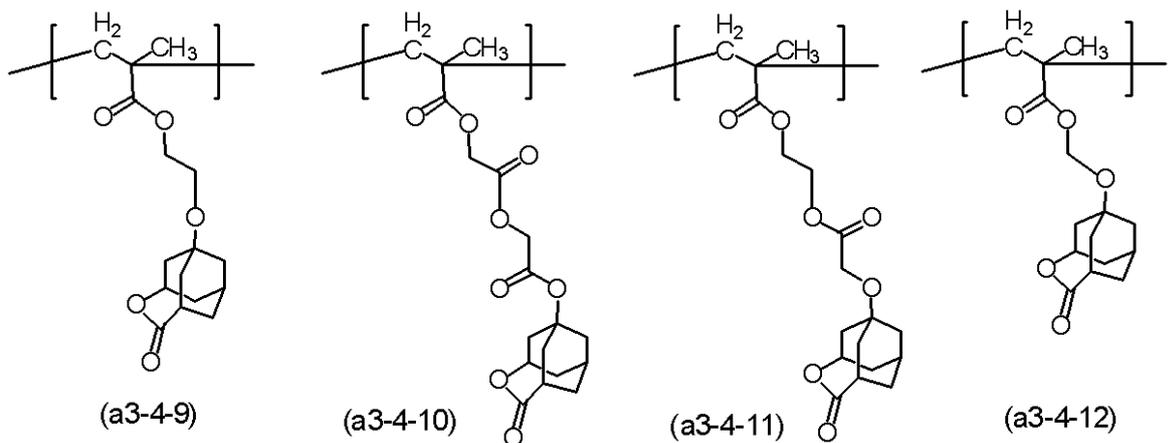


10

【 0 1 1 1 】



20



30

【 0 1 1 2 】

樹脂 (A) が構造単位 (a3) を含む場合、その合計含有率は、樹脂 (A) の全構造単位の合計に対して、通常 5 ~ 70 モル% であり、好ましくは 10 ~ 65 モル% であり、より好ましくは 10 ~ 60 モル% である。

40

また、構造単位 (a3-1)、構造単位 (a3-2)、構造単位 (a3-3) 及び構造単位 (a3-4) の含有率は、互いに独立に、樹脂 (A) の全構造単位の合計に対して、5 ~ 60 モル% であることが好ましく、5 ~ 50 モル% であることがより好ましく、10 ~ 50 モル% であることがさらに好ましい。

【 0 1 1 3 】

構造単位 (t)

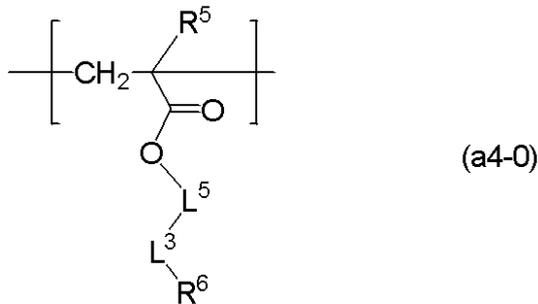
本発明の樹脂 (A) に含まれていてもよい構造単位 (t) としては、構造単位 (a2) 及び構造単位 (a3) 以外にハロゲン原子を有していてもよい構造単位 (以下、場合により「構造単位 (a4)」という。) 及び非脱離炭化水素基を有する構造単位 (以下「構造単位 (a5)」という場合がある) などが挙げられる。ハロゲン原子としては、フッ素原

50

子が好ましい。

【0114】

構造単位 (a 4) としては、式 (a 4 - 0) で表される構造単位が挙げられる。



10

[式 (a 4 - 0) 中、

R⁵ は、水素原子又はメチル基を表す。

L⁵ は、単結合又は炭素数 1 ~ 4 の脂肪族飽和炭化水素基を表す。

L³ は、炭素数 1 ~ 8 のペルフルオロアルカンジイル基又は炭素数 3 ~ 12 のペルフルオロシクロアルカンジイル基を表す。

R⁶ は、水素原子又はフッ素原子を表す。]

【0115】

L⁵ の脂肪族飽和炭化水素基としては、メチレン基、エチレン基、プロパン - 1, 3 - ジイル基、ブタン - 1, 4 - ジイル基等の直鎖状アルカンジイル基、直鎖状アルカンジイル基に、アルキル基 (特に、メチル基、エチル基等) の側鎖を有したものの、エタン - 1, 1 - ジイル基、プロパン - 1, 2 - ジイル基、ブタン - 1, 3 - ジイル基、2 - メチルプロパン - 1, 3 - ジイル基及び 2 - メチルプロパン - 1, 2 - ジイル基等の分岐状アルカンジイル基が挙げられる。

20

【0116】

L³ のペルフルオロアルカンジイル基としては、ジフルオロメチレン基、ペルフルオロエチレン基、ペルフルオロエチルフルオロメチレン基、ペルフルオロプロパン - 1, 3 - ジイル基、ペルフルオロプロパン - 1, 2 - ジイル基、ペルフルオロプロパン - 2, 2 - ジイル基、ペルフルオロブタン - 1, 4 - ジイル基、ペルフルオロブタン - 2, 2 - ジイル基、ペルフルオロブタン - 1, 2 - ジイル基、ペルフルオロペンタン - 1, 5 - ジイル基、ペルフルオロペンタン - 2, 2 - ジイル基、ペルフルオロペンタン - 3, 3 - ジイル基、ペルフルオロヘキサン - 1, 6 - ジイル基、ペルフルオロヘキサン - 2, 2 - ジイル基、ペルフルオロヘキサン - 3, 3 - ジイル基、ペルフルオロヘプタン - 1, 7 - ジイル基、ペルフルオロヘプタン - 2, 2 - ジイル基、ペルフルオロヘプタン - 3, 4 - ジイル基、ペルフルオロヘプタン - 4, 4 - ジイル基、ペルフルオロオクタン - 1, 8 - ジイル基、ペルフルオロオクタン - 2, 2 - ジイル基、ペルフルオロオクタン - 3, 3 - ジイル基、ペルフルオロオクタン - 4, 4 - ジイル基等が挙げられる。

30

L³ のペルフルオロシクロアルカンジイル基としては、ペルフルオロシクロヘキサンジイル基、ペルフルオロシクロペンタンジイル基、ペルフルオロシクロヘプタンジイル基、ペルフルオロアダマンタンジイル基等が挙げられる。

40

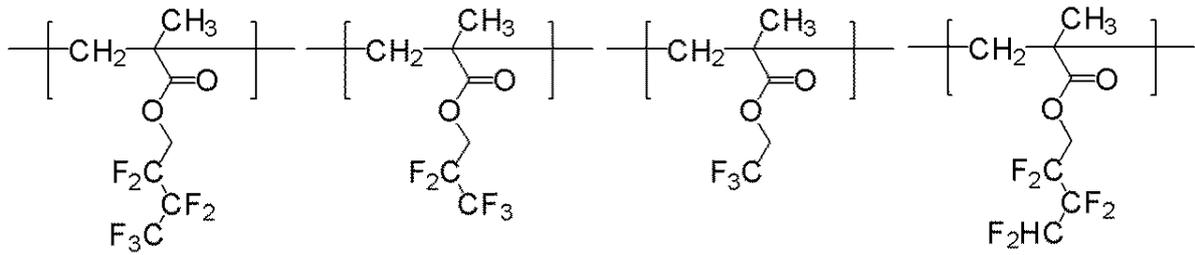
【0117】

L⁵ は、好ましくは単結合、メチレン基又はエチレン基であり、より好ましくは単結合又はメチレン基である。

L³ は、好ましくは炭素数 1 ~ 6 のペルフルオロアルカンジイル基であり、より好ましくは炭素数 1 ~ 3 のペルフルオロアルカンジイル基である。

【0118】

構造単位 (a 4 - 0) としては、以下に示す構造単位が挙げられる。



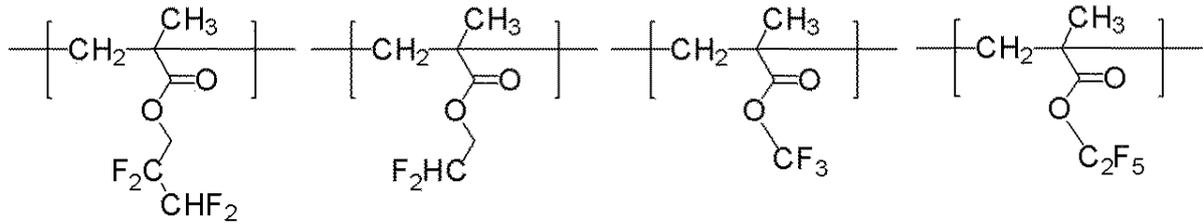
(a4-0-1)

(a4-0-2)

(a4-0-3)

(a4-0-4)

10



(a4-0-5)

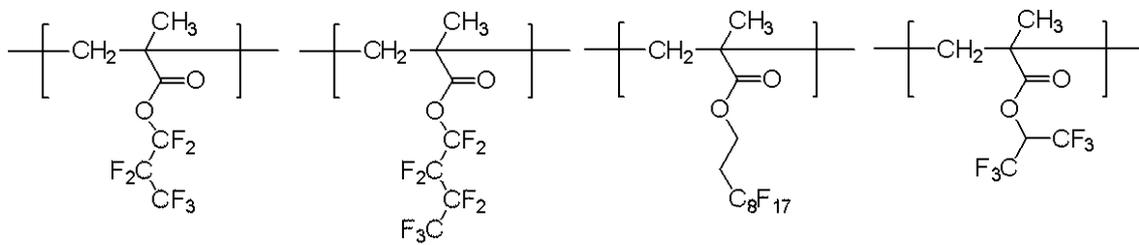
(a4-0-6)

(a4-0-7)

(a4-0-8)

20

【 0 1 1 9 】



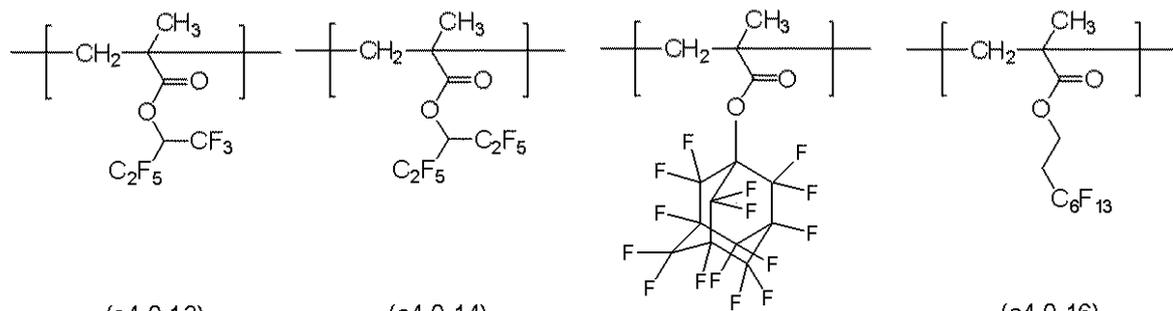
(a4-0-9)

(a4-0-10)

(a4-0-11)

(a4-0-12)

30



(a4-0-13)

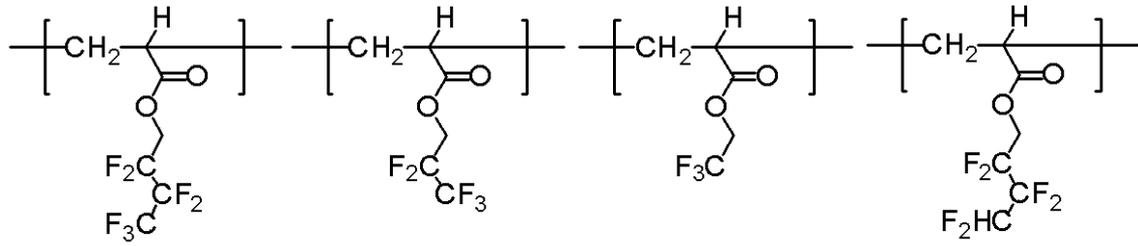
(a4-0-14)

(a4-0-15)

(a4-0-16)

40

【 0 1 2 0 】



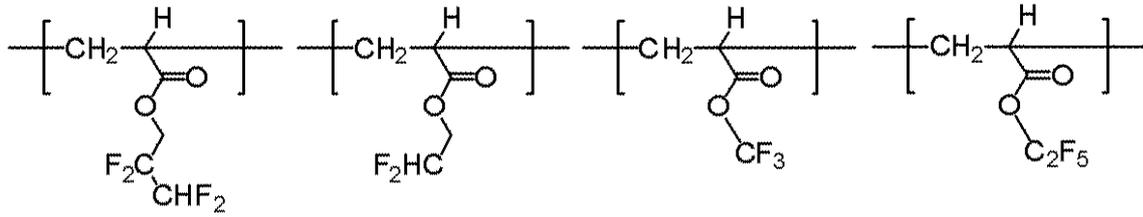
(a4-0-17)

(a4-0-18)

(a4-0-19)

(a4-0-20)

10



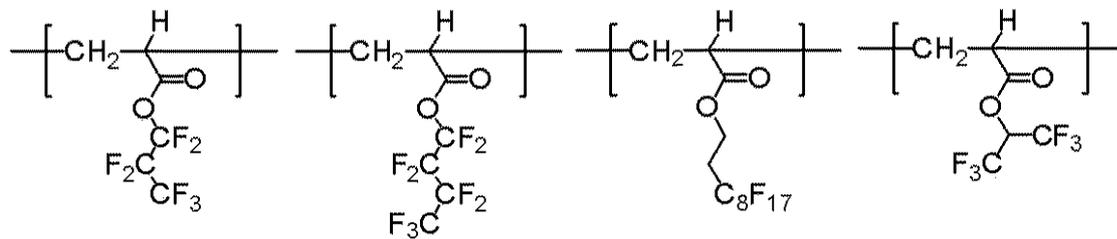
(a4-0-21)

(a4-0-22)

(a4-0-23)

(a4-0-24)

20



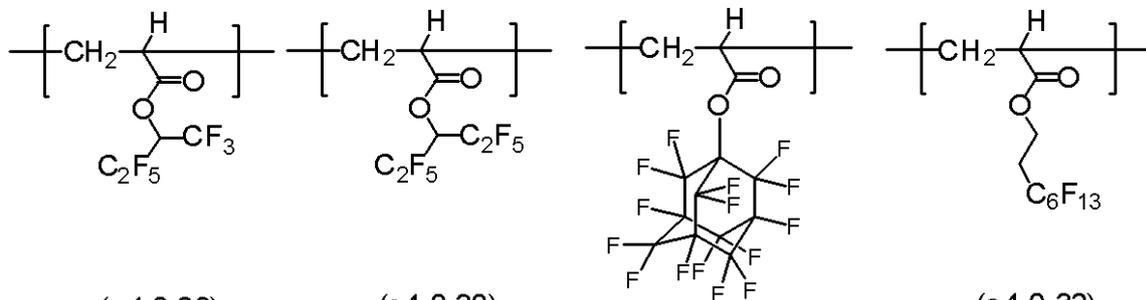
(a4-0-25)

(a4-0-26)

(a4-0-27)

(a4-0-28)

30



(a4-0-29)

(a4-0-30)

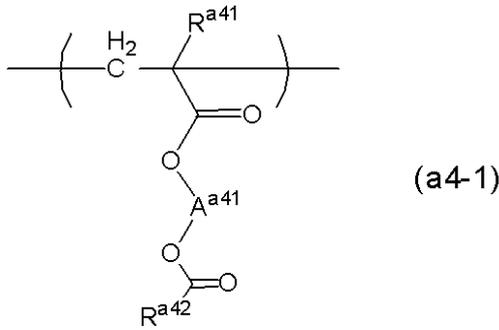
(a4-0-31)

(a4-0-32)

40

【 0 1 2 1 】

構造単位 (a 4) としては、式 (a 4 - 1) で表される構造単位が挙げられる。

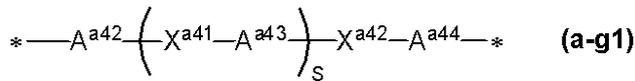


[式 (a 4 - 1) 中、

R^{a41} は、水素原子又はメチル基を表す。

R^{a42} は、置換基を有していてもよい炭素数 1 ~ 20 の炭化水素基を表し、該炭化水素基に含まれる - CH_2 - は、- O - 又は - CO - に置き換わっていてもよい。

A^{a41} は、置換基を有していてもよい炭素数 1 ~ 6 のアルカンジイル基又は式 (a - g 1) で表される基を表す。]



[式 (a - g 1) 中、

s は、0 又は 1 を表す。

A^{a42} 及び A^{a44} は、互いに独立に、置換基を有していてもよい炭素数 1 ~ 5 の脂肪族炭化水素基を表す。

A^{a43} は、単結合又は置換基を有していてもよい炭素数 1 ~ 5 の脂肪族炭化水素基を表す。

X^{a41} 及び X^{a42} は、互いに独立に、- O - 、- CO - 、- CO - O - 又は - O - CO - を表す。

ただし、 A^{a42} 、 A^{a43} 、 A^{a44} 、 X^{a41} 及び X^{a42} の炭素数の合計は 7 以下である。

* で表される 2 つの結合手のうち、右側の * が - O - CO - R^{a42} との結合手である。]

【 0 1 2 2 】

R^{a42} の炭化水素基としては、鎖式及び環式の脂肪族炭化水素基、芳香族炭化水素基、並びにこれらを組合せることにより形成される基が挙げられる。

鎖式及び環式の脂肪族炭化水素基は、炭素 - 炭素不飽和結合を有していてもよいが、鎖式及び環式の脂肪族飽和炭化水素基並びにこれらを組合せることにより形成される基が好ましい。該脂肪族飽和炭化水素基としては、直鎖又は分岐のアルキル基及び単環又は多環の脂環式炭化水素基、並びに、アルキル基及び脂環式炭化水素基を組み合わせることにより形成される脂肪族炭化水素基等が挙げられる。

【 0 1 2 3 】

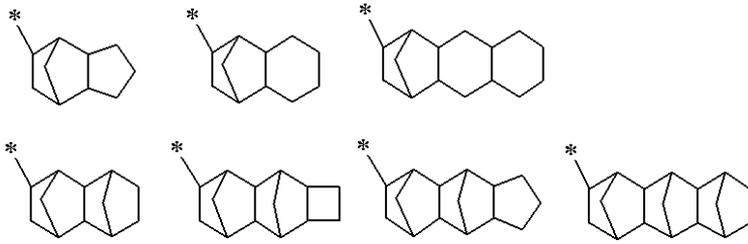
鎖式の脂肪族炭化水素基としては、メチル基、エチル基、 n - プロピル基、 n - ブチル基、 n - ペンチル基、 n - ヘキシル基、 n - ヘプチル基、 n - オクチル基、 n - デシル基、 n - ドデシル基、 n - ペンタデシル基、 n - ヘキサデシル基、 n - ヘプタデシル基及び n - オクタデシル基が挙げられる。環式の脂肪族炭化水素基としては、シクロペンチル基、シクロヘキシル基、シクロヘプチル基、シクロオクチル基等のシクロアルキル基；デカヒドロナフチル基、アダマンチル基、ノルボルニル基及び下記の基 (* は、結合手を表す。) 等の多環式の脂環式炭化水素基が挙げられる。

10

20

30

40



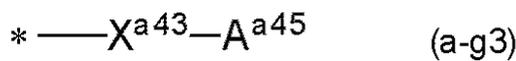
【 0 1 2 4 】

芳香族炭化水素基としては、フェニル基、ナフチル基、アントリル基、ピフェニル基、フェナントリル基及びフルオレニル基が挙げられる。

10

【 0 1 2 5 】

R^{a42} の置換基としては、ハロゲン原子又は式 (a - g 3) で表される基が挙げられる。ハロゲン原子としては、フッ素原子、塩素原子、臭素原子及びヨウ素原子が挙げられ、好ましくはフッ素原子が挙げられる。



[式 (a - g 3) 中、

X^{a43} は、酸素原子、カルボニル基、カルボニルオキシ基又はオキシカルボニル基を表す。

A^{a45} は、少なくとも 1 つのハロゲン原子を有する炭素数 1 ~ 17 の脂肪族炭化水素基を表す。

20

* は、結合手を表す。]

A^{a45} の脂肪族炭化水素基としては、 R^{a42} で例示したものと同様の基が挙げられる。

【 0 1 2 6 】

R^{a42} は、ハロゲン原子を有してもよい脂肪族炭化水素基が好ましく、ハロゲン原子を有するアルキル基及び / 又は式 (a - g 3) で表される基を有する脂肪族炭化水素基がより好ましい。

R^{a42} がハロゲン原子を有する脂肪族炭化水素基である場合、好ましくはフッ素原子を有する脂肪族炭化水素基であり、より好ましくはペルフルオロアルキル基又はペルフルオロシクロアルキル基であり、さらに好ましくは炭素数が 1 ~ 6 のペルフルオロアルキル基であり、特に好ましくは炭素数 1 ~ 3 のペルフルオロアルキル基である。ペルフルオロアルキル基としては、ペルフルオロメチル基、ペルフルオロエチル基、ペルフルオロプロピル基、ペルフルオロブチル基、ペルフルオロペンチル基、ペルフルオロヘキシル基、ペルフルオロヘプチル基及びペルフルオロオクチル基等が挙げられる。ペルフルオロシクロアルキル基としては、ペルフルオロシクロヘキシル基等が挙げられる。

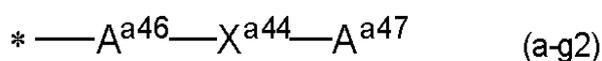
30

R^{a42} が、式 (a - g 3) で表される基を有する脂肪族炭化水素基である場合、式 (a - g 3) で表される基に含まれる炭素数を含めて、脂肪族炭化水素基の総炭素数は、15 以下が好ましく、12 以下がより好ましい。式 (a - g 3) で表される基を置換基として有する場合、その数は 1 個が好ましい。

40

【 0 1 2 7 】

式 (a - g 3) で表される基を有する脂肪族炭化水素基は、さらに好ましくは式 (a - g 2) で表される基である。



[式 (a - g 2) 中、

A^{a46} は、ハロゲン原子を有していてもよい炭素数 1 ~ 17 の脂肪族炭化水素基を表す。

X^{a44} は、カルボニルオキシ基又はオキシカルボニル基を表す。

A^{a47} は、ハロゲン原子を有していてもよい炭素数 1 ~ 17 の脂肪族炭化水素基を表

50

す。

ただし、 A^{a46} 、 A^{a47} 及び X^{a44} の炭素数の合計は 18 以下であり、 A^{a46} 及び A^{a47} のうち、少なくとも一方は、少なくとも 1 つのハロゲン原子を有する。

* は、カルボニル基との結合手を表す。]

【0128】

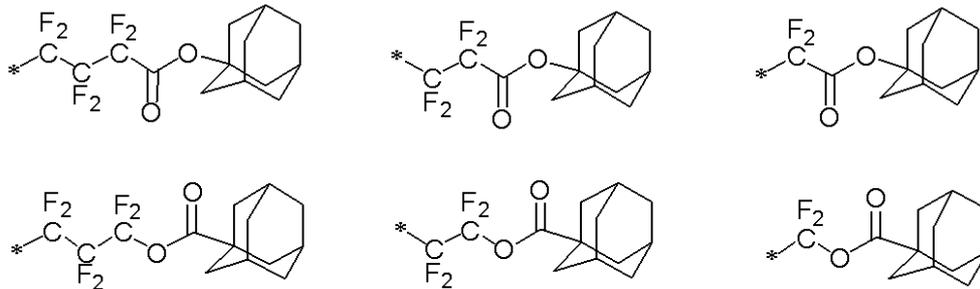
A^{a46} の脂肪族炭化水素基の炭素数は、1 ~ 6 であることが好ましく、1 ~ 3 であることがより好ましい。

A^{a47} の脂肪族炭化水素基の炭素数は、4 ~ 15 であることが好ましく、5 ~ 12 であることがより好ましく、シクロヘキシル基又はアダマンチル基であることがさらに好ましい。

10

【0129】

* - A^{a46} - X^{a44} - A^{a47} で表される好ましい構造は、以下の構造である。



20

【0130】

A^{a41} のアルカンジイル基としては、メチレン基、エチレン基、プロパン - 1, 3 - ジイル基、ブタン - 1, 4 - ジイル基、ペンタン - 1, 5 - ジイル基、ヘキサン - 1, 6 - ジイル基等の直鎖状アルカンジイル基；プロパン - 1, 2 - ジイル基、ブタン - 1, 3 - ジイル基、2 - メチルプロパン - 1, 2 - ジイル基、1 - メチルブタン - 1, 4 - ジイル基、2 - メチルブタン - 1, 4 - ジイル基等の分岐状アルカンジイル基が挙げられる。

A^{a41} のアルカンジイル基における置換基としては、ヒドロキシ基及び炭素数 1 ~ 6 のアルコキシ基等が挙げられる。

A^{a41} は、好ましくは炭素数 1 ~ 4 のアルカンジイル基であり、より好ましくは炭素数 2 ~ 4 のアルカンジイル基であり、さらに好ましくはエチレン基である。

30

【0131】

基 (a - g 1) における A^{a42} ~ A^{a44} の脂肪族炭化水素基は、炭素 - 炭素不飽和結合を有していてもよいが、脂肪族飽和炭化水素基が好ましい。該脂肪族飽和炭化水素基としては、アルキル基 (当該アルキル基は直鎖でも分岐していてもよい) 及び脂環式炭化水素基、並びに、アルキル基及び脂環式炭化水素基を組合せることにより形成される脂肪族炭化水素基等が挙げられる。具体的には、メチレン基、エチレン基、プロパン - 1, 3 - ジイル基、プロパン - 1, 2 - ジイル基、ブタン - 1, 4 - ジイル基、1 - メチルプロパン - 1, 3 - ジイル基、2 - メチルプロパン - 1, 3 - ジイル基、2 - メチルプロパン - 1, 2 - ジイル基等が挙げられる。

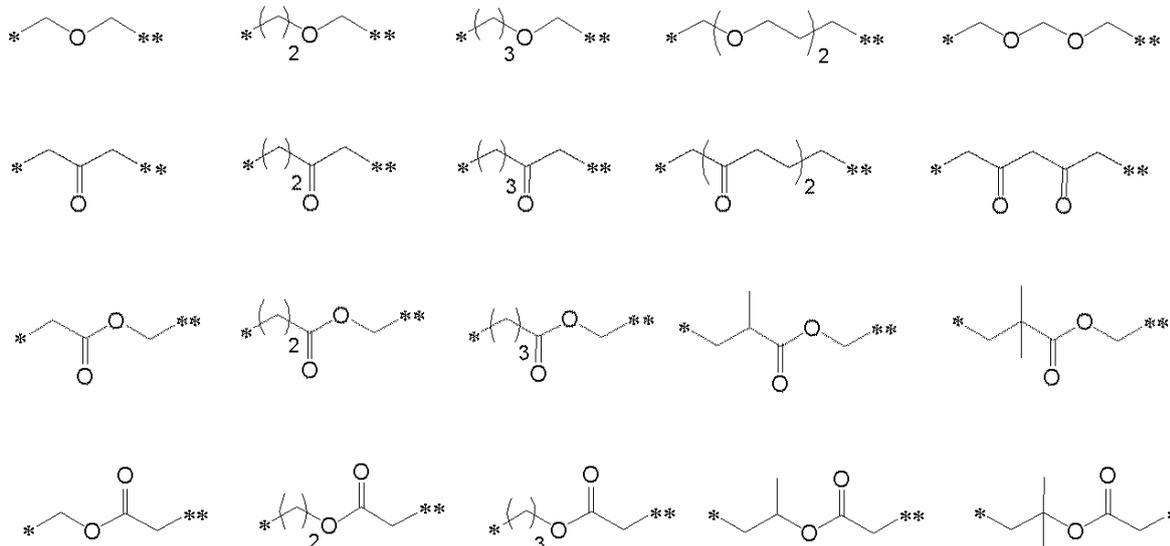
A^{a42} ~ A^{a44} の脂肪族炭化水素基の置換基としては、ヒドロキシ基及び炭素数 1 ~ 6 のアルコキシ基等が挙げられる。

40

s は、0 が好ましい。

【0132】

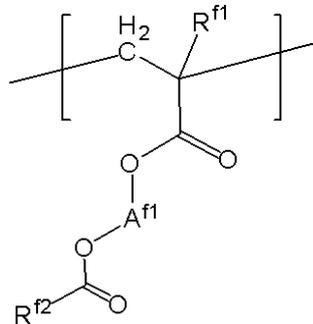
X^{a42} が酸素原子、カルボニル基、カルボニルオキシ基又はオキシカルボニル基を表す基 (a - g 1) としては、以下の基等が挙げられる。以下の例示において、* 及び ** はそれぞれ結合手を表し、** が - O - CO - R^{a42} との結合手である。



10

【 0 1 3 3 】

式 (a 4 - 1) で表される構造単位としては、式 (a 4 - 2) 及び式 (a 4 - 3) で表される構造単位が好ましい。



20

(a4-2)

[式 (a 4 - 2) 中、

R^{f1} は、水素原子又はメチル基を表す。

A^{f1} は、炭素数 1 ~ 6 のアルカンジイル基を表す。

R^{f2} は、フッ素原子を有する炭素数 1 ~ 10 の炭化水素基を表す。]

30

【 0 1 3 4 】

A^{f1} のアルカンジイル基としては、メチレン基、エチレン基、プロパン - 1 , 3 - ジイル基、プロパン - 1 , 2 - ジイル基、ブタン - 1 , 4 - ジイル基、ペンタン - 1 , 5 - ジイル基、ヘキサン - 1 , 6 - ジイル基等の直鎖状アルカンジイル基 ; 1 - メチルプロパン - 1 , 3 - ジイル基、2 - メチルプロパン - 1 , 3 - ジイル基、2 - メチルプロパン - 1 , 2 - ジイル基、1 - メチルブタン - 1 , 4 - ジイル基、2 - メチルブタン - 1 , 4 - ジイル基等の分岐状アルカンジイル基が挙げられる。

【 0 1 3 5 】

R^{f2} の炭化水素基は、脂肪族炭化水素基及び芳香族炭化水素基を包含し、脂肪族炭化水素基は、鎖式、環式及びこれらの組合せることにより形成される基を含む。脂肪族炭化水素基としては、アルキル基、脂環式炭化水素基が好ましい。

40

アルキル基としては、メチル基、エチル基、n - プロピル基、イソプロピル基、n - ブチル基、sec - ブチル基、tert - ブチル基、n - ペンチル基、n - ヘキシル基、n - オクチル基及び 2 - エチルヘキシル基が挙げられる。

脂環式炭化水素基は、単環式であってもよいし、多環式であってもよい。単環式の脂環式炭化水素基としては、シクロプロピル基、シクロブチル基、シクロペンチル基、シクロヘキシル基、メチルシクロヘキシル基、ジメチルシクロヘキシル基、シクロヘプチル基、シクロオクチル基、シクロヘプチル基、シクロデシル基等のシクロアルキル基が挙げられる。多環式の脂環式炭化水素基としては、デカヒドロナフチル基、アダマンチル基、2 -

50

アルキルアダマンタン - 2 - イル基、1 - (アダマンタン - 1 - イル) アルカン - 1 - イル基、ノルボルニル基、メチルノルボルニル基及びイソボルニル基が挙げられる。

【0136】

R^{f2} のフッ素原子を有する炭化水素基としては、フッ素原子を有するアルキル基、フッ素原子を有する脂環式炭化水素基等が挙げられる。

フッ素原子を有するアルキル基としては、ジフルオロメチル基、トリフルオロメチル基、1, 1 - ジフルオロエチル基、2, 2 - ジフルオロエチル基、2, 2, 2 - トリフルオロエチル基、ペルフルオロエチル基、1, 1, 2, 2 - テトラフルオロプロピル基、1, 1, 2, 2, 3, 3 - ヘキサフルオロプロピル基、ペルフルオロエチルメチル基、1 - (トリフルオロメチル) - 1, 2, 2, 2 - テトラフルオロエチル基、1 - (トリフルオロメチル) - 2, 2, 2 - トリフルオロエチル基、ペルフルオロプロピル基、1, 1, 2, 2 - テトラフルオロブチル基、1, 1, 2, 2, 3, 3 - ヘキサフルオロブチル基、1, 1, 2, 2, 3, 3, 4, 4 - オクタフルオロブチル基、ペルフルオロブチル基、1, 1 - ビス(トリフルオロ)メチル - 2, 2, 2 - トリフルオロエチル基、2 - (ペルフルオロプロピル)エチル基、1, 1, 2, 2, 3, 3, 4, 4 - オクタフルオロペンチル基、ペルフルオロペンチル基、1, 1, 2, 2, 3, 3, 4, 4, 5, 5 - デカフルオロペンチル基、1, 1 - ビス(トリフルオロメチル) - 2, 2, 3, 3, 3 - ペンタフルオロプロピル基、2 - (ペルフルオロブチル)エチル基、1, 1, 2, 2, 3, 3, 4, 4, 5, 5 - デカフルオロヘキシル基、1, 1, 2, 2, 3, 3, 4, 4, 5, 5, 6, 6 - ドデカフルオロヘキシル基、ペルフルオロペンチルメチル基及びペルフルオロヘキシル基等のフッ化アルキル基が挙げられる。

10

20

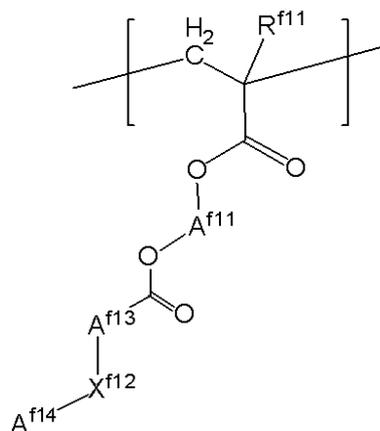
フッ素原子を有する脂環式炭化水素基としては、ペルフルオロシクロヘキシル基、ペルフルオロアダマンチル基等のフッ化シクロアルキル基が挙げられる。

【0137】

式(a4-2)における A^{f1} としては、炭素数2~4のアルカンジイル基が好ましく、エチレン基がより好ましい。

R^{f1} としては、炭素数1~6のフッ化アルキル基が好ましい。

【0138】



(a4-3)

30

40

[式(a4-3)中、

R^{f11} は、水素原子又はメチル基を表す。

A^{f11} は、炭素数1~6のアルカンジイル基を表す。

A^{f13} は、フッ素原子を有していてもよい炭素数1~18の脂肪族炭化水素基を表す。

X^{f12} は、カルボニルオキシ基又はオキシカルボニル基を表す。

A^{f14} は、フッ素原子を有していてもよい炭素数1~17の脂肪族炭化水素基を表す。

ただし、 A^{f13} 及び A^{f14} の少なくとも1つは、フッ素原子を有する脂肪族炭化水素基を表す。]

50

【0139】

A^{f11} のアルカンジイル基としては、 A^{f1} のアルカンジイル基と同様の基が挙げられる。

A^{f13} の脂肪族炭化水素基は、鎖式及び環式の脂肪族炭化水素基、並びに、これらを組合せることにより形成される2価の脂肪族炭化水素基が包含される。この脂肪族炭化水素は、炭素-炭素不飽和結合を有していてもよいが、好ましくは飽和の脂肪族炭化水素基である。

A^{f13} のフッ素原子を有していてもよい脂肪族炭化水素基としては、好ましくはフッ素原子を有していてもよい脂肪族飽和炭化水素基が挙げられ、より好ましくはペルフルオロアルカンジイル基が挙げられる。

10

フッ素原子を有していてもよい2価の鎖式の脂肪族炭化水素基としては、メチレン基、エチレン基、プロパンジイル基、ブタンジイル基及びペンタンジイル基等のアルカンジイル基；ジフルオロメチレン基、ペルフルオロエチレン基、ペルフルオロプロパンジイル基、ペルフルオロブタンジイル基及びペルフルオロペンタンジイル基等のペルフルオロアルカンジイル基等が挙げられる。

フッ素原子を有していてもよい2価の環式の脂肪族炭化水素基は、単環式及び多環式のいずれを含む基でもよい。単環式の脂肪族炭化水素基としては、シクロヘキサジイル基及びペルフルオロシクロヘキサジイル基等が挙げられる。多環式の2価の脂肪族炭化水素基としては、アダマンタンジイル基、ノルボルナンジイル基、ペルフルオロアダマンタンジイル基等が挙げられる。

20

【0140】

A^{f14} の脂肪族炭化水素基としては、鎖式及び環式のいずれか、並びに、これらが組合せることにより形成される脂肪族炭化水素基が包含される。この脂肪族炭化水素は、炭素-炭素不飽和結合を有していてもよいが、好ましくは飽和の脂肪族炭化水素基である。

A^{f14} のフッ素原子を有していてもよい脂肪族炭化水素基は、好ましくはフッ素原子を有していてもよい脂肪族飽和炭化水素基である。

フッ素原子を有していてもよい鎖式の脂肪族炭化水素基としては、トリフルオロメチル基、ジフルオロメチル基、メチル基、ペルフルオロエチル基、1,1,1-トリフルオロエチル基、1,1,2,2-テトラフルオロエチル基、エチル基、ペルフルオロプロピル基、1,1,1,2,2-ペンタフルオロプロピル基、プロピル基、ペルフルオロブチル基、1,1,2,2,3,3,4,4-オクタフルオロブチル基、ブチル基、ペルフルオロペンチル基、1,1,1,2,2,3,3,4,4-ノナフルオロペンチル基、ペンチル基、ヘキシル基、ペルフルオロヘキシル基、ヘプチル基、ペルフルオロヘプチル基、オクチル基及びペルフルオロオクチル基等が挙げられる。

30

フッ素原子を有していてもよい環式の脂肪族炭化水素基は、単環式及び多環式のいずれでもよい。単環式の脂肪族炭化水素基を含む基としては、シクロプロピルメチル基、シクロプロピル基、シクロブチルメチル基、シクロペンチル基、シクロヘキシル基、ペルフルオロシクロヘキシル基が挙げられる。多環式の脂肪族炭化水素基を含む基としては、アダマンチル基、アダマンチルメチル基、ノルボルニル基、ノルボルニルメチル基、ペルフルオロアダマンチル基、ペルフルオロアダマンチルメチル基等が挙げられる。

40

【0141】

式(a4-3)において、 A^{f11} は、エチレン基であることが好ましい。

A^{f13} の脂肪族炭化水素基は、炭素数1~6の脂肪族炭化水素基であることが好ましく、炭素数2~3の脂肪族炭化水素基であることがさらに好ましい。

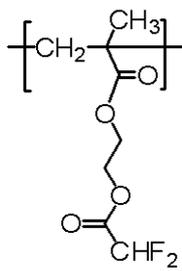
A^{f14} の脂肪族炭化水素基としては、炭素数3~12の脂肪族炭化水素基が好ましく、炭素数3~10の脂肪族炭化水素基がさらに好ましい。なかでも、 A^{f14} は、好ましくは炭素数3~12の脂環式炭化水素基を含む基であり、より好ましくはシクロプロピルメチル基、シクロペンチル基、シクロヘキシル基、ノルボルニル基及びアダマンチル基である。

【0142】

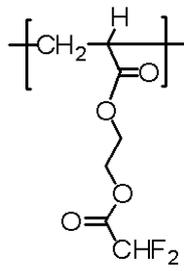
50

式(a4-2)で表される構造単位としては、式(a4-1-1)~式(a4-1-2)で表される構成単位が挙げられる。

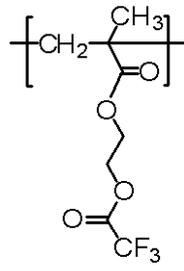
【0143】



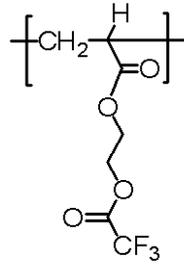
(a4-1-1)



(a4-1-2)

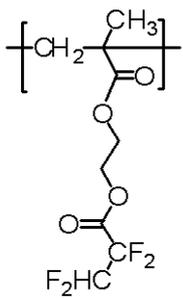


(a4-1-3)

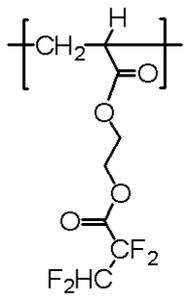


(a4-1-4)

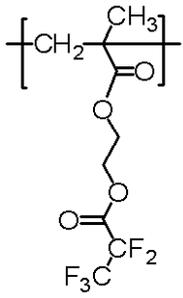
10



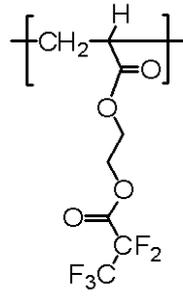
(a4-1-5)



(a4-1-6)

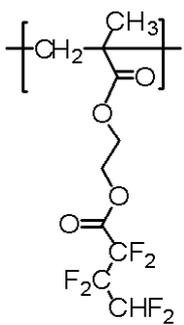


(a4-1-7)

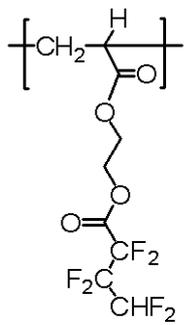


(a4-1-8)

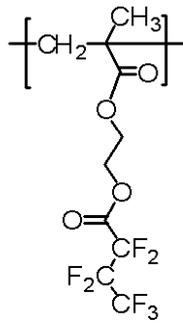
20



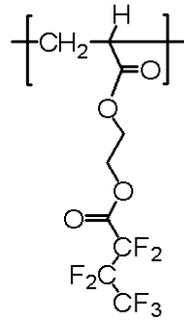
(a4-1-9)



(a4-1-10)

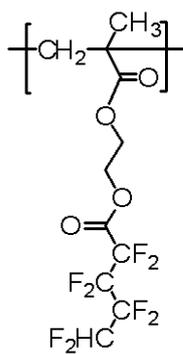


(a4-1-11)

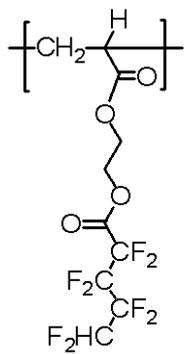


(a4-1-12)

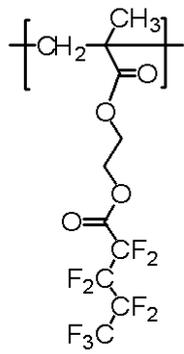
30



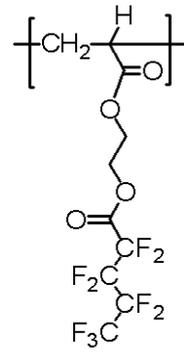
(a4-1-13)



(a4-1-14)



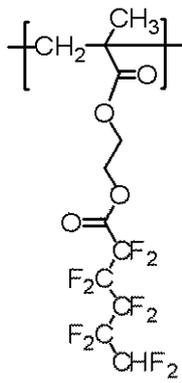
(a4-1-15)



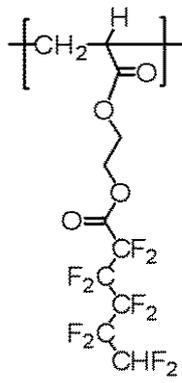
(a4-1-16)

40

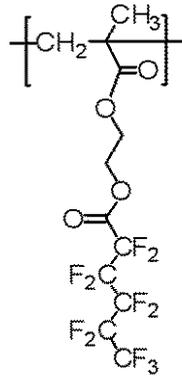
【0144】



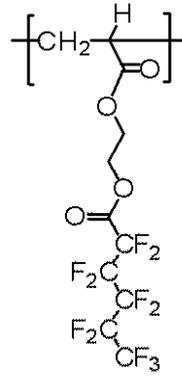
(a4-1-17)



(a4-1-18)

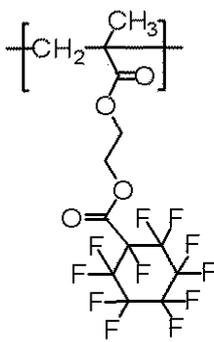


(a4-1-19)

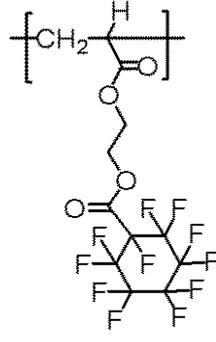


(a4-1-20)

10



(a4-1-21)

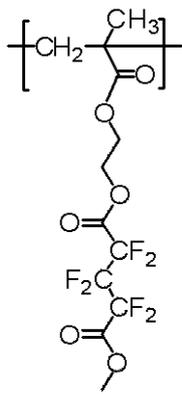


(a4-1-22)

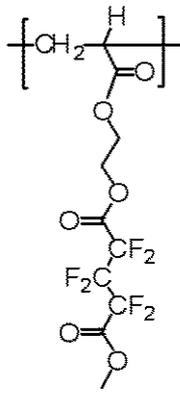
20

【 0 1 4 5 】

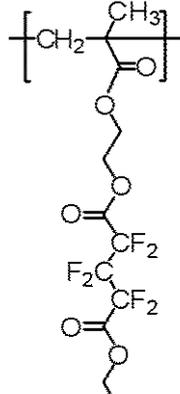
式 (a 4 - 3) で表される構造単位としては、式 (a 4 - 1 ' - 1) ~ 式 (a 4 - 1 ' - 2 2) でそれぞれ表される構造単位が挙げられる。



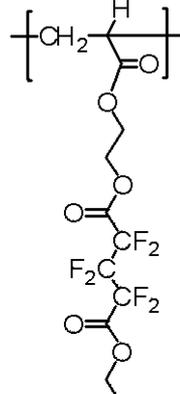
(a4-1'-1)



(a4-1'-2)

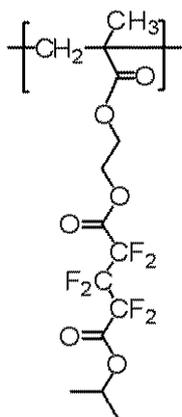


(a4-1'-3)

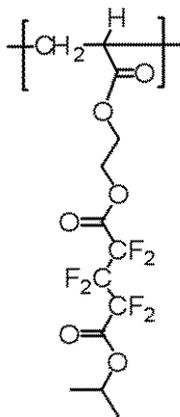


(a4-1'-4)

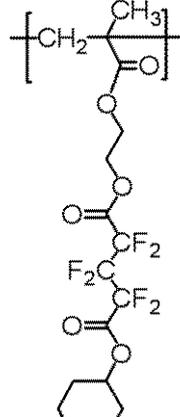
10



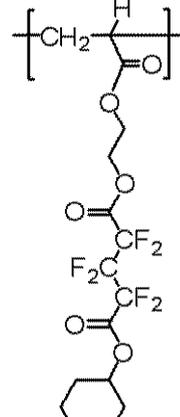
(a4-1'-5)



(a4-1'-6)

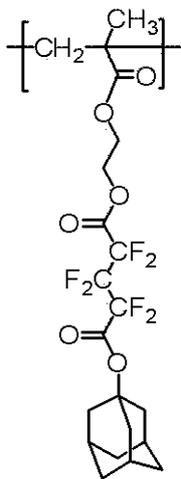


(a4-1'-7)

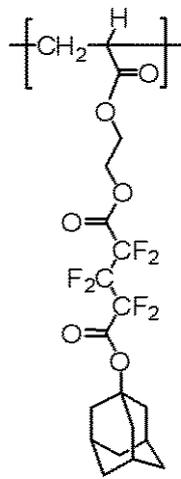


(a4-1'-8)

20



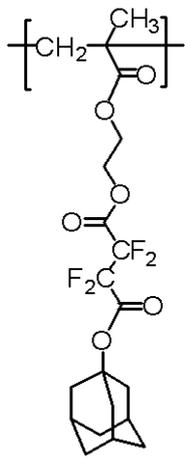
(a4-1'-9)



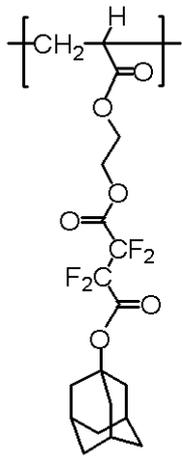
(a4-1'-10)

30

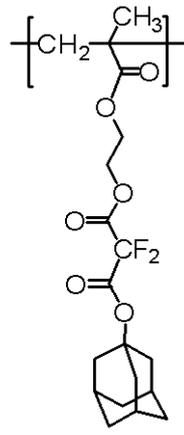
40



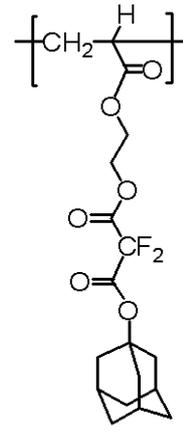
(a4-1'-11)



(a4-1'-12)

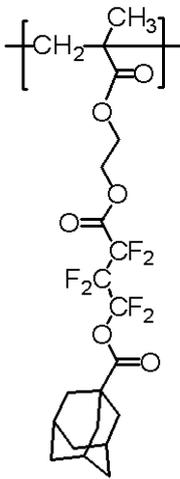


(a4-1'-13)

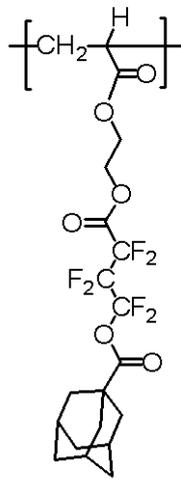


(a4-1'-14)

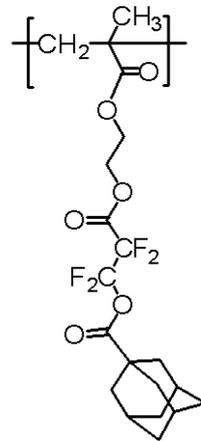
10



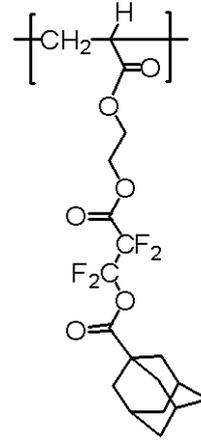
(a4-1'-15)



(a4-1'-16)



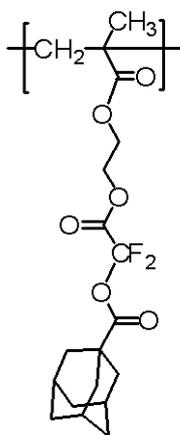
(a4-1'-17)



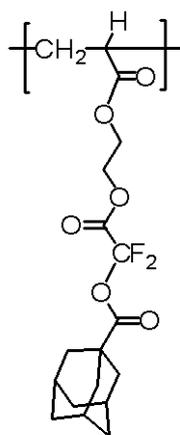
(a4-1'-18)

20

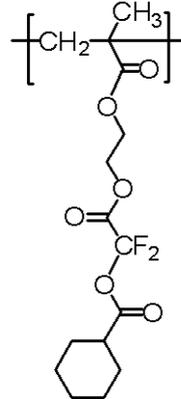
30



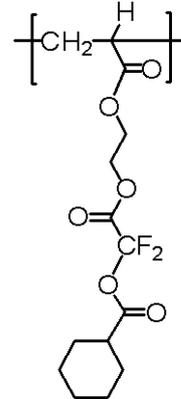
(a4-1'-19)



(a4-1'-20)



(a4-1'-21)

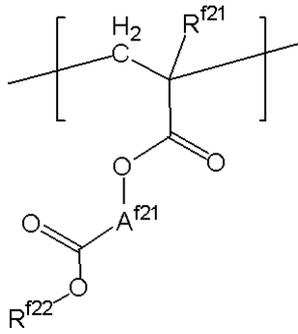


(a4-1'-22)

40

【 0 1 4 7 】

構造単位 (a 4) としては、式 (a 4 - 4) で表される構造単位も挙げられる。



(a4-4)

[式(a4-4)中、

R^{f21} は、水素原子又はメチル基を表す。

A^{f21} は、 $-(CH_2)_{j1}-$ 、 $-(CH_2)_{j2}-O-(CH_2)_{j3}-$ 又は $-(CH_2)_{j4}-CO-O-(CH_2)_{j5}-$ を表す。

$j1 \sim j5$ は、互いに独立に、1～6の整数を表す。

R^{f22} は、フッ素原子を有する炭素数1～10の炭化水素基を表す。]

【0148】

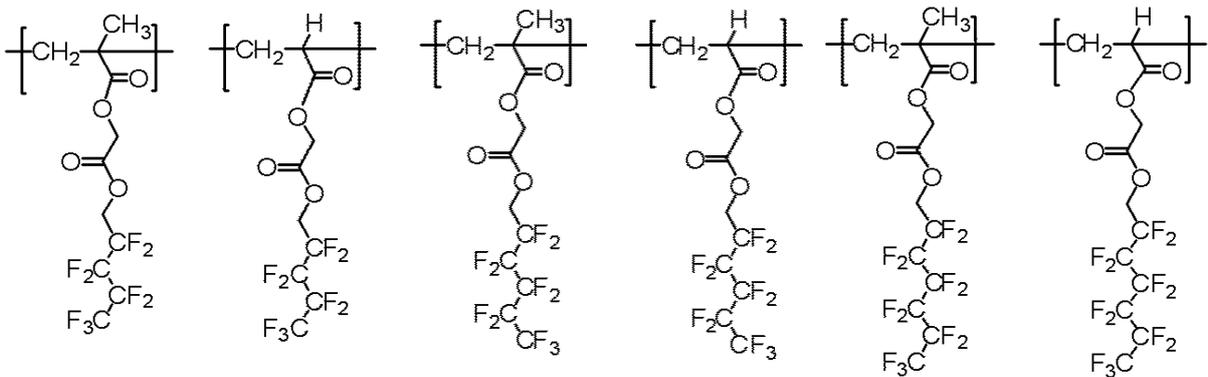
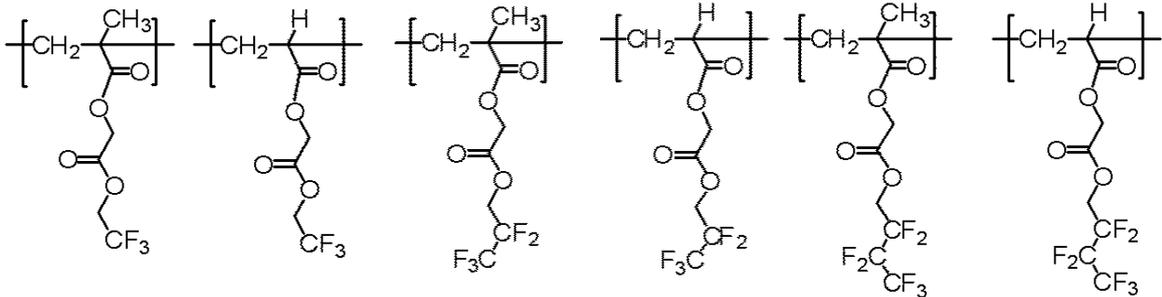
R^{f22} のフッ素原子を有する炭化水素基としては、式(a4-2)における R^{f2} の炭化水素基と同じものが挙げられる。 R^{f22} は、フッ素原子を有する炭素数1～10のアルキル基又はフッ素原子を有する炭素数1～10の脂環式炭化水素基であることが好ましく、フッ素原子を有する炭素数1～10のアルキル基であることがより好ましく、フッ素原子を有する炭素数1～6のアルキル基であることがさらに好ましい。

【0149】

式(a4-4)においては、 A^{f21} としては、 $-(CH_2)_{j1}-$ が好ましく、エチレン基又はメチレン基がより好ましく、メチレン基がさらに好ましい。

【0150】

式(a4-4)で表される構造単位としては、例えば、以下の構造単位が挙げられる。



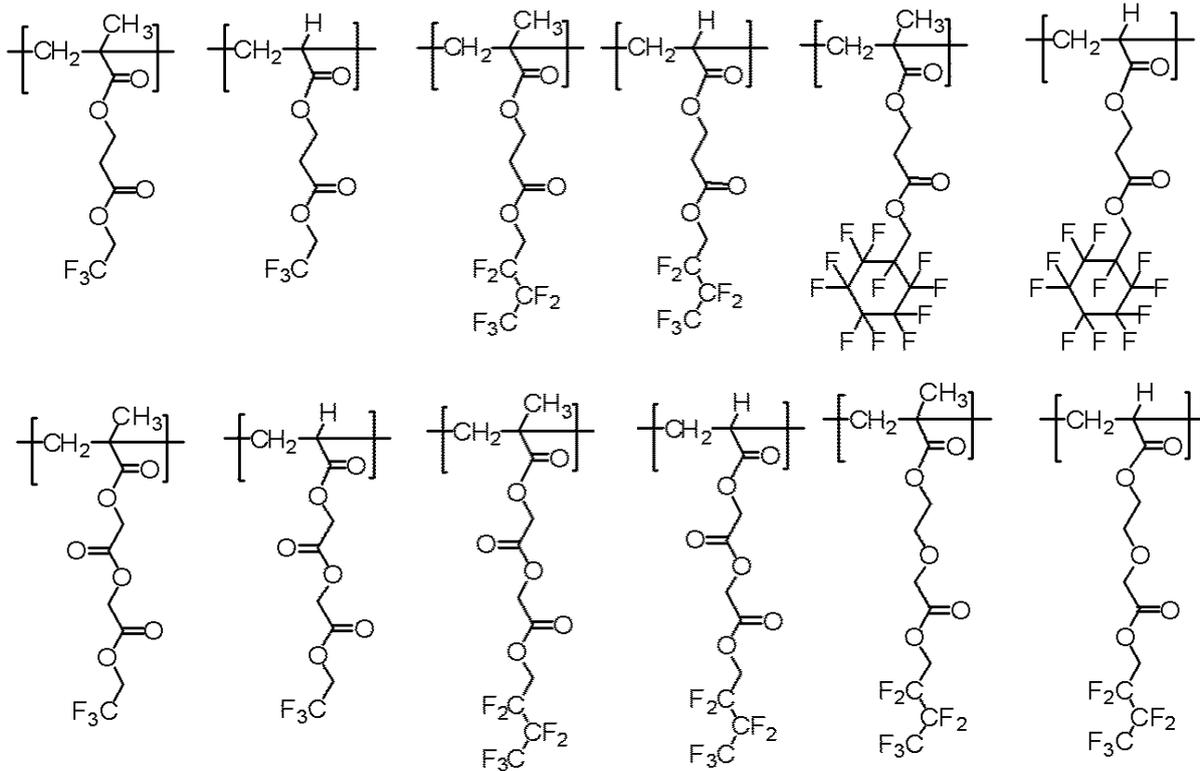
【0151】

10

20

30

40



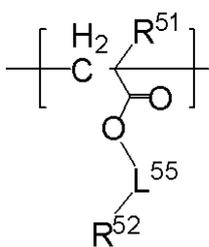
【 0 1 5 2 】

樹脂 (A) が、構造単位 (a 4) を有する場合、その含有率は、樹脂 (A) の全構造単位の合計に対して、1 ~ 20 モル%であることが好ましく、2 ~ 15 モル%であることがより好ましく、3 ~ 10 モル%であることがさらに好ましい。

【 0 1 5 3 】

構造単位 (a 5) が有する非脱離炭化水素基としては、直鎖、分岐又は環状の炭化水素基が挙げられる。なかでも、構造単位 (a 5) は、脂環式炭化水素基であることが好ましい。

構造単位 (a 5) としては、例えば、式 (a 5 - 1) で表される構造単位が挙げられる



[式 (a 5 - 1) 中、

R^{51} は、水素原子又はメチル基を表す。

R^{52} は、炭素数 3 ~ 18 の脂環式炭化水素基を表し、該脂環式炭化水素基に含まれる水素原子は炭素数 1 ~ 8 の脂肪族炭化水素基又はヒドロキシ基で置換されていてもよい。但し、 L^{55} との結合位置にある炭素原子に結合する水素原子は、炭素数 1 ~ 8 の脂肪族炭化水素基で置換されない。

L^{55} は、単結合又は炭素数 1 ~ 18 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該飽和炭化水素基に含まれるメチレン基は、酸素原子又はカルボニル基に置き換わっていてもよい。]

【 0 1 5 4 】

R^{52} の脂環式炭化水素基は、単環式及び多環式のいずれでもよい。単環式の脂環式炭化水素基としては、例えば、シクロプロピル基、シクロブチル基、シクロペンチル基及びシクロヘキシル基が挙げられる。多環式の脂環式炭化水素基としては、例えば、アダマン

10

20

30

40

50

チル基及びノルボルニル基等が挙げられる。

炭素数 1 ~ 8 の脂肪族炭化水素基は、例えば、メチル基、エチル基、n - プロピル基、イソプロピル基、n - ブチル基、sec - ブチル基、tert - ブチル基、ペンチル基、ヘキシル基、オクチル基及び 2 - エチルヘキシル基等のアルキル基が挙げられる。

置換基を有した脂環式炭化水素基としては、3 - ヒドロキシアダマンチル基、3 - メチルアダマンチル基などが挙げられる。

R^{5 2} は、好ましくは無置換の炭素数 3 ~ 18 の脂環式炭化水素基であり、より好ましくはアダマンチル基、ノルボルニル基又はシクロヘキシル基である。

【 0 1 5 5 】

L^{5 5} の 2 価の飽和炭化水素基としては、2 価の脂肪族飽和炭化水素基及び 2 価の脂環式飽和炭化水素基が挙げられ、好ましくは 2 価の脂肪族飽和炭化水素基が挙げられる。

10

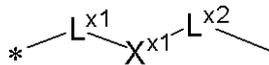
2 価の脂肪族飽和炭化水素基としては、例えば、メチレン基、エチレン基、プロパンジイル基、ブタンジイル基及びペンタンジイル基等のアルカンジイル基が挙げられる。

2 価の脂環式飽和炭化水素基は、単環式及び多環式のいずれでもよい。単環式の脂環式飽和炭化水素基としては、シクロペンタンジイル基及びシクロヘキサンジイル基等のシクロアルカンジイル基が挙げられる。多環式の 2 価の脂環式飽和炭化水素基としては、アダマンタンジイル基及びノルボルナンジイル基等が挙げられる。

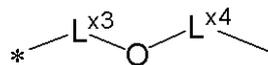
【 0 1 5 6 】

飽和炭化水素基に含まれるメチレン基が、酸素原子又はカルボニル基で置き換わった基としては、例えば、式 (L 1 - 1) ~ 式 (L 1 - 4) で表される基が挙げられる。下記式中、* は、酸素原子との結合手を表す。

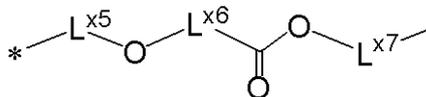
20



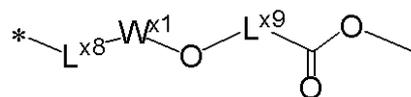
(L1-1)



(L1-2)



(L1-3)



(L1-4)

30

[式 (L 1 - 1) 中、

X^{x 1} は、カルボニルオキシ基又はオキシカルボニル基を表す。

L^{x 1} は、炭素数 1 ~ 16 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基を表す。

L^{x 2} は、単結合又は炭素数 1 ~ 15 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基を表す。

ただし、L^{x 1} 及び L^{x 2} の合計炭素数は、16 以下である。

式 (L 1 - 2) 中、

L^{x 3} は、炭素数 1 ~ 17 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基を表す。

L^{x 4} は、単結合又は炭素数 1 ~ 16 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基を表す。

ただし、L^{x 3} 及び L^{x 4} の合計炭素数は、17 以下である。

40

式 (L 1 - 3) 中、

L^{x 5} は、炭素数 1 ~ 15 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基を表す。

L^{x 6} 及び L^{x 7} は、互いに独立に、単結合又は炭素数 1 ~ 14 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基を表す。

ただし、L^{x 5} ~ L^{x 7} の合計炭素数は、15 以下である。

式 (L 1 - 4) 中、

L^{x 8} 及び L^{x 9} は、単結合又は炭素数 1 ~ 12 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基を表す。

。

W^{x 1} は、炭素数 3 ~ 15 の 2 価の脂環式飽和炭化水素基を表す。

ただし、L^{x 8}、L^{x 9} 及び W^{x 1} の合計炭素数は、15 以下である。]

50

【0157】

L^{x1} は、好ましくは炭素数 1 ~ 8 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基であり、より好ましくはメチレン基又はエチレン基である。

L^{x2} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 8 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基であり、より好ましくは単結合である。

L^{x3} は、好ましくは炭素数 1 ~ 8 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基である。

L^{x4} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 8 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基である。

L^{x5} は、好ましくは炭素数 1 ~ 8 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基であり、より好ましくはメチレン基又はエチレン基である。

L^{x6} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 8 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基であり、より好ましくはメチレン基又はエチレン基である。

10

L^{x7} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 8 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基である。

L^{x8} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 8 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基であり、より好ましくは単結合又はメチレン基である。

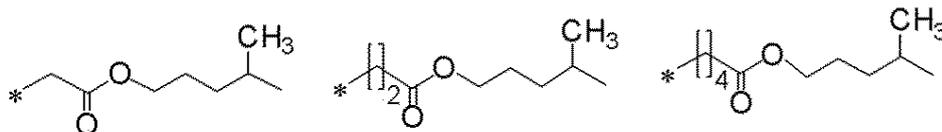
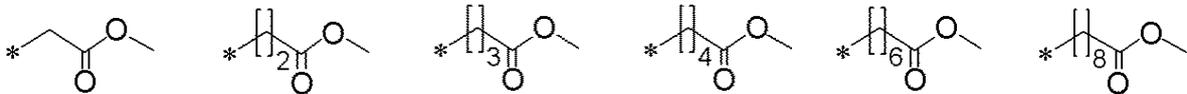
L^{x9} は好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 8 の 2 価の脂肪族飽和炭化水素基であり、より好ましくは、単結合又はメチレン基である。

W^{x1} は、好ましくは炭素数 3 ~ 10 の 2 価の脂環式飽和炭化水素基であり、より好ましくはシクロヘキサジイル基又はアダマンンジイル基である。

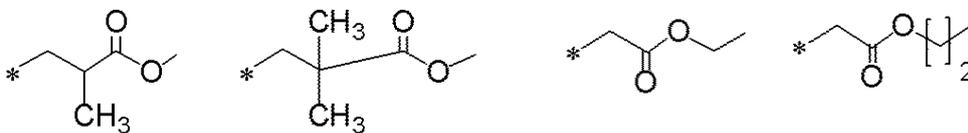
【0158】

式 (L1 - 1) で表される基としては、例えば、以下に示す 2 価の基が挙げられる。

20



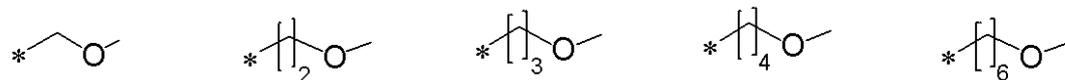
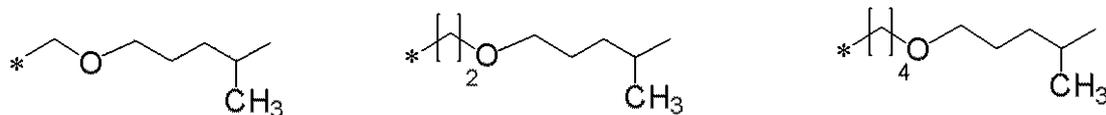
30



【0159】

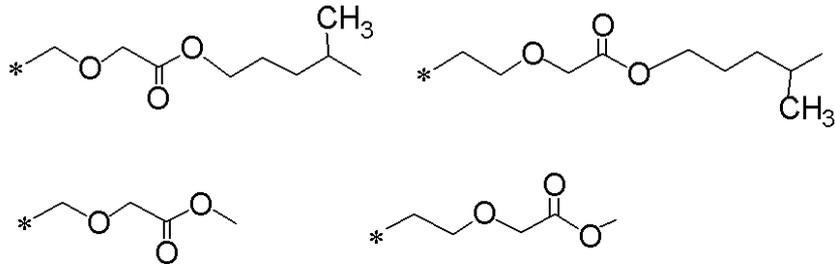
式 (L1 - 2) で表される基としては、例えば、以下に示す 2 価の基が挙げられる。

40



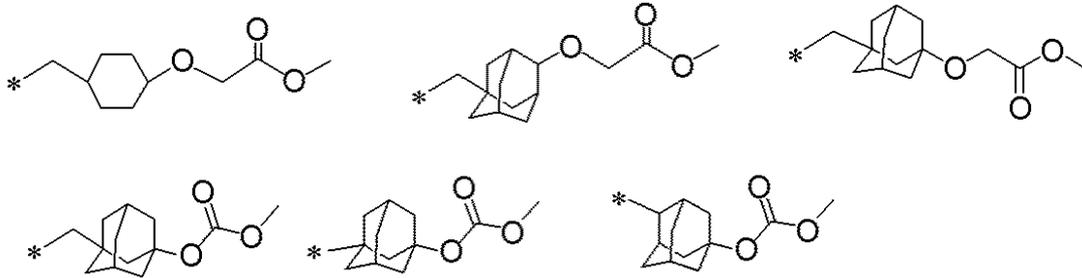
【0160】

式 (L1 - 3) で表される基としては、例えば、以下に示す 2 価の基が挙げられる。



【 0 1 6 1 】

式 (L 1 - 4) で表される基としては、例えば、以下に示す 2 価の基が挙げられる。



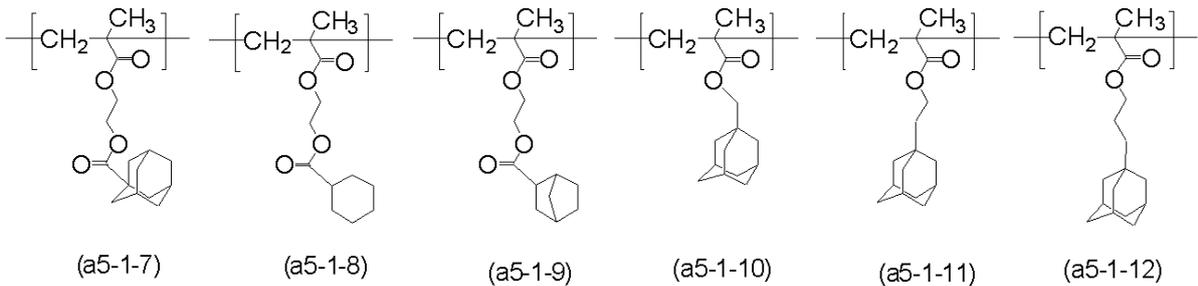
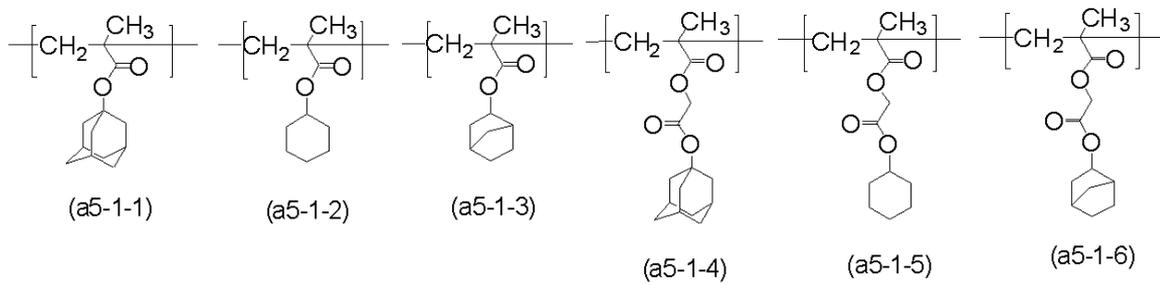
10

L⁵⁵ は、好ましくは、単結合又は式 (L 1 - 1) で表される基である。

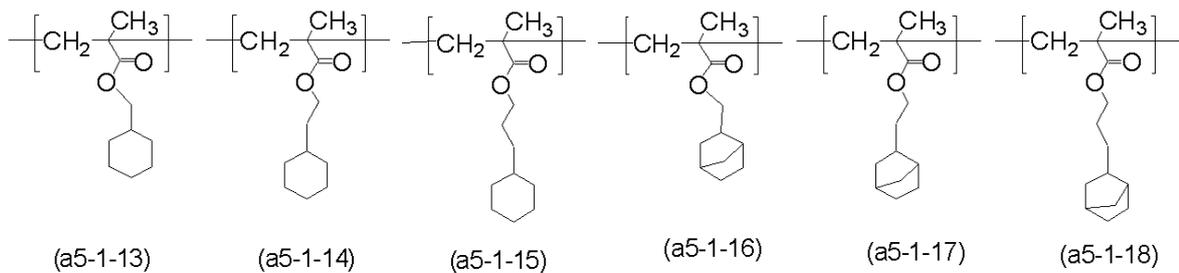
【 0 1 6 2 】

構造単位 (a 5 - 1) としては、以下のもの等が挙げられる。

20



30



40

【 0 1 6 3 】

式 (a 5 - 1 - 1) ~ 式 (a 5 - 1 - 1 8) において、R⁵¹ に相当するメチル基が水素原子に置き換わった構造単位も、構造単位 (a 5 - 1) の具体例として挙げることができる。

【 0 1 6 4 】

樹脂 (A) が、構造単位 (a 5) を有する場合、その含有率は、樹脂 (A) の全構造単

50

位の合計に対して、1～30モル%であることが好ましく、2～20モル%であることがより好ましく、3～15モル%であることがさらに好ましい。

【0165】

樹脂(A)は、上述の構造単位以外の構造単位を有していてもよく、このような構造単位としては、当技術分野で周知の構造単位を挙げられる。

【0166】

樹脂(A)は、好ましくは、構造単位(I)と構造単位(a1)と構造単位(s)とからなる樹脂である。

構造単位(a1)は、好ましくは構造単位(a1-1)及び構造単位(a1-2)(好ましくはシクロヘキシル基、シクロペンチル基を有する該構造単位)から選ばれる少なくとも一種、より好ましくは構造単位(a1-1)及び構造単位(a1-2)(好ましくはシクロヘキシル基、シクロペンチル基を有する該構造単位)から選ばれる少なくとも二種である。

構造単位(s)は、好ましくは構造単位(a2)及び構造単位(a3)の少なくとも一種である。構造単位(a2)は、好ましくは式(a2-1)で表される構造単位である。構造単位(a3)は、好ましくは式(a3-1)で表される構造単位、式(a3-2)で表される構造単位及び式(a3-4)で表される構造単位から選ばれる少なくとも一種である。

【0167】

樹脂(A)は、アダマンチル基を有するモノマーに由来する構造単位(特に、構造単位(a1-1))を、構造単位(a1)の含有量に対して15モル%以上含有していることが好ましい。アダマンチル基を有する構造単位の含有量が増えると、レジストパターンのドライエッチング耐性が向上する。

【0168】

樹脂(A)を構成する各構造単位は、1種のみ又は2種以上を組合せて用いてもよく、これら構造単位を誘導するモノマーを用いて、公知の重合法(例えばラジカル重合法)によって製造することができる。樹脂(A)が有する各構造単位の含有率は、重合に用いるモノマーの使用量で調整できる。

樹脂(A)の重量平均分子量は、好ましくは2,000以上(より好ましくは2,500以上、さらに好ましくは3,000以上)、50,000以下(より好ましくは30,000以下、さらに好ましくは15,000以下)である。

本明細書において、重量平均分子量は、ゲルパーミュエーションクロマトグラフィーにより求めた値である。ゲルパーミュエーションクロマトグラフィーは、実施例に記載の分析条件により測定することができる。

【0169】

<レジスト組成物>

本発明のレジスト組成物は、少なくとも樹脂と酸発生剤とを含む。本発明のレジスト組成物は、樹脂及び酸発生剤のいずれか一方に塩(I)に由来する構造単位又は塩(I)を含んでいればよい。本発明のレジスト組成物は、構造単位(I)を含む樹脂を有するレジスト組成物であるか、樹脂に構造単位(I)を含み、かつ酸発生剤に塩(I)を含むレジスト組成物であることが好ましい。

本発明のレジスト組成物は、さらに、クエンチャー(以下「クエンチャー(C)」という場合がある)及び/又は溶剤(以下「溶剤(E)」という場合がある)を含有することが好ましい。

【0170】

樹脂

レジスト組成物における樹脂は、少なくとも酸不安定基を有する構造単位を含む樹脂であればよい。例えば、樹脂(A)から塩(I)に由来する構造単位を除いた樹脂(以下「樹脂(AA)」という場合がある)、上述した構造単位(a1)を含む樹脂、構造単位(a1)と、構造単位(s)及び/又は構造単位(t)とを含む樹脂、上述した樹脂(A)

10

20

30

40

50

又はこれらの組み合わせが挙げられる。なかでも、樹脂(A)であることが好ましい。樹脂は、さらに樹脂(A)以外の樹脂を含んでいてもよい。

【0171】

樹脂(A)以外の樹脂

本発明のレジスト組成物は、樹脂(A)に加えて、樹脂(A)以外の樹脂を含んでもよい。このような樹脂としては、例えば、樹脂(A)から構造単位(I)を除いた樹脂、つまり樹脂(AA)、構造単位(t)のみからなる樹脂、構造単位(a4)を含む樹脂(ただし、構造単位(a1)を含まない。以下「樹脂(X)」という場合がある)等が挙げられる。なかでも、樹脂(X)が好ましい。

【0172】

樹脂(X)がさらに有していてもよい構造単位としては、構造単位(a2)、構造単位(a3)及びその他の公知のモノマーに由来する構造単位が挙げられる。

樹脂(X)は、構造単位(a4)の含有率が、樹脂(X)の全構造単位の合計に対して、40モル%以上であることが好ましく、45モル%以上であることがより好ましく、50モル%以上であることがさらに好ましい。

樹脂(X)の含有量は、樹脂(A)及び樹脂(AA)等の酸不安定基を有する構造単位を含む樹脂100質量部に対して、好ましくは1~60質量部であり、より好ましくは1~50質量部であり、さらに好ましくは2~40質量部であり、特に好ましくは2~30質量部である。

樹脂(X)の重量平均分子量は、好ましくは、5,000以上(より好ましくは6,000以上)、80,000以下(より好ましくは60,000以下)である。

【0173】

レジスト組成物が樹脂(A)を含む場合又は樹脂(A)以外の樹脂を含有する場合、その合計含有率は、レジスト組成物の固形分に対して、80質量%以上99質量%以下が好ましく、90質量%以上99質量%以下がより好ましい。レジスト組成物の固形分及びこれに対する樹脂の含有率は、液体クロマトグラフィー又はガスクロマトグラフィー等の公知の分析手段で測定することができる。

【0174】

酸発生剤

レジスト組成物における酸発生剤は、上述した塩(I)のみを含む酸発生剤、塩(I)以外の酸発生剤(B)のみを含む酸発生剤、塩(I)及び酸発生剤(B)を含む酸発生剤のいずれであってもよい。なかでも、酸発生剤(B)を含む酸発生剤が好ましい。特に、上述した樹脂に塩(I)に由来する構造単位が含まれていない場合には、化合物(I)を含む酸発生剤であることがより好ましい。酸発生剤は、露光により酸を発生し、発生した酸が、触媒的に働き、樹脂(A)等の酸により脱離する基を脱離させる。

レジスト組成物において塩(I)を酸発生剤として用いる場合、塩(I)の含有量は、樹脂(A)及び樹脂(AA)に対して、1~20質量%であることが好ましく、2~15質量%であることがより好ましい。

【0175】

酸発生剤(B)

酸発生剤(B)は、非イオン系酸発生剤及びイオン系酸発生剤のいずれでもよい。非イオン系酸発生剤としては、有機ハロゲン化物、スルホネートエステル類(例えば2-ニトロベンジルエステル、芳香族スルホネート、オキシムスルホネート、N-スルホニルオキシミド、スルホニルオキシケトン、ジアゾナフトキノン 4-スルホネート)、スルホン類(例えばジスルホン、ケトスルホン、スルホニルジアゾメタン)等が挙げられる。イオン系酸発生剤としては、オニウムカチオンを含むオニウム塩(例えばジアゾニウム塩、ホスホニウム塩、スルホニウム塩、ヨードニウム塩)等が挙げられる。オニウム塩のアニオンとしては、スルホン酸アニオン、スルホニルイミドアニオン、スルホニルメチドアニオン等がある。

【0176】

10

20

30

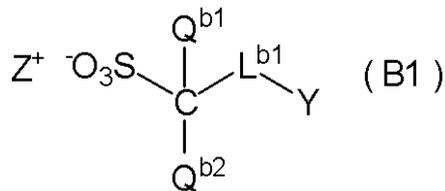
40

50

酸発生剤 (B) としては、特開昭 63 - 26653 号、特開昭 55 - 164824 号、特開昭 62 - 69263 号、特開昭 63 - 146038 号、特開昭 63 - 163452 号、特開昭 62 - 153853 号、特開昭 63 - 146029 号や、米国特許第 3,779,778 号、米国特許第 3,849,137 号、独国特許第 3914407 号、欧州特許第 126,712 号等に記載の放射線によって酸を発生する化合物を使用することができる。また、公知の方法で製造した化合物を使用してもよい。

【0177】

酸発生剤 (B) は、好ましくはフッ素含有酸発生剤であり、より好ましくは式 (B1) で表される塩 (以下「酸発生剤 (B1)」という場合がある) である。



[式 (B1) 中、

Q^{b1} 及び Q^{b2} は、互いに独立に、フッ素原子又は炭素数 1 ~ 6 のペルフルオロアルキル基を表す。

L^{b1} は、炭素数 1 ~ 24 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる $-\text{CH}_2-$ は、 $-\text{O}-$ 又は $-\text{CO}-$ に置き換わっていてもよく、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基で置換されていてもよい。

Y は、置換基を有していてもよいメチル基又は置換基を有していてもよい炭素数 3 ~ 18 の 1 価の脂環式炭化水素基を表し、該 1 価の脂環式炭化水素基に含まれる $-\text{CH}_2-$ は、 $-\text{O}-$ 、 $-\text{SO}_2-$ 又は $-\text{CO}-$ に置き換わっていてもよい。

Z^+ は、有機カチオンを表す。]

【0178】

Q^{b1} 及び Q^{b2} のペルフルオロアルキル基としては、トリフルオロメチル基、ペルフルオロエチル基、ペルフルオロプロピル基、ペルフルオロイソプロピル基、ペルフルオロブチル基、ペルフルオロ *sec*-ブチル基、ペルフルオロ *tert*-ブチル基、ペルフルオロペンチル基及びペルフルオロヘキシル基等が挙げられる。

Q^{b1} 及び Q^{b2} は、互いに独立に、フッ素原子又はトリフルオロメチル基であることが好ましく、ともにフッ素原子であることがより好ましい。

【0179】

L^{b1} の 2 価の飽和炭化水素基としては、直鎖状アルカンジイル基、分岐状アルカンジイル基、単環式又は多環式の 2 価の脂環式飽和炭化水素基が挙げられ、これらの基のうち 2 種以上を組合せることにより形成される基でもよい。

具体的には、メチレン基、エチレン基、プロパン - 1, 3 - ジイル基、ブタン - 1, 4 - ジイル基、ペンタン - 1, 5 - ジイル基、ヘキサン - 1, 6 - ジイル基、ヘプタン - 1, 7 - ジイル基、オクタン - 1, 8 - ジイル基、ノナン - 1, 9 - ジイル基、デカン - 1, 10 - ジイル基、ウンデカン - 1, 11 - ジイル基、ドデカン - 1, 12 - ジイル基、トリデカン - 1, 13 - ジイル基、テトラデカン - 1, 14 - ジイル基、ペンタデカン - 1, 15 - ジイル基、ヘキサデカン - 1, 16 - ジイル基及びヘプタデカン - 1, 17 - ジイル基等の直鎖状アルカンジイル基；

エタン - 1, 1 - ジイル基、プロパン - 1, 1 - ジイル基、プロパン - 1, 2 - ジイル基、プロパン - 2, 2 - ジイル基、ペンタン - 2, 4 - ジイル基、2 - メチルプロパン - 1, 3 - ジイル基、2 - メチルプロパン - 1, 2 - ジイル基、ペンタン - 1, 4 - ジイル基、2 - メチルブタン - 1, 4 - ジイル基等の分岐状アルカンジイル基；

シクロブタン - 1, 3 - ジイル基、シクロペンタン - 1, 3 - ジイル基、シクロヘキサン - 1, 4 - ジイル基、シクロオクタン - 1, 5 - ジイル基等のシクロアルカンジイル基である単環式の 2 価の脂環式飽和炭化水素基；

10

20

30

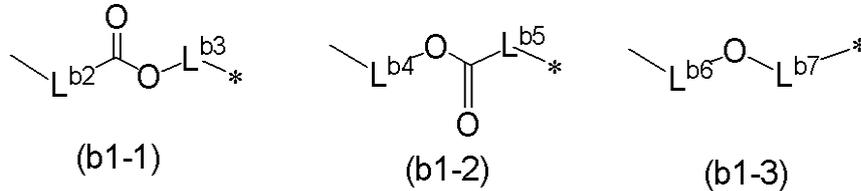
40

50

ノルボルナン - 1, 4 - ジイル基、ノルボルナン - 2, 5 - ジイル基、アダマンタン - 1, 5 - ジイル基、アダマンタン - 2, 6 - ジイル基等の多環式の 2 価の脂環式飽和炭化水素基等が挙げられる。

【0180】

L^{b1} の 2 価の飽和炭化水素基に含まれる $-CH_2-$ が $-O-$ 又は $-CO-$ で置き換わった基としては、例えば、式 (b1-1) ~ 式 (b1-3) のいずれかで表される基が挙げられる。なお、式 (b1-1) ~ 式 (b1-3) 及び下記の具体例において、* は $-Y$ との結合手を表す。



10

[式 (b1-1) 中、

L^{b2} は、単結合又は炭素数 1 ~ 22 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子に置換されていてもよい。

L^{b3} は、単結合又は炭素数 1 ~ 22 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基に置換されていてもよく、該飽和炭化水素基に含まれるメチレン基は、酸素原子又はカルボニル基に置き換わっていてもよい。

20

ただし、 L^{b2} と L^{b3} との炭素数合計は、22 以下である。

式 (b1-2) 中、

L^{b4} は、単結合又は炭素数 1 ~ 22 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子に置換されていてもよい。

L^{b5} は、単結合又は炭素数 1 ~ 22 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基に置換されていてもよく、該飽和炭化水素基に含まれるメチレン基は、酸素原子又はカルボニル基に置き換わっていてもよい。

ただし、 L^{b4} と L^{b5} との炭素数合計は、22 以下である。

30

式 (b1-3) 中、

L^{b6} は、単結合又は炭素数 1 ~ 23 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基に置換されていてもよい。

L^{b7} は、単結合又は炭素数 1 ~ 23 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基に置換されていてもよく、該飽和炭化水素基に含まれるメチレン基は、酸素原子又はカルボニル基に置き換わっていてもよい。

ただし、 L^{b6} と L^{b7} との炭素数合計は、23 以下である。]

【0181】

式 (b1-1) ~ 式 (b1-3) においては、飽和炭化水素基に含まれるメチレン基が酸素原子又はカルボニル基に置き換わっている場合、置き換わる前の炭素数を該飽和炭化水素基の炭素数とする。

40

2 価の飽和炭化水素基としては、 L^{b1} の 2 価の飽和炭化水素基と同様のものが挙げられる。

【0182】

L^{b2} は、好ましくは単結合である。

L^{b3} は、好ましくは炭素数 1 ~ 4 の 2 価の飽和炭化水素基である。

L^{b4} は、好ましくは炭素数 1 ~ 8 の 2 価の飽和炭化水素基であり、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子はフッ素原子に置換されていてもよい。

L^{b5} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 8 の 2 価の飽和炭化水素基である。

50

L^{b 6} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 4 の 2 価の飽和炭化水素基であり、該飽和炭化水素基に含まれる水素原子はフッ素原子に置換されていてもよい。

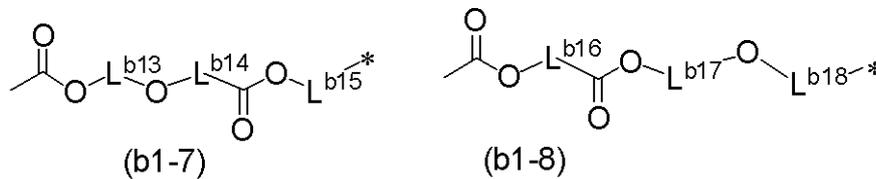
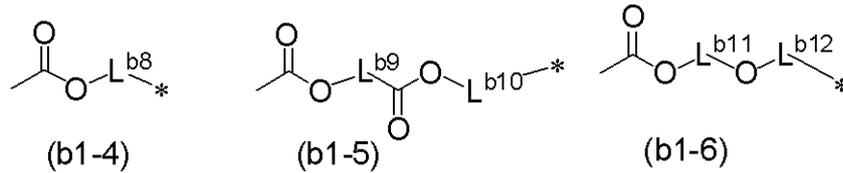
L^{b 7} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 1 8 の 2 価の飽和炭化水素基であり、該飽和炭化水素基に含まれる水素原子はフッ素原子又はヒドロキシ基に置換されていてもよく、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれるメチレン基は酸素原子又はカルボニル基に置き換わっていてもよい。

【 0 1 8 3 】

L^{b 1} の 2 価の飽和炭化水素基に含まれる - C H ₂ - が - O - 又は - C O - で置き換わった基としては、式 (b 1 - 1) 又は式 (b 1 - 3) で表される基が好ましい。

【 0 1 8 4 】

式 (b 1 - 1) としては、式 (b 1 - 4) ~ 式 (b 1 - 8) でそれぞれ表される基が挙げられる。



[式 (b 1 - 4) 中、

L^{b 8} は、単結合又は炭素数 1 ~ 2 2 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基に置換されていてもよい。

式 (b 1 - 5) 中、

L^{b 9} は、炭素数 1 ~ 2 0 の 2 価の飽和炭化水素基を表す。

L^{b 1 0} は、単結合又は炭素数 1 ~ 1 9 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基に置換されていてもよい

ただし、L^{b 9} 及び L^{b 1 0} の合計炭素数は 2 0 以下である。

式 (b 1 - 6) 中、

L^{b 1 1} は、炭素数 1 ~ 2 1 の 2 価の飽和炭化水素基を表す。

L^{b 1 2} は、単結合又は炭素数 1 ~ 2 0 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基に置換されていてもよい

ただし、L^{b 1 1} 及び L^{b 1 2} の合計炭素数は 2 1 以下である。

式 (b 1 - 7) 中、

L^{b 1 3} は、炭素数 1 ~ 1 9 の 2 価の飽和炭化水素基を表す。

L^{b 1 4} は、単結合又は炭素数 1 ~ 1 8 の 2 価の飽和炭化水素基を表す。

L^{b 1 5} は、単結合又は炭素数 1 ~ 1 8 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基に置換されていてもよい

ただし、L^{b 1 3} ~ L^{b 1 5} の合計炭素数は 1 9 以下である。

式 (b 1 - 8) 中、

L^{b 1 6} は、炭素数 1 ~ 1 8 の 2 価の飽和炭化水素基を表す。

L^{b 1 7} は、炭素数 1 ~ 1 8 の 2 価の飽和炭化水素基を表す。

L^{b 1 8} は、単結合又は炭素数 1 ~ 1 7 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子又はヒドロキシ基に置換されていてもよい

10

20

30

40

50

ただし、 $L^{b16} \sim L^{b18}$ の合計炭素数は 19 以下である。]

【0185】

L^{b8} は、好ましくは炭素数 1 ~ 4 の 2 価の飽和炭化水素基である。

L^{b9} は、好ましくは炭素数 1 ~ 8 の 2 価の飽和炭化水素基である。

L^{b10} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 19 の 2 価の飽和炭化水素基であり、より好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 8 の 2 価の飽和炭化水素基である。

L^{b11} は、好ましくは炭素数 1 ~ 8 の 2 価の飽和炭化水素基である。

L^{b12} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 8 の 2 価の飽和炭化水素基である。

L^{b13} は、好ましくは炭素数 1 ~ 12 の 2 価の飽和炭化水素基である。

L^{b14} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 6 の 2 価の飽和炭化水素基である。

L^{b15} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 18 の 2 価の飽和炭化水素基であり、より好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 8 の 2 価の飽和炭化水素基である。

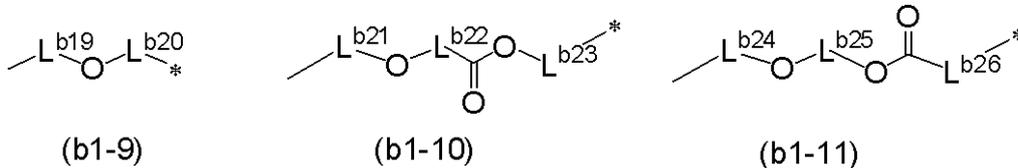
L^{b16} は、好ましくは炭素数 1 ~ 12 の 2 価の飽和炭化水素基である。

L^{b17} は、好ましくは炭素数 1 ~ 6 の 2 価の飽和炭化水素基である。

L^{b18} は、好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 17 の 2 価の飽和炭化水素基であり、より好ましくは単結合又は炭素数 1 ~ 4 の 2 価の飽和炭化水素基である。

【0186】

式 (b1-3) としては、式 (b1-9) ~ 式 (b1-11) でそれぞれ表される基が挙げられる。



[式 (b1-9) 中、

L^{b19} は、単結合又は炭素数 1 ~ 23 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子に置換されていてもよい。

L^{b20} は、単結合又は炭素数 1 ~ 23 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子はフッ素原子、ヒドロキシ基又はアシルオキシ基に置換されていてもよい。該アシルオキシ基に含まれるメチレン基は、酸素原子又はカルボニル基に置き換わっていてもよく、該アシルオキシ基に含まれる水素原子は、ヒドロキシ基に置換されていてもよい。

ただし、 L^{b19} 及び L^{b20} の合計炭素数は 23 以下である。

式 (b1-10) 中、

L^{b21} は、単結合又は炭素数 1 ~ 21 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子に置換されていてもよい。

L^{b22} は、単結合又は炭素数 1 ~ 21 の 2 価の飽和炭化水素基を表す。

L^{b23} は、単結合又は炭素数 1 ~ 21 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子、ヒドロキシ基又はアシルオキシ基に置換されていてもよい。該アシルオキシ基に含まれるメチレン基は、酸素原子又はカルボニル基に置き換わっていてもよく、該アシルオキシ基に含まれる水素原子は、ヒドロキシ基に置換されていてもよい。

ただし、 $L^{b21} \sim L^{b23}$ の合計炭素数は 21 以下である。

式 (b1-11) 中、

L^{b24} は、単結合又は炭素数 1 ~ 20 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子に置換されていてもよい。

L^{b25} は、炭素数 1 ~ 21 の 2 価の飽和炭化水素基を表す。

L^{b26} は、単結合又は炭素数 1 ~ 20 の 2 価の飽和炭化水素基を表し、該 2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子は、フッ素原子、ヒドロキシ基又はアシルオキシ基に置換

10

20

30

40

50

されていてもよい。該アシルオキシ基に含まれるメチレン基は、酸素原子又はカルボニル基に置き換わっていてもよく、該アシルオキシ基に含まれる水素原子は、ヒドロキシ基に置換されていてもよい。

ただし、 $L^{b24} \sim L^{b26}$ の合計炭素数は 21 以下である。]

【0187】

式 (b1-9) から式 (b1-11) においては、2 価の飽和炭化水素基に含まれる水素原子がアシルオキシ基に置換されている場合、アシルオキシ基の炭素数、エステル結合中の C O 及び O の数をも含めて、該 2 価の飽和炭化水素基の炭素数とする。

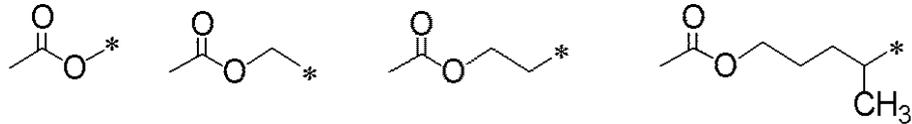
【0188】

アシルオキシ基としては、アセチルオキシ基、プロピオニルオキシ基、ブチリルオキシ基、シクロヘキシルカルボニルオキシ基、アダマンチルカルボニルオキシ基等が挙げられる。

置換基を有するアシルオキシ基としては、オキソアダマンチルカルボニルオキシ基、ヒドロキシアダマンチルカルボニルオキシ基、オキソシクロヘキシルカルボニルオキシ基、ヒドロキシシクロヘキシルカルボニルオキシ基等が挙げられる。

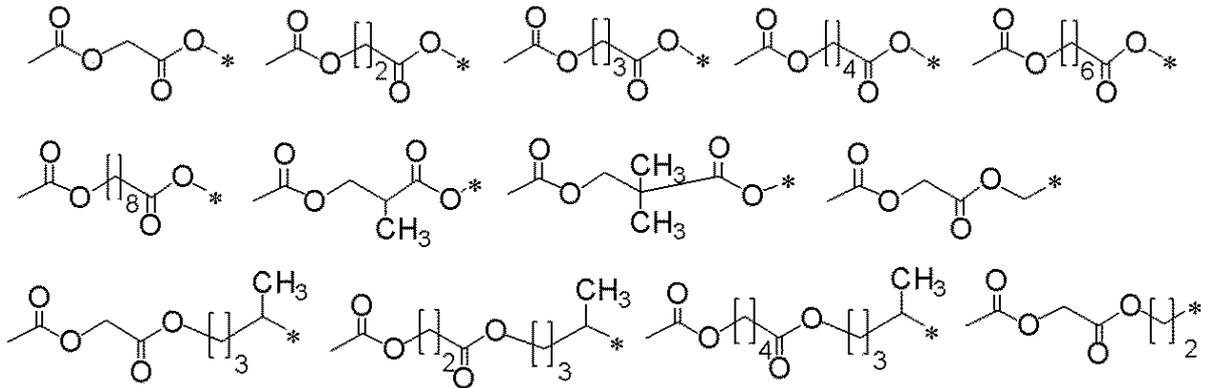
【0189】

式 (b1-1) で表される基のうち、式 (b1-4) で表される基としては、以下のものが挙げられる。



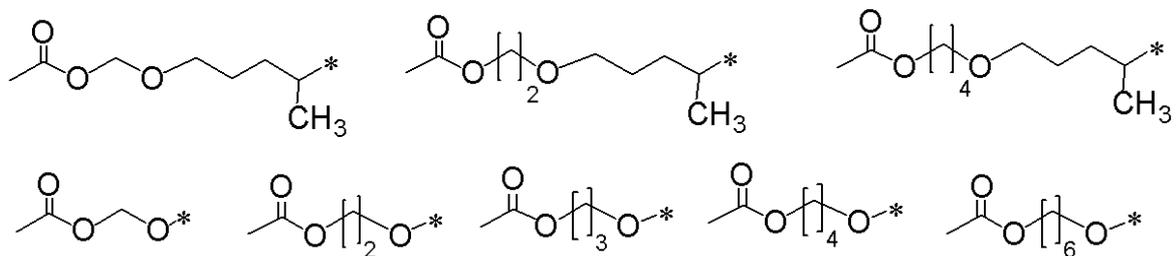
【0190】

式 (b1-1) で表される基のうち、式 (b1-5) で表される基としては、以下のものが挙げられる。



【0191】

式 (b1-1) で表される基のうち、式 (b1-6) で表される基としては、以下のものが挙げられる。



【0192】

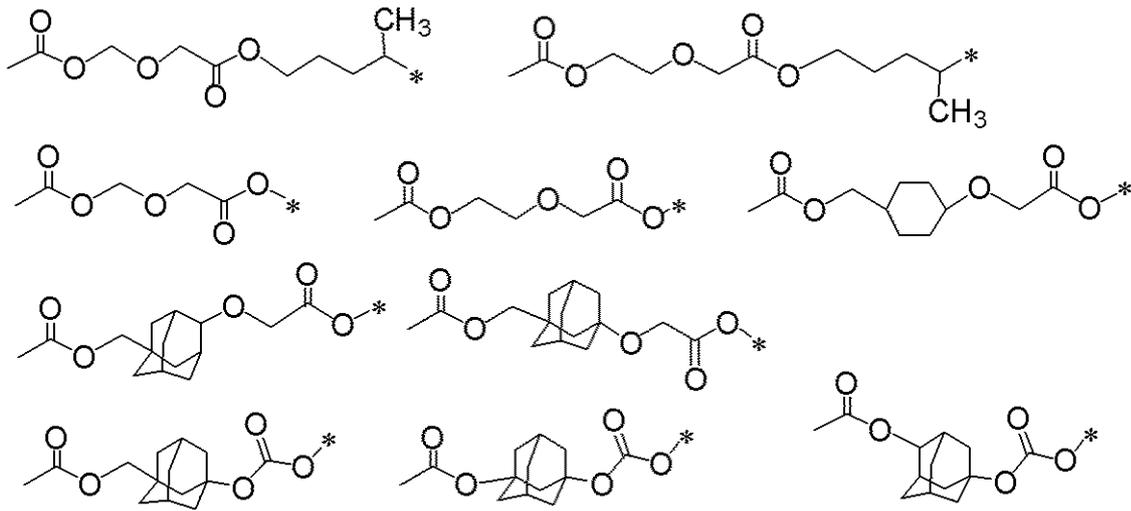
式 (b1-1) で表される基のうち、式 (b1-7) で表される基としては、以下のものが挙げられる。

10

20

30

40



10

【0193】

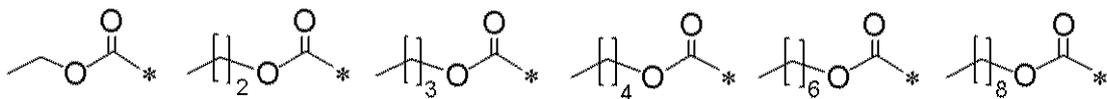
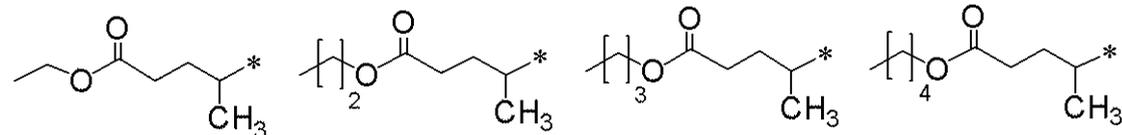
式(b1-1)で表される基のうち、式(b1-8)で表される基としては、以下のものが挙げられる。



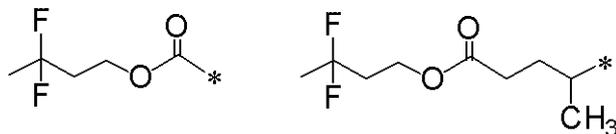
20

【0194】

式(b1-2)で表される基としては、以下のものが挙げられる。

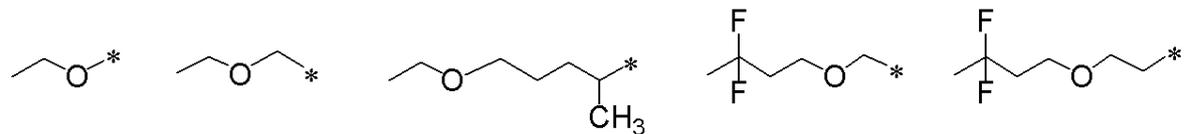


30

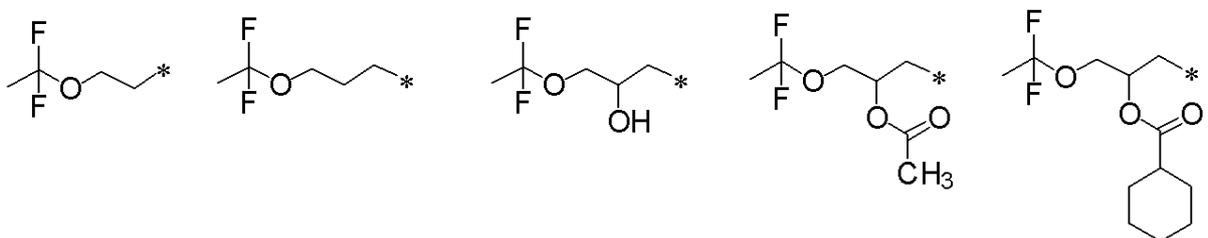


【0195】

式(b1-3)で表される基のうち、式(b1-9)で表される基としては、以下のものが挙げられる。



40

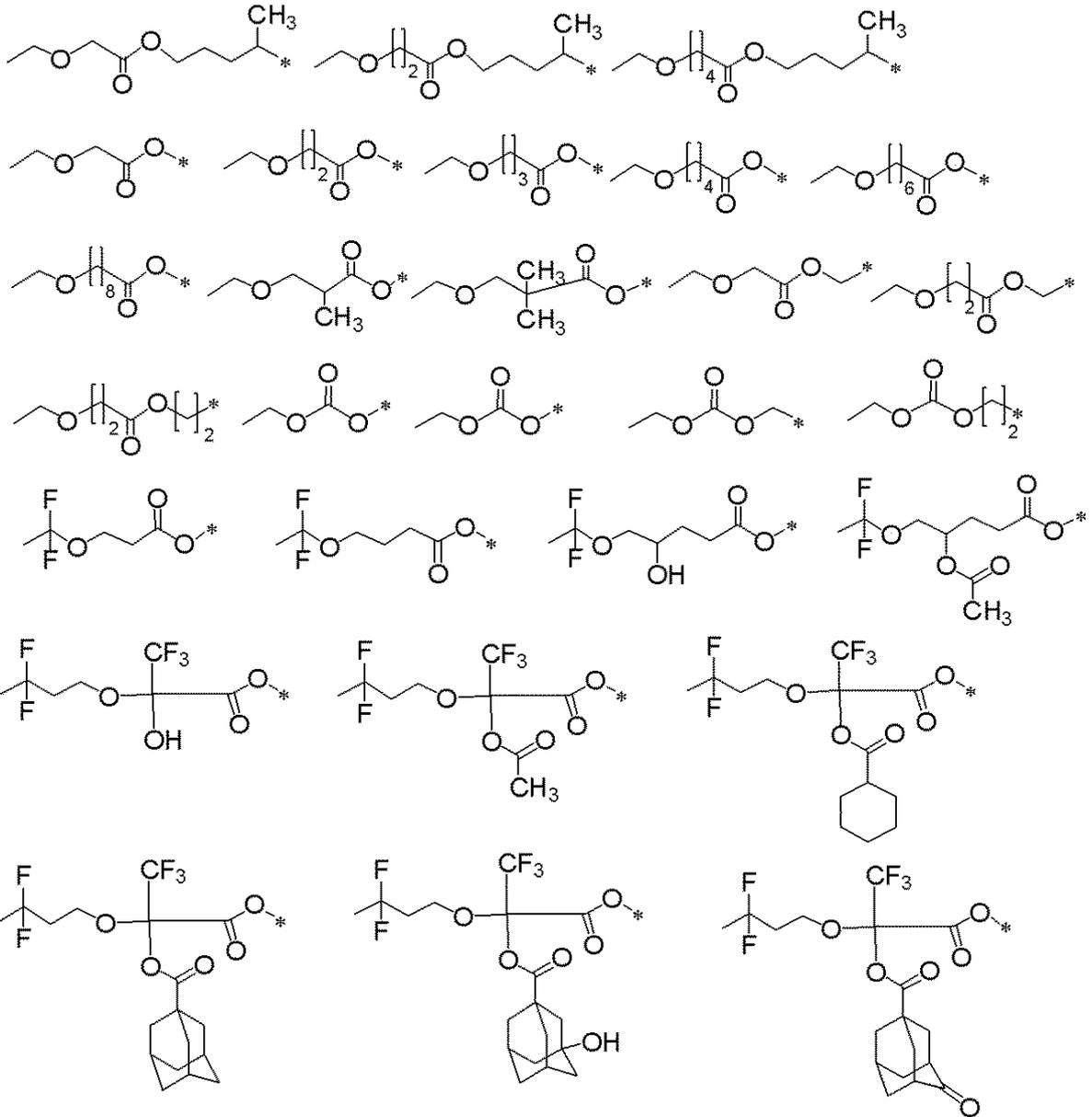


【0196】

式(b1-3)で表される基のうち、式(b1-10)で表される基としては、以下の

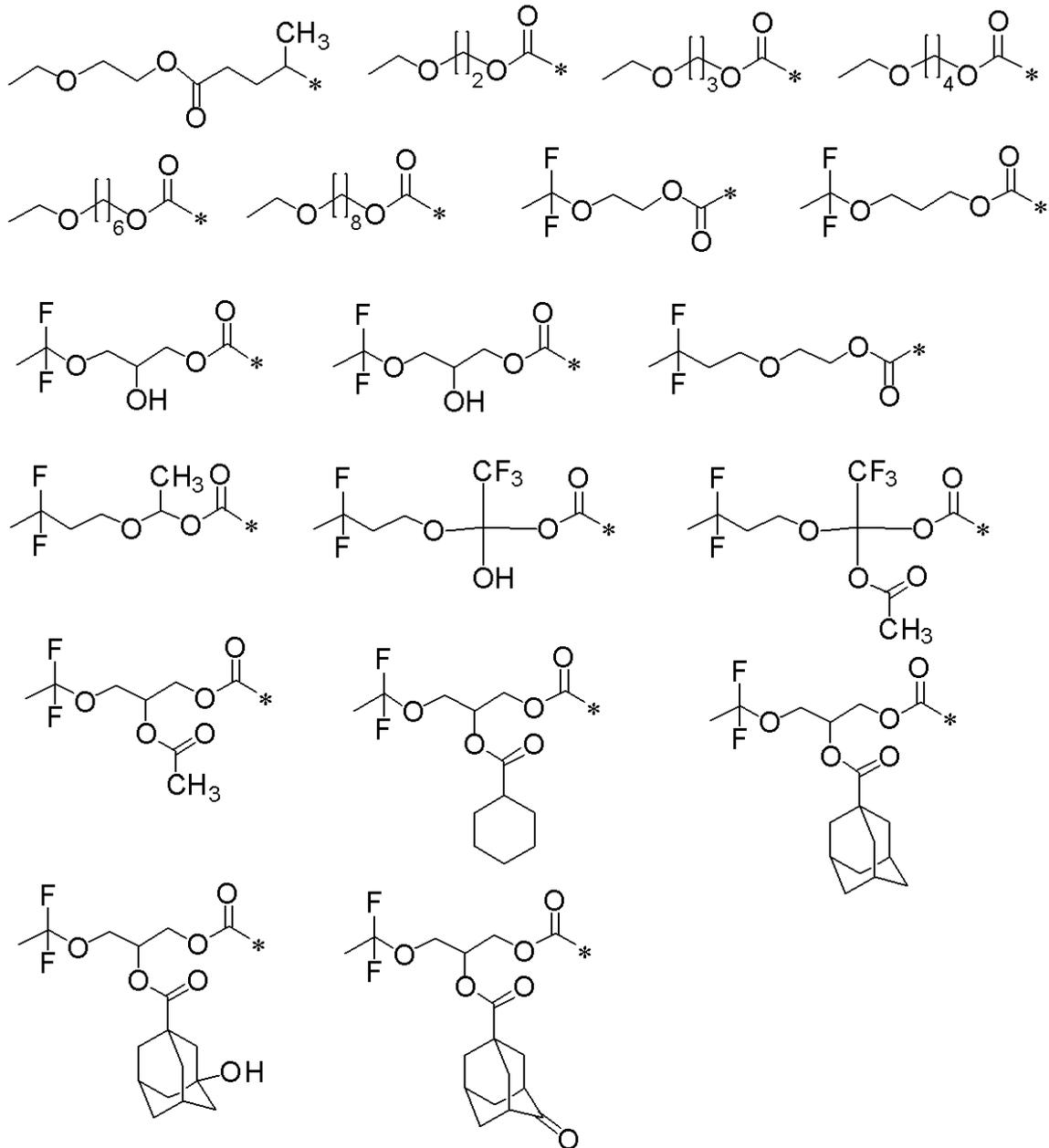
50

ものが挙げられる。



【 0 1 9 7 】

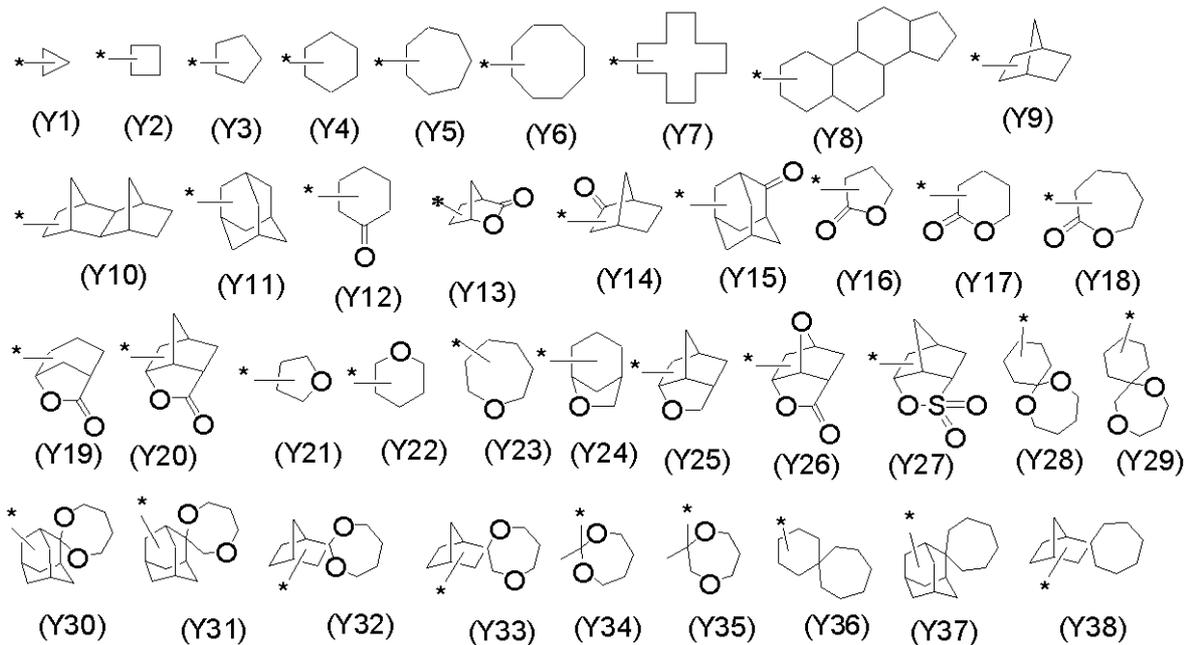
式 (b 1 - 3) で表される基のうち、式 (b 1 - 1 1) で表される基としては、以下のものが挙げられる。



【 0 1 9 8 】

Yで表される1価の脂環式炭化水素基としては、式(Y1)~式(Y11)で表される基が挙げられる。

Yで表される1価の脂環式炭化水素基に含まれる-CH₂-が-O-、-SO₂-又は-CO-で置き換わった基としては、式(Y12)~式(Y38)で表される基が挙げられる。



10

【 0 1 9 9 】

つまり、Yは、脂環式炭化水素基に含まれる水素原子2つがそれぞれ、酸素原子に置換され、その2つの酸素原子が炭素数1～8のアルカンジイル基と一緒にケタール環を形成してもよいし、異なる炭素原子にそれぞれ酸素原子が結合した構造を含んでもよい。ただし、式(Y28)～式(Y33)等のスピロ環を構成する場合には、2つの酸素間のアルカンジイル基は、1以上のフッ素原子を有することが好ましい。また、ケタール構造に含まれるアルカンジイル基のうち、酸素原子に隣接するメチレン基には、フッ素原子が置換されていないものが好ましい。

20

【 0 2 0 0 】

なかでも、好ましくは式(Y1)～式(Y20)、式(Y30)、式(Y31)のいずれかで表される基であり、より好ましくは式(Y11)、式(Y15)、式(Y16)、式(Y20)、式(Y30)又は式(Y31)で表される基であり、さらに好ましくは式(Y11)、式(Y15)又は式(Y30)で表される基である。

30

【 0 2 0 1 】

Yで表されるメチル基の置換基としては、ハロゲン原子、ヒドロキシ基、炭素数3～16の1価の脂環式炭化水素基、炭素数6～18の1価の芳香族炭化水素基、グリシジルオキシ基又は $-(CH_2)_{j_a}-O-CO-R^{b_1}$ 基(式中、 R^{b_1} は、炭素数1～16のアルキル基、炭素数3～16の1価の脂環式炭化水素基又は炭素数6～18の1価の芳香族炭化水素基を表す。j_aは、0～4の整数を表す)等が挙げられる。

Yで表される1価の脂環式炭化水素基の置換基としては、ハロゲン原子、ヒドロキシ基、炭素数1～12のアルキル基、ヒドロキシ基含有炭素数1～12のアルキル基、炭素数3～16の1価の脂環式炭化水素基、炭素数1～12のアルコキシ基、炭素数6～18の1価の芳香族炭化水素基、炭素数7～21のアラルキル基、炭素数2～4のアシル基、グリシジルオキシ基又は $-(CH_2)_{j_a}-O-CO-R^{b_1}$ 基(式中、 R^{b_1} は、炭素数1～16のアルキル基、炭素数3～16の1価の脂環式炭化水素基又は炭素数6～18の1価の芳香族炭化水素基を表す。j_aは、0～4の整数を表す)等が挙げられる。

40

【 0 2 0 2 】

ヒドロキシ基含有アルキル基としては、ヒドロキシメチル基、ヒドロキシエチル基等が挙げられる。

アルコキシ基としては、メトキシ基、エトキシ基、プロポキシ基、ブトキシ基、ペンチルオキシ基、ヘキシルオキシ基、ヘプチルオキシ基、オクチルオキシ基、デシルオキシ基及びドデシルオキシ基等が挙げられる。

1価の芳香族炭化水素基としては、フェニル基、ナフチル基、アントリル基、p-メチ

50

ルフェニル基、p-tert-ブチルフェニル基、p-アダマンチルフェニル基；トリル基、キシリル基、クメニル基、メシチル基、ピフェニル基、フェナントリル基、2,6-ジエチルフェニル基、2-メチル-6-エチルフェニル等のアリール基等が挙げられる。

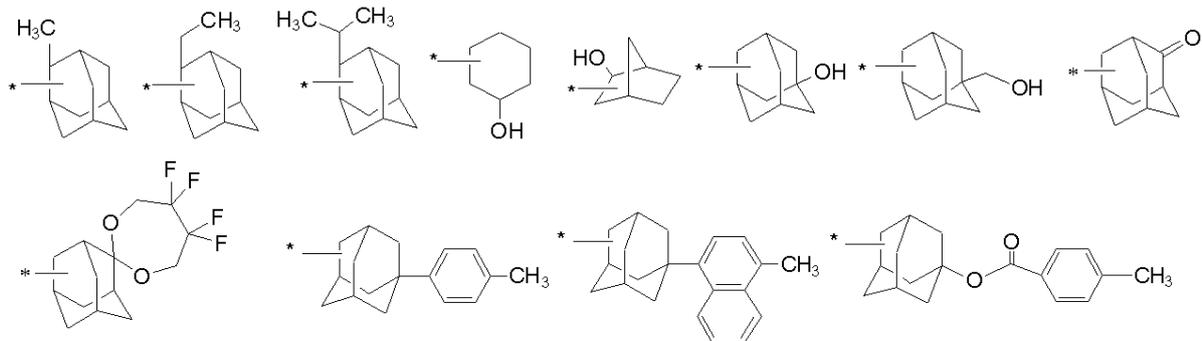
アラルキル基としては、ベンジル基、フェネチル基、フェニルプロピル基、ナフチルメチル基及びナフチルエチル基等が挙げられる。

アシル基としては、例えば、アセチル基、プロピオニル基及びブチリル基等が挙げられる。

ハロゲン原子としては、フッ素原子、塩素原子、臭素原子及びヨウ素原子等が挙げられる。

【0203】

Yとしては、以下のものが挙げられる。

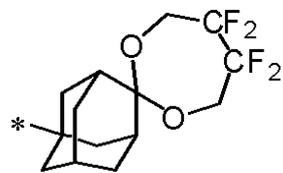


【0204】

なお、Yがメチル基であり、かつL^b1が炭素数1～17の2価の直鎖状又は分岐状飽和炭化水素基である場合、Yとの結合位置にある該2価の飽和炭化水素基の-CH₂-は、-O-又は-CO-に置き換わっていることが好ましい。

【0205】

Yは、好ましくは置換基を有していてもよい炭素数3～18の1価の脂環式炭化水素基であり、より好ましくは置換基を有していてもよいアダマンチル基であり、これらの基を構成するメチレン基は、酸素原子、スルホニル基又はカルボニル基に置き換わっていてもよい。Yは、さらに好ましくはアダマンチル基、ヒドロキシアダマンチル基、オキソアダマンチル基又は下記で表される基である。



【0206】

式(B1)で表される塩におけるスルホン酸アニオンとしては、式(B1-A-1)～式(B1-A-46)で表されるアニオン〔以下、式番号に応じて「アニオン(B1-A-1)」等という場合がある。〕が好ましく、式(B1-A-1)～式(B1-A-4)、式(B1-A-9)、式(B1-A-10)、式(B1-A-24)～式(B1-A-33)、式(B1-A-36)～式(B1-A-40)のいずれかで表されるアニオンがより好ましい。

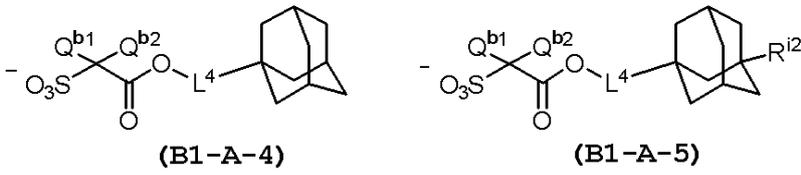
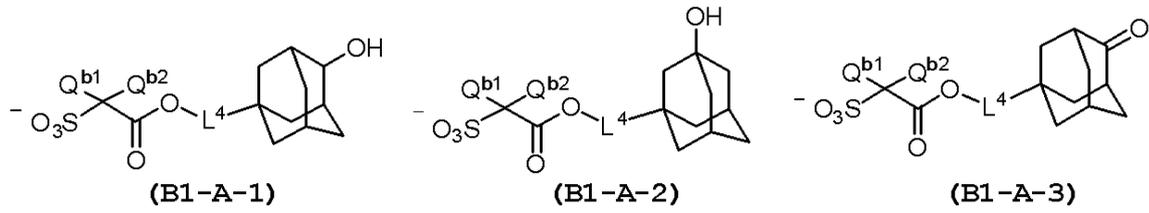
【0207】

10

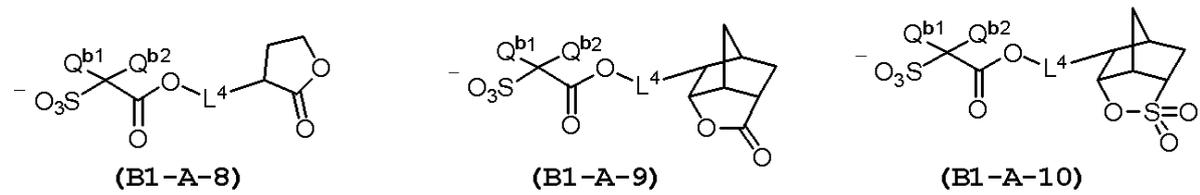
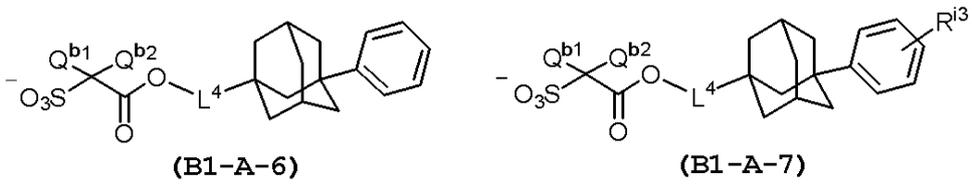
20

30

40

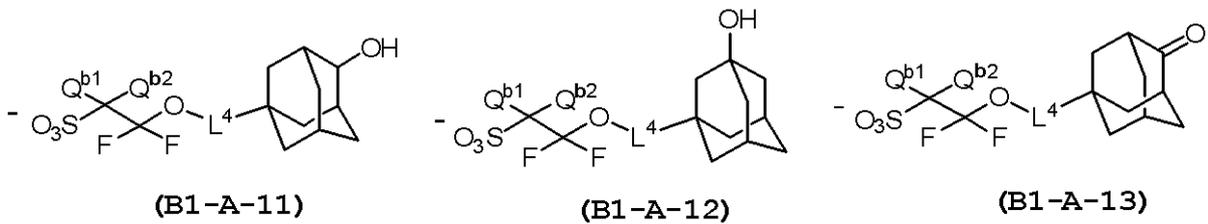


10

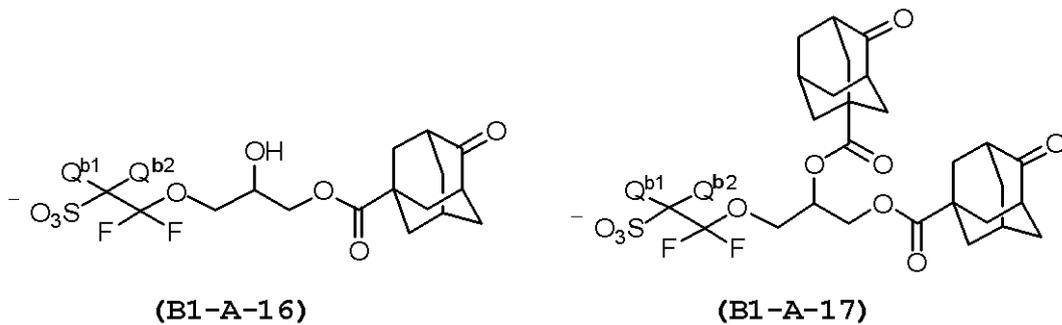
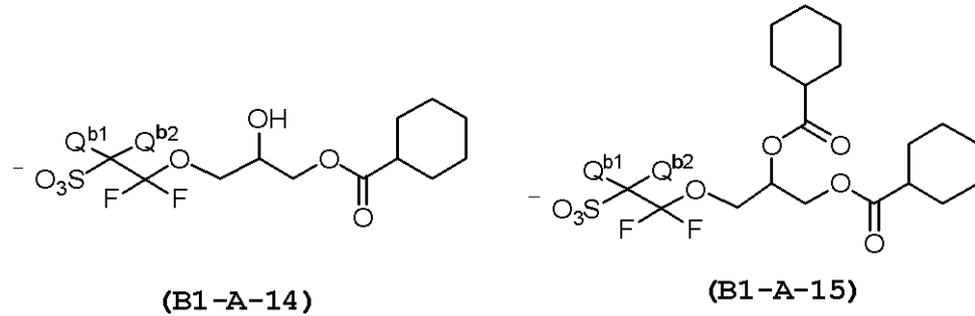


20

[0 2 0 8]

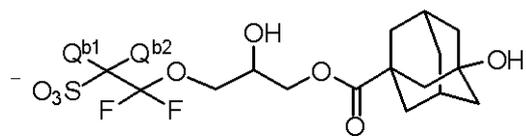


30

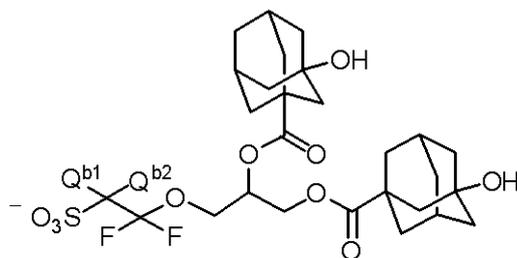


40

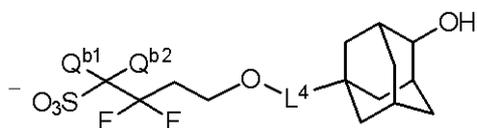
[0 2 0 9]



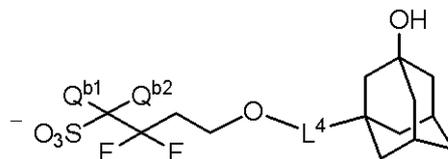
(B1-A-18)



(B1-A-19)

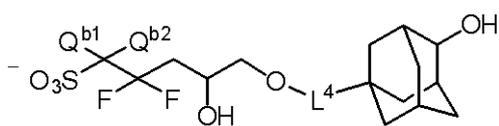


(B1-A-20)

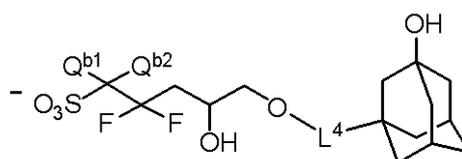


(B1-A-21)

10



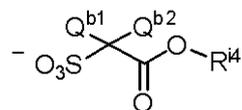
(B1-A-22)



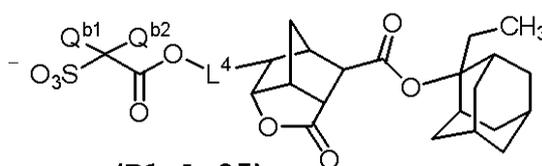
(B1-A-23)

20

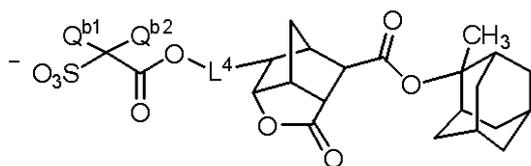
【 0 2 1 0 】



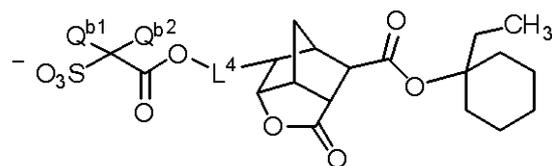
(B1-A-24)



(B1-A-25)

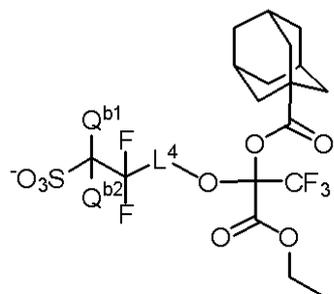


(B1-A-26)

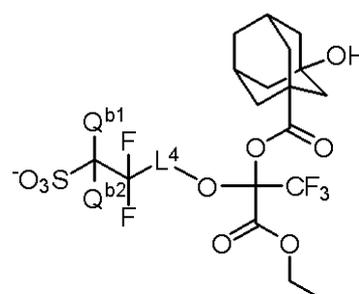


(B1-A-27)

30



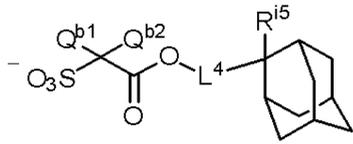
(B1-A-28)



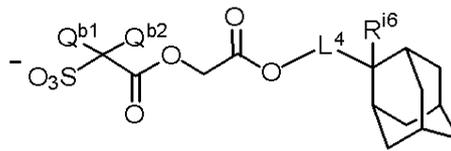
(B1-A-29)

40

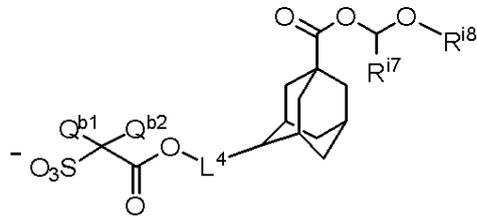
【 0 2 1 1 】



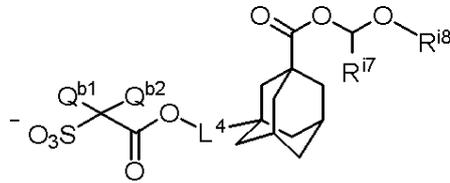
(B1-A-30)



(B1-A-31)

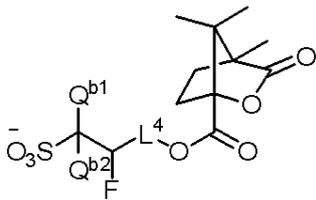


(B1-A-32)

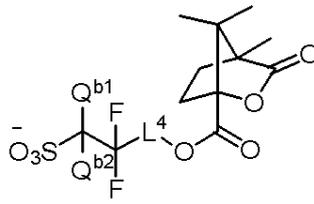


(B1-A-33)

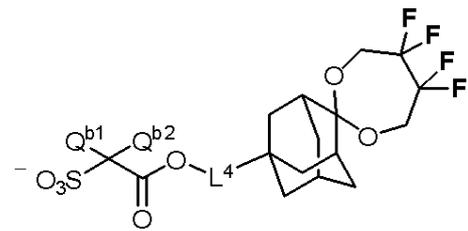
10



(B1-A-34)



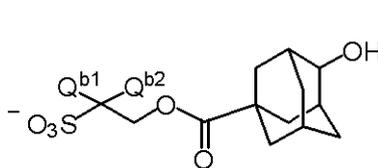
(B1-A-35)



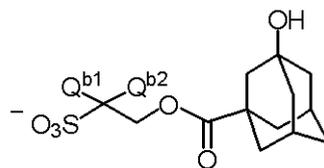
(B1-A-36)

20

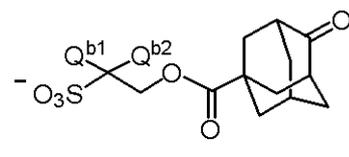
【 0 2 1 2 】



(I-A-37)

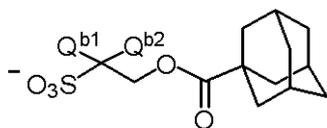


(I-A-38)

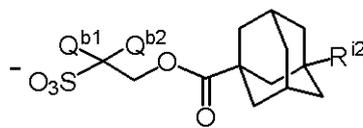


(I-A-39)

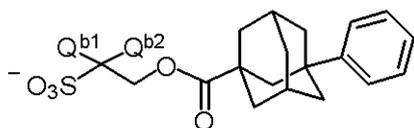
30



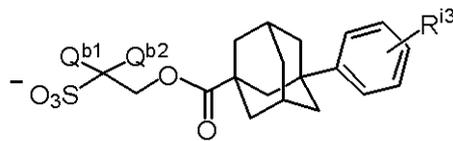
(I-A-40)



(I-A-41)

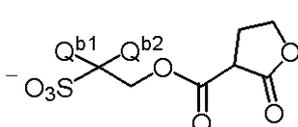


(I-A-42)

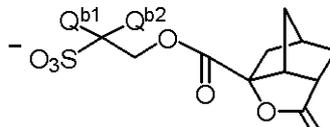


(I-A-43)

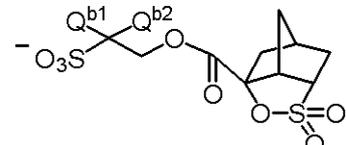
40



(I-A-44)



(I-A-45)



(I-A-46)

【 0 2 1 3 】

ここで $R^{i2} \sim R^{i7}$ は、例えば、炭素数 1 ~ 4 のアルキル基、好ましくはメチル基又はエチル基である。

50

R^{18} は、例えば、炭素数 1 ~ 12 の脂肪族炭化水素基、好ましくは炭素数 1 ~ 4 のアルキル基、炭素数 5 ~ 12 の 1 価の脂環式炭化水素基又はこれらを組合せることにより形成される基、より好ましくはメチル基、エチル基、シクロヘキシル基又はアダマンチル基である。

L^4 は、単結合又は炭素数 1 ~ 4 のアルカンジイル基である。

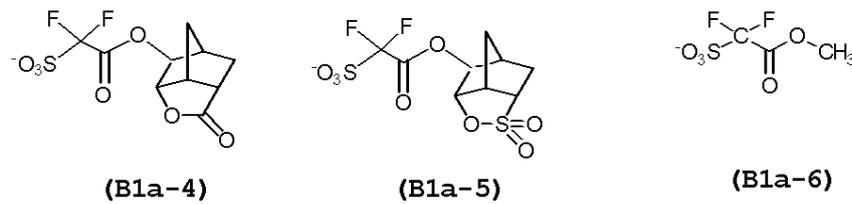
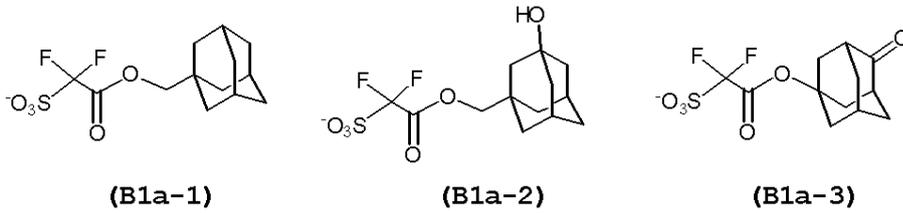
Q^{b1} 及び Q^{b2} は、上記と同じである。

式 (B1) で表される塩におけるスルホン酸アニオンとしては、具体的には、特開 2010-204646 号公報に記載されたアニオンが挙げられる。

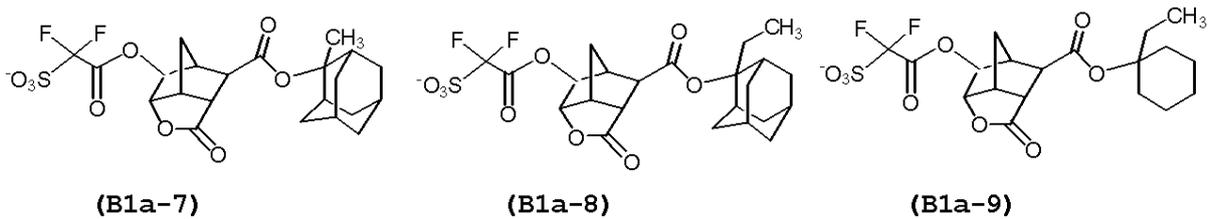
【0214】

好ましい式 (B1) で表される塩におけるスルホン酸アニオンとしては、式 (B1a-1) ~ 式 (B1a-22) でそれぞれ表されるアニオンが挙げられる。

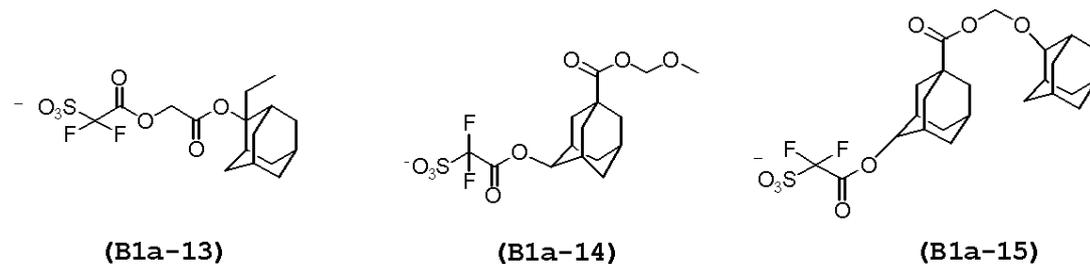
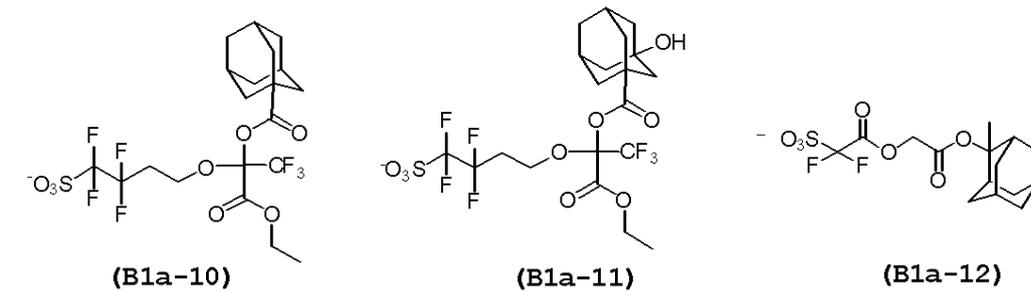
10



20

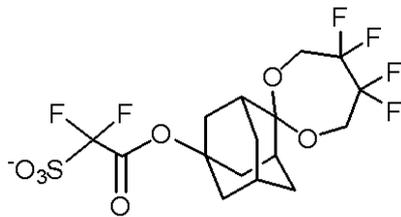


30

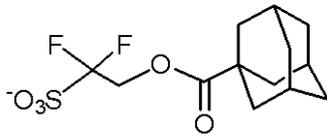


40

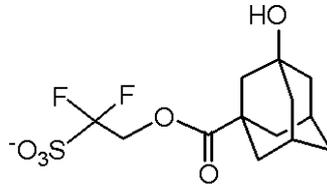
【0215】



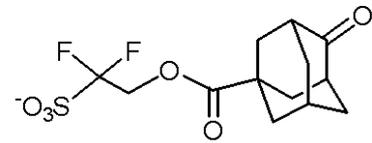
(B1a-16)



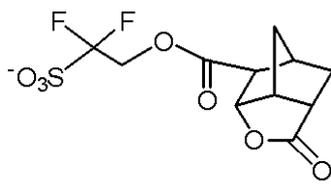
(B1a-17)



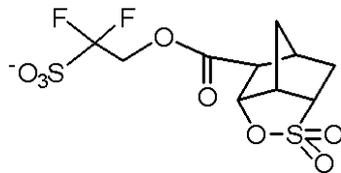
(B1a-18)



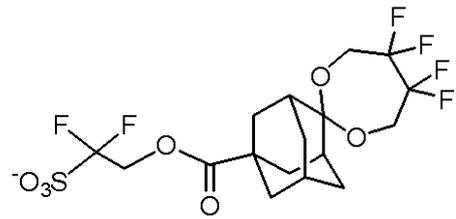
(B1a-19)



(B1a-20)



(B1a-21)



(B1a-22)

【0216】

なかでも、式(B1a-1)～式(B1a-3)及び式(B1a-7)～式(B1a-16)、式(B1a-18)、式(B1a-19)、式(B1a-22)のいずれかで表されるアニオンが好ましい。

【0217】

Z⁺の有機カチオンとしては、有機オニウムカチオン、例えば、有機スルホニウムカチオン、有機ヨードニウムカチオン、有機アンモニウムカチオン、ベンゾチアゾリウムカチオン、有機ホスホニウムカチオン等が挙げられ、好ましくは有機スルホニウムカチオン又は有機ヨードニウムカチオンが挙げられ、より好ましくはアリールスルホニウムカチオンが挙げられる。

式(B1)中のZ⁺は、好ましくは上述した塩(I)ノカチオンとして例示した式(b2-1)～式(b2-4)のいずれかで表されるカチオンである。

【0218】

酸発生剤(B1)は、上述のスルホン酸アニオン及び上述の有機カチオンの組合せであり、これらは任意に組合せることができる。酸発生剤(B1)としては、好ましくは式(B1a-1)～式(B1a-3)及び式(B1a-7)～式(B1a-16)のいずれかで表されるアニオンとカチオン(b2-1)又はカチオン(b2-3)との組合せが挙げられる。

【0219】

酸発生剤(B1)としては、好ましくは式(B1-1)～式(B1-32)でそれぞれ表されるものが挙げられる、中でもアリールスルホニウムカチオンを含む式(B1-1)、式(B1-2)、式(B1-3)、式(B1-5)、式(B1-6)、式(B1-7)、式(B1-11)、式(B1-12)、式(B1-13)、式(B1-14)、式(B1-17)、式(B1-20)、式(B1-21)、式(B1-23)、式(B1-24)、式(B1-25)、式(B1-26)、式(B1-29)、式(B1-31)又は式(B1-32)でそれぞれ表されるものがとりわけ好ましい。

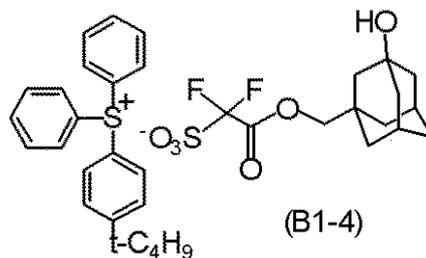
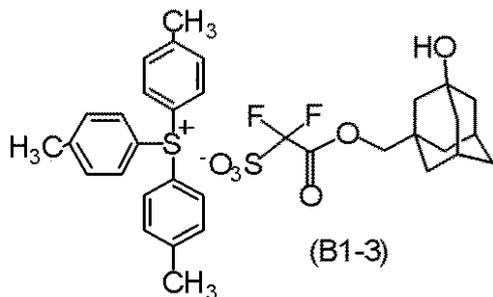
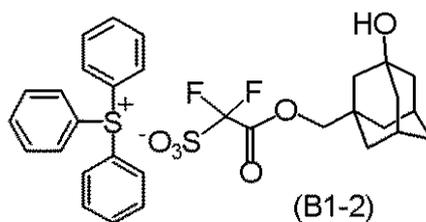
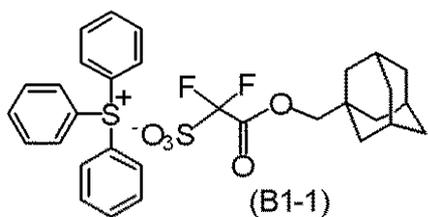
【0220】

10

20

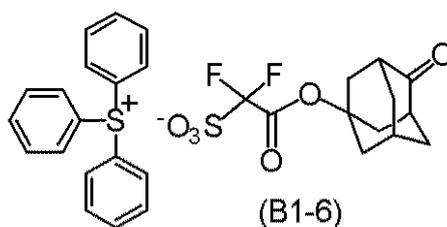
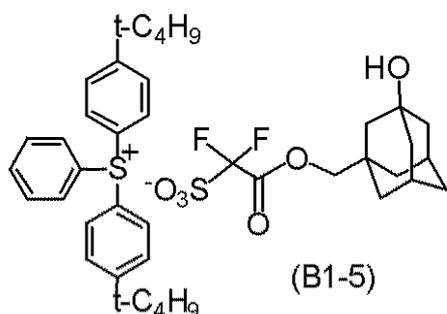
30

40

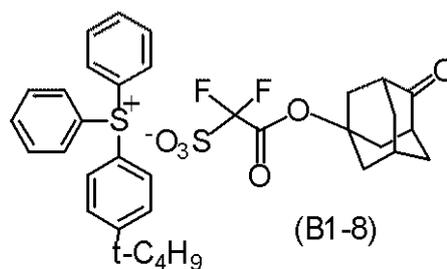
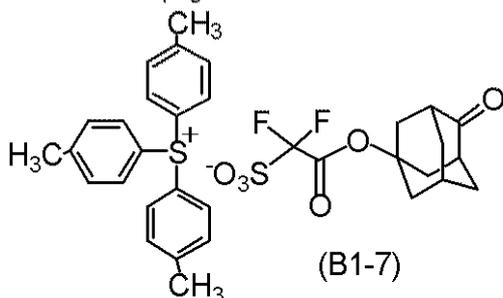


10

【 0 2 2 1 】

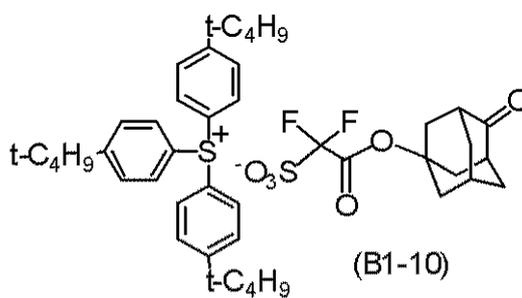
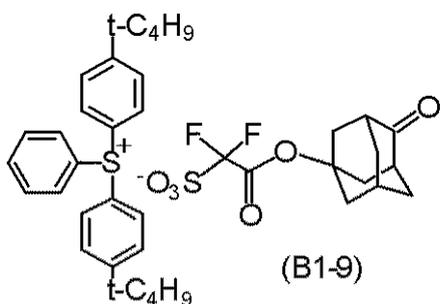


20

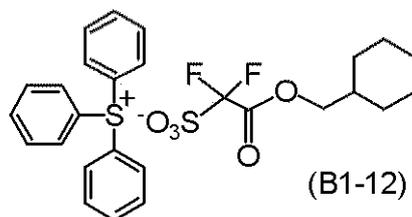
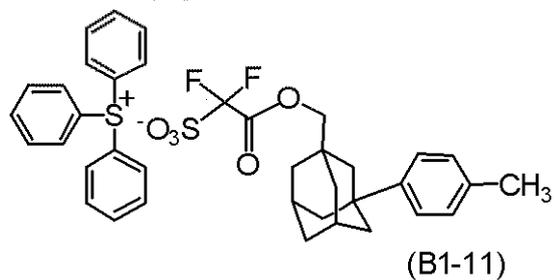


30

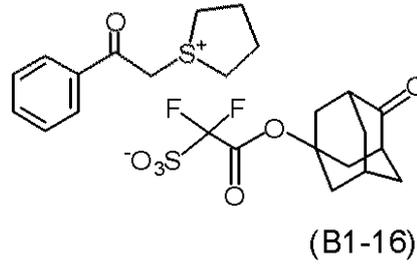
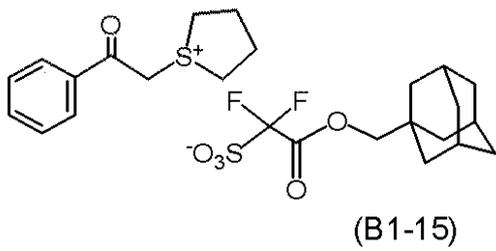
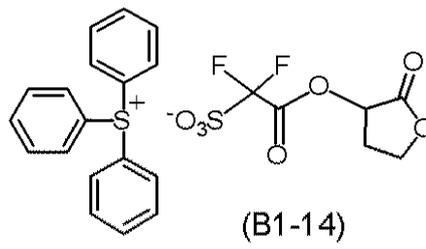
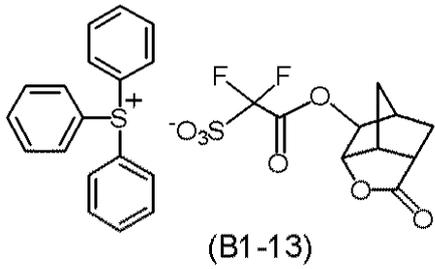
【 0 2 2 2 】



40

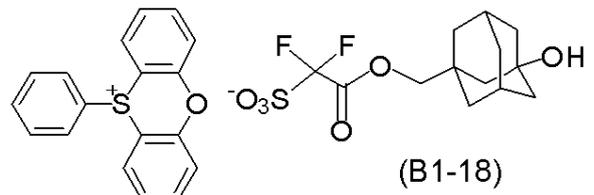
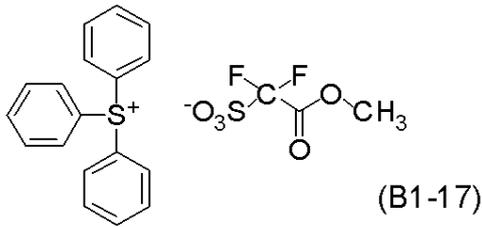


【 0 2 2 3 】

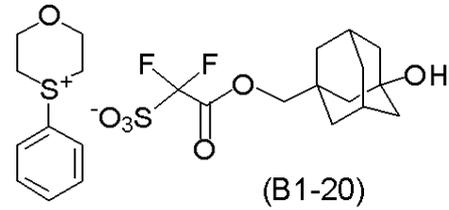
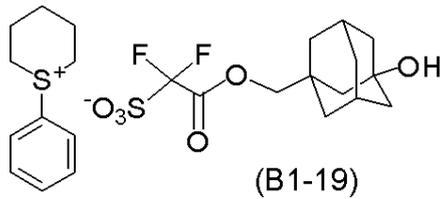


10

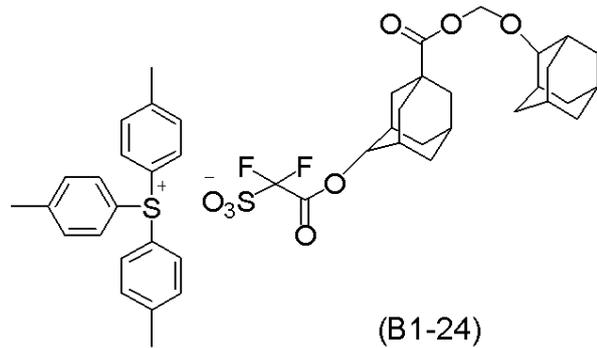
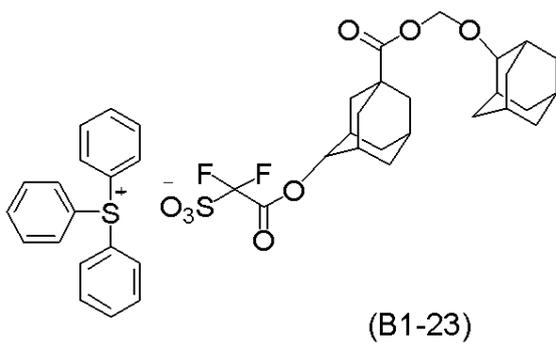
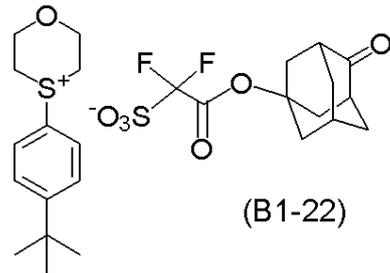
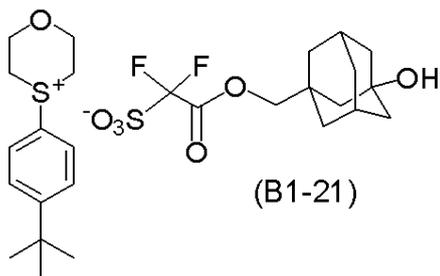
【 0 2 2 4 】



20

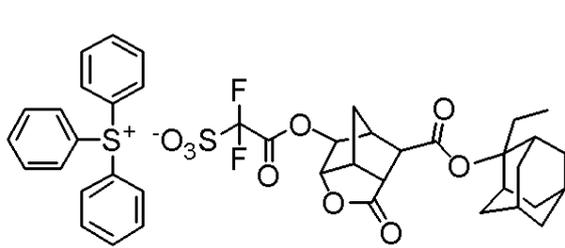


30

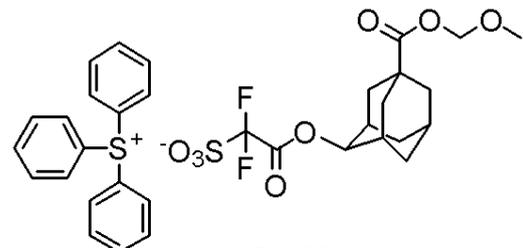


40

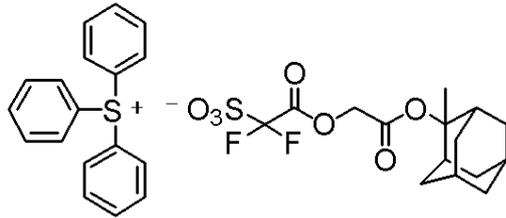
【 0 2 2 5 】



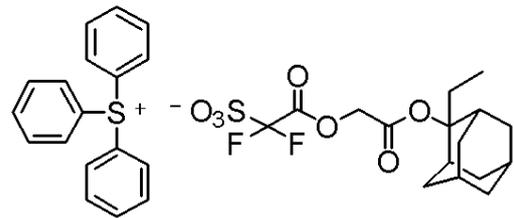
(B1-25)



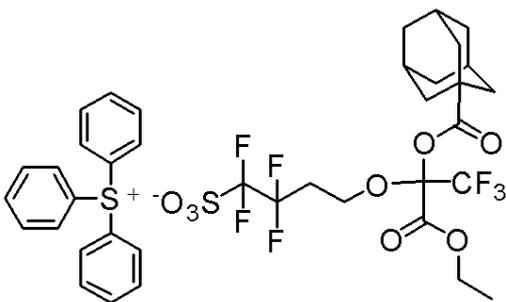
(B1-26)



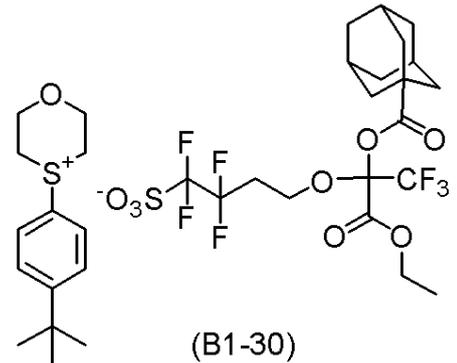
(B1-27)



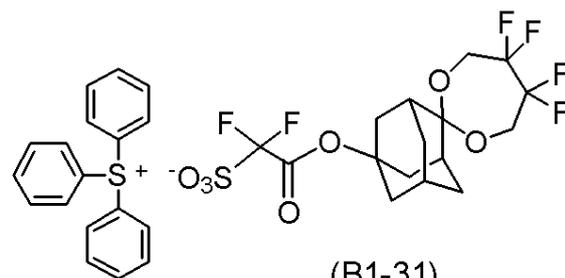
(B1-28)



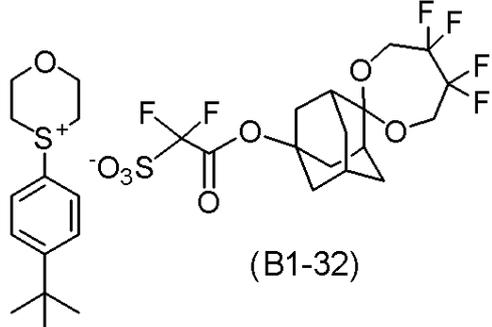
(B1-29)



(B1-30)



(B1-31)



(B1-32)

【0226】

酸発生剤（B）は、2種以上を含有してもよい。

酸発生剤（B）の含有量は、例えば、樹脂（A）に対して、1～30質量%であることが好ましく、3～25質量%であることがより好ましい。

レジスト組成物においては、塩（I）及び酸発生剤（B）を酸発生剤として用いる場合、塩（I）及び酸発生剤（B）の含有量は、例えば、樹脂（A）及び樹脂（AA）100質量部に対して、好ましくは1質量部以上（より好ましくは3質量部以上）、好ましくは40質量部以下（より好ましくは30質量部以下）である。

なお、これらの含有量は、レジスト組成物において、樹脂（A）が含まれていない場合には、酸不安定基を有する構造単位を含む樹脂に対して適用することができる。

【0227】

溶剤（E）

溶剤（E）の含有率は、通常レジスト組成物の全質量中90質量%以上、好ましくは92質量%以上、より好ましくは94質量%以上であり、通常99.9質量%以下、好ましくは99質量%以下である。溶剤（E）の含有率は、液体クロマトグラフィー又はガスクロマトグラフィー等の公知の分析手段で測定できる。

10

20

30

40

50

【0228】

溶剤（E）としては、エチルセロソルブアセテート、メチルセロソルブアセテート及びプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテート等のグリコールエーテルエステル類；プロピレングリコールモノメチルエーテル等のグリコールエーテル類；乳酸エチル、酢酸ブチル、酢酸アミル及びピルビン酸エチル等のエステル類；アセトン、メチルイソブチルケトン、2-ヘプタノン及びシクロヘキサノン等のケトン類； γ -ブチロラクトン等の環状エステル類；等が挙げられる。溶剤（E）は、1種を単独で含有してもよく、2種以上を含有してもよい。

【0229】

<クエンチャー（C）>

クエンチャー（C）は、塩基性の含窒素有機化合物又は酸発生剤（B）から発生する酸よりも酸性度の弱い酸を発生する塩等が挙げられる。

塩基性の含窒素有機化合物としては、アミン及びアンモニウム塩が挙げられる。アミンとしては、脂肪族アミン及び芳香族アミンが挙げられる。脂肪族アミンとしては、第一級アミン、第二級アミン及び第三級アミンが挙げられる。

【0230】

アミンとしては、1-ナフチルアミン、2-ナフチルアミン、アニリン、ジイソプロピルアニリン、2-, 3-又は4-メチルアニリン、4-ニトロアニリン、N-メチルアニリン、N,N-ジメチルアニリン、ジフェニルアミン、ヘキシルアミン、ヘプチルアミン、オクチルアミン、ノニルアミン、デシルアミン、ジブチルアミン、ジペンチルアミン、ジヘキシルアミン、ジヘプチルアミン、ジオクチルアミン、ジノニルアミン、ジデシルアミン、トリエチルアミン、トリメチルアミン、トリプロピルアミン、トリブチルアミン、トリペンチルアミン、トリヘキシルアミン、トリヘプチルアミン、トリオクチルアミン、トリノニルアミン、トリデシルアミン、メチルジブチルアミン、メチルジペンチルアミン、メチルジヘキシルアミン、メチルジシクロヘキシルアミン、メチルジヘプチルアミン、メチルジオクチルアミン、メチルジノニルアミン、メチルジデシルアミン、エチルジブチルアミン、エチルジペンチルアミン、エチルジヘキシルアミン、エチルジヘプチルアミン、エチルジオクチルアミン、エチルジノニルアミン、エチルジデシルアミン、ジシクロヘキシルメチルアミン、トリス〔2-(2-メトキシエトキシ)エチル〕アミン、トリエソプロパノールアミン、エチレンジアミン、テトラメチレンジアミン、ヘキサメチレンジアミン、4,4'-ジアミノ-1,2-ジフェニルエタン、4,4'-ジアミノ-3,3'-ジメチルジフェニルメタン、4,4'-ジアミノ-3,3'-ジエチルジフェニルメタン、ピペラジン、モルホリン、ピペリジン及び特開平11-52575号公報に記載されているピペリジン骨格を有するヒンダードアミン化合物、イミダゾール、4-メチルイミダゾール、ピリジン、4-メチルピリジン、1,2-ジ(2-ピリジル)エタン、1,2-ジ(4-ピリジル)エタン、1,2-ジ(2-ピリジル)エテン、1,2-ジ(4-ピリジル)エテン、1,3-ジ(4-ピリジル)プロパン、1,2-ジ(4-ピリジロキシ)エタン、ジ(2-ピリジル)ケトン、4,4'-ジピリジルスルフィド、4,4'-ジピリジルジスルフィド、2,2'-ジピリジルアミン、2,2'-ジピコリルアミン、ピピリジン等が挙げられ、好ましくはジイソプロピルアニリンが挙げられ、特に好ましくは2,6-ジイソプロピルアニリンが挙げられる。

【0231】

アンモニウム塩としては、テトラメチルアンモニウムヒドロキシド、テトライソプロピルアンモニウムヒドロキシド、テトラブチルアンモニウムヒドロキシド、テトラヘキシルアンモニウムヒドロキシド、テトラオクチルアンモニウムヒドロキシド、フェニルトリメチルアンモニウムヒドロキシド、3-(トリフルオロメチル)フェニルトリメチルアンモニウムヒドロキシド、テトラ-n-ブチルアンモニウムサリチラート及びコリン等が挙げられる。

【0232】

酸発生剤（B）から発生する酸よりも酸性度の弱い酸を発生する塩としては、下記式で

10

20

30

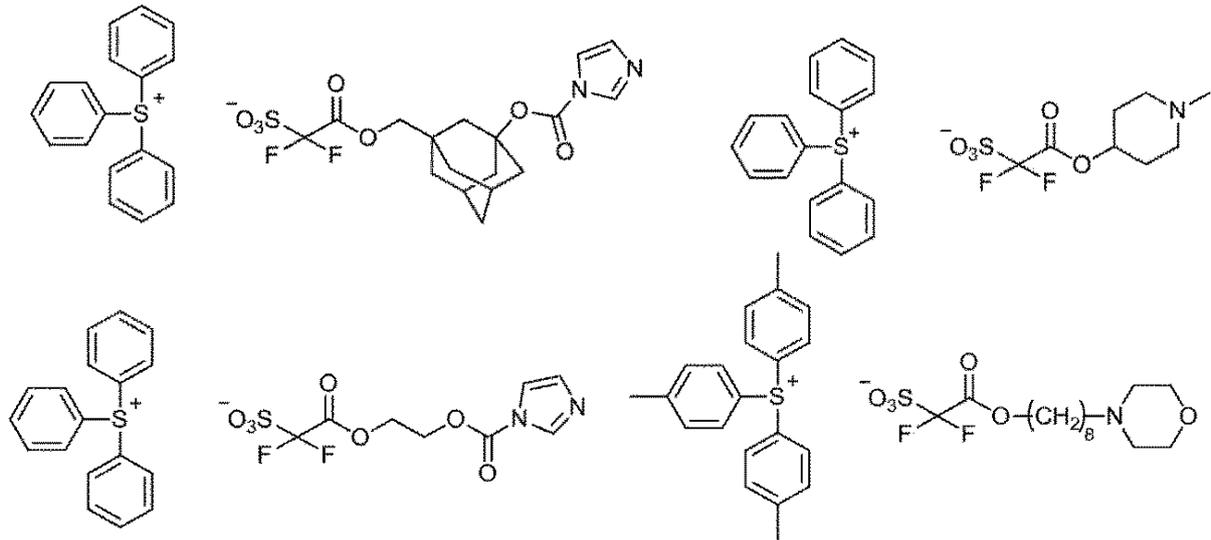
40

50

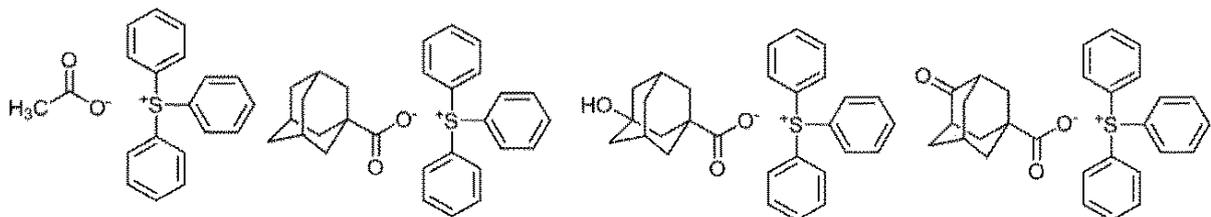
表される塩、式(D)で表される弱酸分子内塩、並びに特開2012-229206号公報、特開2012-6908号公報、特開2012-72109号公報、特開2011-39502号公報及び特開2011-191745号公報記載の塩が挙げられる。好ましくは、式(D)で表される弱酸分子内塩(以下、「弱酸分子内塩(D)」と記す場合がある)である。

酸発生剤(B)から発生する酸よりも酸性度の弱い酸を発生する塩における酸性度は、酸解離定数(pKa)で示される。塩(I)及び酸発生剤(B)から発生する酸よりも酸性度の弱い酸を発生する塩は、該塩から発生する酸の酸解離定数が、通常 $-3 < pKa$ の塩であり、好ましくは $-1 < pKa < 7$ の塩であり、より好ましくは $0 < pKa < 5$ の塩である。

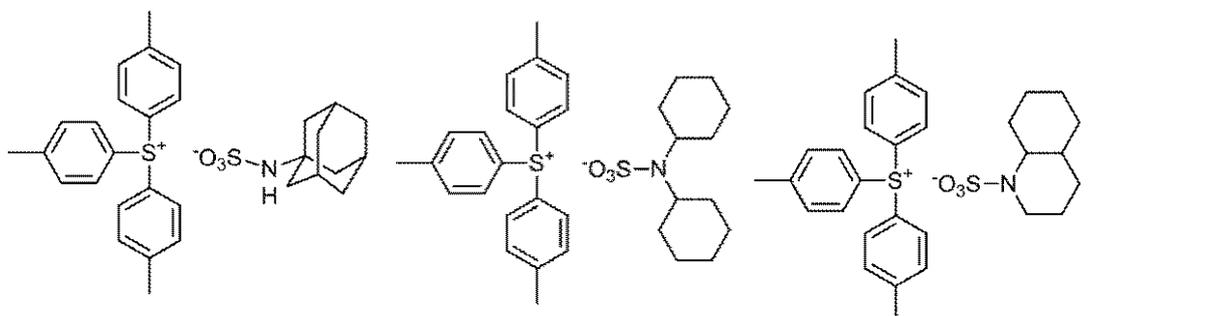
【0233】



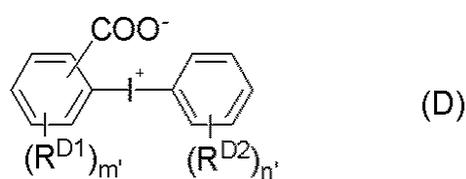
【0234】



【0235】



【0236】



[式(D)中、

10

20

30

40

50

R^{D1} 及び R^{D2} は、互いに独立に、炭素数 1 ~ 12 の 1 価の炭化水素基、炭素数 1 ~ 6 のアルコキシ基、炭素数 2 ~ 7 のアシル基、炭素数 2 ~ 7 のアシルオキシ基、炭素数 2 ~ 7 のアルコキシカルボニル基、ニトロ基又はハロゲン原子を表す。

m' 及び n' は、互いに独立に、0 ~ 4 の整数を表し、 m' が 2 以上の場合、複数の R^{D1} は同一であっても異なってもよく、 n' が 2 以上の場合、複数の R^{D2} は同一であっても異なってもよい。]

【0237】

弱酸分子内塩 (D) においては、 R^{D1} 及び R^{D2} の炭化水素基としては、1 価の脂肪族炭化水素基、1 価の脂環式炭化水素基、1 価の芳香族炭化水素基及びこれらの組合せることにより形成される基等が挙げられる。

1 価の脂肪族炭化水素基としては、メチル基、エチル基、プロピル基、イソプロピル基、ブチル基、イソブチル基、tert-ブチル基、ペンチル基、ヘキシル基、ノニル基等のアルキル基が挙げられる。

1 価の脂環式炭化水素基は、単環式及び多環式のいずれでもよく、飽和及び不飽和のいずれでもよい。例えば、シクロプロピル基、シクロブチル基、シクロペンチル基、シクロヘキシル基、シクロノニル基、シクロドデシル基等のシクロアルキル基、ノルボニル基、アダマンチル基等が挙げられる。

1 価の芳香族炭化水素基としては、フェニル基、1-ナフチル基、2-ナフチル基、2-メチルフェニル基、3-メチルフェニル基、4-メチルフェニル基、4-エチルフェニル基、4-プロピルフェニル基、4-イソプロピルフェニル基、4-ブチルフェニル基、4-tert-ブチルフェニル基、4-ヘキシルフェニル基、4-シクロヘキシルフェニル基、アントリル基、p-アダマンチルフェニル基、トリル基、キシリル基、クメニル基、メシチル基、ピフェニル基、フェナントリル基、2,6-ジエチルフェニル基、2-メチル-6-エチルフェニル等のアリール基等が挙げられる。

これらを組合せることにより形成される基としては、アルキル-シクロアルキル基、シクロアルキル-アルキル基、アラルキル基 (例えば、フェニルメチル基、1-フェニルエチル基、2-フェニルエチル基、1-フェニル-1-プロピル基、1-フェニル-2-プロピル基、2-フェニル-2-プロピル基、3-フェニル-1-プロピル基、4-フェニル-1-ブチル基、5-フェニル-1-ペンチル基、6-フェニル-1-ヘキシル基等) 等が挙げられる。

【0238】

アルコキシ基としては、メトキシ基、エトキシ基等が挙げられる。

アシル基としては、アセチル基、プロパノイル基、ベンゾイル基、シクロヘキサンカルボニル基等が挙げられる。

アシルオキシ基としては、上記アシル基にオキシ基 (-O-) が結合した基等が挙げられる。

アルコキシカルボニル基としては、上記アルコキシ基にカルボニル基 (-CO-) が結合した基等が挙げられる。

ハロゲン原子としては、フッ素原子、塩素原子、臭素原子等が挙げられる。

【0239】

式 (D) においては、 R^{D1} 及び R^{D2} は、互いに独立に、炭素数 1 ~ 8 のアルキル基、炭素数 3 ~ 10 のシクロアルキル基、炭素数 1 ~ 6 のアルコキシ基、炭素数 2 ~ 4 のアシル基、炭素数 2 ~ 4 のアシルオキシ基、炭素数 2 ~ 4 のアルコキシカルボニル基、ニトロ基又はハロゲン原子が好ましい。

m' 及び n' は、互いに独立に、0 ~ 2 の整数が好ましく、0 がより好ましい。 m' が 2 以上の場合、複数の R^{D1} は同一であっても異なってもよく、 n' が 2 以上の場合、複数の R^{D2} は同一であっても異なってもよい。

【0240】

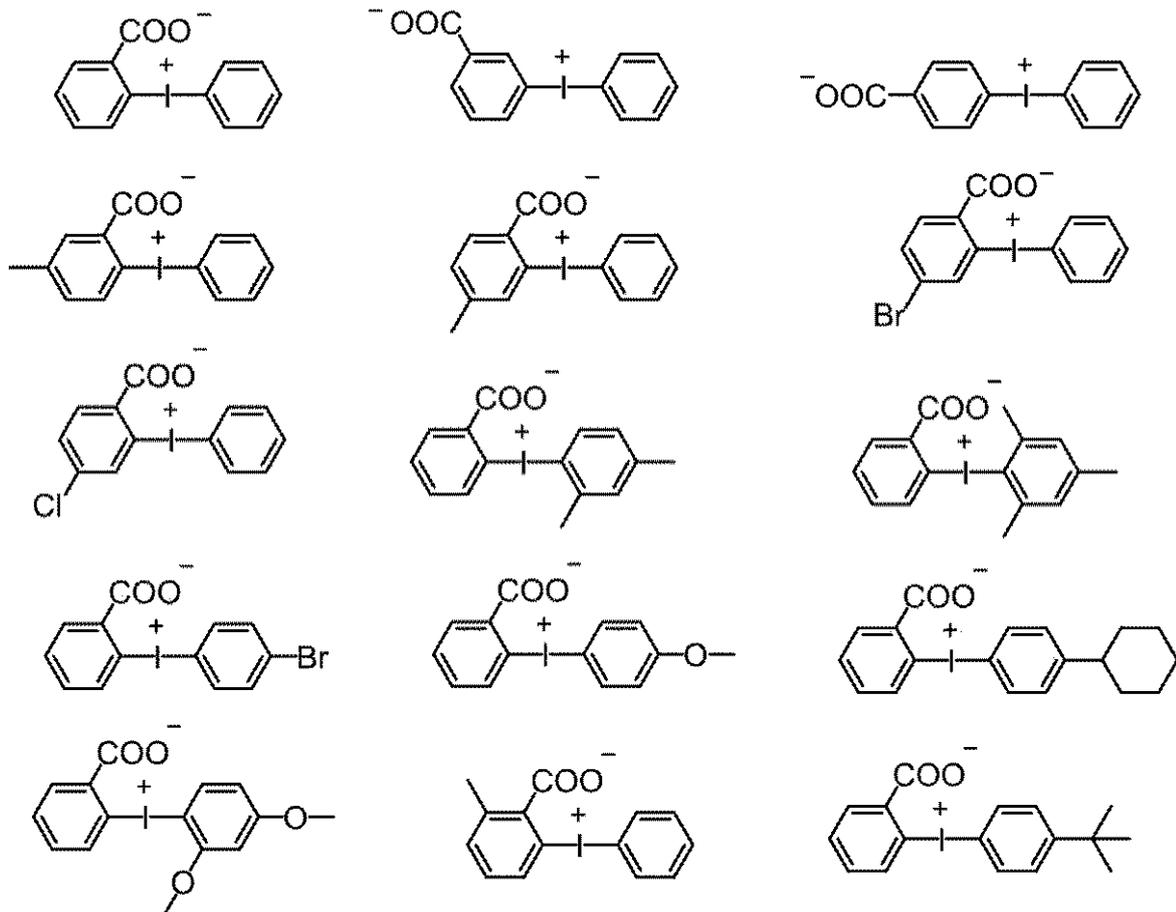
弱酸分子内塩 (D) としては、以下の化合物が挙げられる。

10

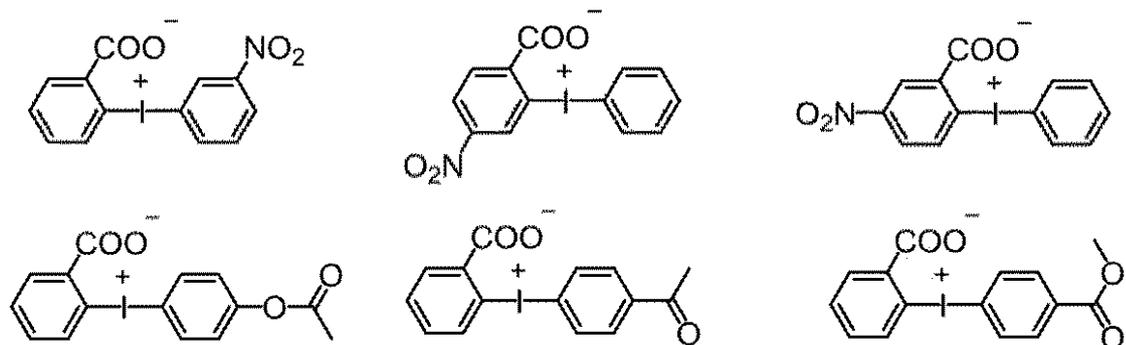
20

30

40



【 0 2 4 1 】



【 0 2 4 2 】

弱酸分子内塩 (D) は、「Tetrahedron Vol. 45, No. 19, p6281-6296」に記載の方法で製造することができる。また、弱酸分子内塩 (D) は、市販されている化合物を用いることができる。

【 0 2 4 3 】

クエンチャー (C) の含有率は、レジスト組成物の固形分中、好ましくは 0.01 ~ 5 質量% であり、より好ましくは 0.01 ~ 4 質量% であり、特に好ましくは 0.01 ~ 3 質量% である。

【 0 2 4 4 】

< その他の成分 >

レジスト組成物は、必要に応じて、上述の成分以外の成分 (以下「その他の成分 (F)」) という場合がある。) を含有していてもよい。その他の成分 (F) は、レジスト分野で公知の添加剤、例えば、増感剤、溶解抑止剤、界面活性剤、安定剤、染料等を利用できる。

【 0 2 4 5 】

10

20

30

40

50

レジスト組成物の調製

レジスト組成物は、樹脂及び酸発生剤、必要に応じて、その他の樹脂、酸発生剤（B）、溶剤（E）、クエンチャー（C）及びその他の成分（F）を混合することにより調製することができる。

混合順は任意であり、特に限定されるものではない。混合する際の温度は、10～40から、樹脂等の種類や樹脂等の溶剤（E）に対する溶解度等に応じて適切な温度を選ぶことができる。混合時間は、混合温度に応じて、0.5～24時間の中から適切な時間を選ぶことができる。なお、混合手段も特に制限はなく、攪拌混合等を用いることができる。

各成分を混合した後は、孔径0.003～0.2μm程度のフィルターを用いてろ過することができる。 10

【0246】

<レジストパターンの製造方法>

本発明のレジストパターンの製造方法は、

- (1) 本発明のレジスト組成物を基板上に塗布する工程、
- (2) 塗布後の組成物を乾燥させて組成物層を形成する工程、
- (3) 組成物層に露光する工程、
- (4) 露光後の組成物層を加熱する工程、及び
- (5) 加熱後の組成物層を現像する工程を含む。

【0247】

レジスト組成物を基板上に塗布するには、スピンコーター等、通常、用いられる装置によって行うことができる。基板としては、シリコンウェハ等の無機基板が挙げられる。レジスト組成物を塗布する前に、基板を洗浄してもよいし、基板上に反射防止膜等を形成してもよい。 20

【0248】

塗布後の組成物を乾燥することにより、溶剤を除去し、組成物層を形成する。乾燥は、例えば、ホットプレート等の加熱装置を用いて溶剤を蒸発させること（いわゆるプリベーク）により行うか、あるいは減圧装置を用いて行う。加熱温度は50～200であることが好ましく、加熱時間は10～180秒間であることが好ましい。また、減圧乾燥する際の圧力は、1～1.0×10⁵Pa程度であることが好ましい。 30

【0249】

得られた組成物層に、通常、露光機を用いて露光する。露光機は、液浸露光機であってもよい。露光光源としては、KrFエキシマレーザ（波長248nm）、ArFエキシマレーザ（波長193nm）、F₂エキシマレーザ（波長157nm）のような紫外域のレーザ光を放射するもの、固体レーザ光源（YAG又は半導体レーザ等）からのレーザ光を波長変換して遠紫外域または真空紫外域の高調波レーザ光を放射するもの、電子線や、超紫外光（EUV）を照射するもの等、種々のものを用いることができる。尚、本明細書において、これらの放射線を照射することを総称して「露光」という場合がある。露光の際、通常、求められるパターンに相当するマスクを介して露光が行われる。露光光源が電子線の場合は、マスクを用いずに直接描画により露光してもよい。 40

【0250】

露光後の組成物層を、酸不安定基における脱保護反応を促進するために加熱処理（いわゆるポストエキスポジャーベーク）を行う。加熱温度は、通常50～200程度であり、好ましくは70～150程度である。

【0251】

加熱後の組成物層を、通常、現像装置を用いて、現像液を利用して現像する。現像方法としては、ディップ法、パドル法、スプレー法、ダイナミックディスペンス法等が挙げられる。現像温度は5～60であることが好ましく、現像時間は5～300秒間であることが好ましい。現像液の種類を以下のとおりに選択することにより、ポジ型レジストパターン又はネガ型レジストパターンを製造できる。 50

【 0 2 5 2 】

レジスト組成物からポジ型レジストパターンを製造する場合は、現像液としてアルカリ現像液を用いる。アルカリ現像液は、この分野で用いられる各種のアルカリ性水溶液であればよい。テトラメチルアンモニウムヒドロキシドや(2-ヒドロキシエチル)トリメチルアンモニウムヒドロキシド(通称コリン)の水溶液等が挙げられる。アルカリ現像液には、界面活性剤が含まれていてもよい。

現像後レジストパターンを超純水で洗浄し、次いで、基板及びパターン上に残った水を除去することが好ましい。

【 0 2 5 3 】

レジスト組成物からネガ型レジストパターンを製造する場合は、現像液として有機溶剤を含む現像液(以下「有機系現像液」という場合がある)を用いる。 10

有機系現像液に含まれる有機溶剤としては、2-ヘキサノン、2-ヘプタノン等のケトン溶剤；プロピレングリコールモノメチルエーテルアセテート等のグリコールエーテルエステル溶剤；酢酸ブチル等のエステル溶剤；プロピレングリコールモノメチルエーテル等のグリコールエーテル溶剤；N,N-ジメチルアセトアミド等のアミド溶剤；アニソール等の芳香族炭化水素溶剤等が挙げられる。

有機系現像液中、有機溶剤の含有率は、90質量%以上100質量%以下であることが好ましく、95質量%以上100質量%以下であることがより好ましく、実質的に有機溶剤のみであることがさらに好ましい。

有機系現像液としては、酢酸ブチル及びノ又は2-ヘプタノンを含む現像液が好ましい。 20
有機系現像液中、酢酸ブチル及び2-ヘプタノンの合計含有率は、50質量%以上100質量%以下であることが好ましく、90質量%以上100質量%以下であることがより好ましく、実質的に酢酸ブチル及びノ又は2-ヘプタノンのみであることがさらに好ましい。

有機系現像液には、界面活性剤が含まれていてもよい。また、有機系現像液には、微量の水分が含まれていてもよい。

現像の際、有機系現像液とは異なる種類の溶剤に置換することにより、現像を停止してもよい。

【 0 2 5 4 】

現像後のレジストパターンをリンス液で洗浄することが好ましい。リンス液としては、 30
レジストパターンを溶解しないものであれば特に制限はなく、一般的な有機溶剤を含む溶液を使用することができ、好ましくはアルコール溶剤又はエステル溶剤である。

洗浄後は、基板及びパターン上に残ったリンス液を除去することが好ましい。

【 0 2 5 5 】

<用途>

本発明のレジスト組成物は、KrFエキシマレーザ露光用のレジスト組成物、ArFエキシマレーザ露光用のレジスト組成物、電子線(EB)露光用のレジスト組成物又はEUV露光用のレジスト組成物、特にArFエキシマレーザ露光用のレジスト組成物として好適であり、半導体の微細加工に有用である。

【実施例】

【 0 2 5 6 】

実施例を挙げて、さらに具体的に説明する。例中、含有量ないし使用量を表す「%」及び「部」は、特記しないかぎり質量基準である。

重量平均分子量は、ゲルパーミエーションクロマトグラフィーで下記条件により求めた値である。

装置：HLC-8120GPC型(東ソー社製)

カラム：TSKgel Multipore H_{XL}-M x 3 + guardcolumn(東ソー社製)

溶離液：テトラヒドロフラン

流量：1.0 mL/min

検出器：RI検出器

10

20

30

40

50

カラム温度：40

注入量：100 μ L

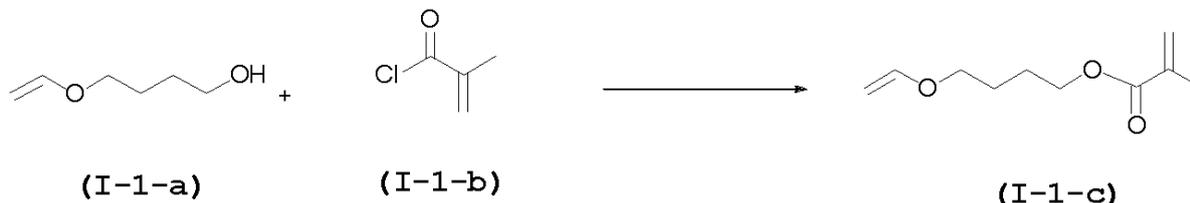
分子量標準：標準ポリスチレン（東ソー社製）

【0257】

また、化合物の構造は、質量分析（LCはAgilent製1100型、MASSはAgilent製LC/MSD型）を用い、分子ピークを測定することで確認した。以下の実施例ではこの分子ピークの値を「MASS」で示す。

【0258】

実施例1：式(I-1)で表される塩の合成

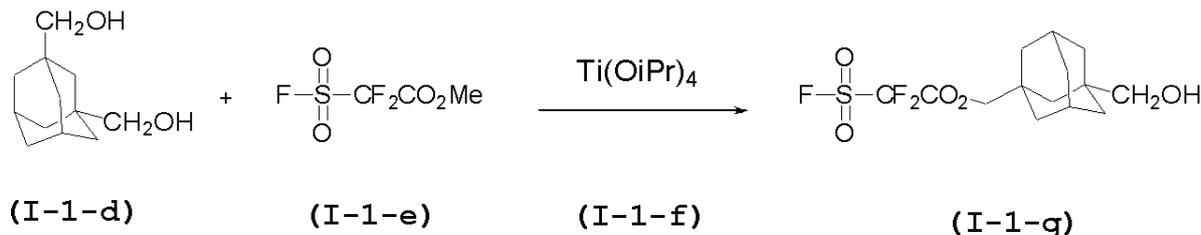


10

式(I-1-a)で表される化合物5.00部、テトラヒドロフラン10部及びトリエチルアミン4.79部を添加し、その後、23℃で30分間攪拌し、0℃に冷却した。得られた混合物に、0℃で、式(I-1-b)で表される化合物4.50部を30分かけて滴下し、さらに0℃で1時間攪拌した。得られた反応物に酢酸エチル150部、イオン交換水50部及び飽和塩化アンモニウム水溶液50部を加え、23℃で30分間攪拌し、静置、分液した。回収された有機層に、イオン交換水100部を加え、23℃で30分間攪拌し、静置、分液することにより有機層を水洗した。この水洗操作を5回繰り返した。回収された有機層を濃縮し、濃縮マスをカラム（関東化学 シリカゲル60N（球状、中性）100-210 μ m 展開溶媒：n-ヘプタン/酢酸エチル=10/1）分取することにより、式(I-1-c)で表される化合物3.30部を得た。

20

【0259】

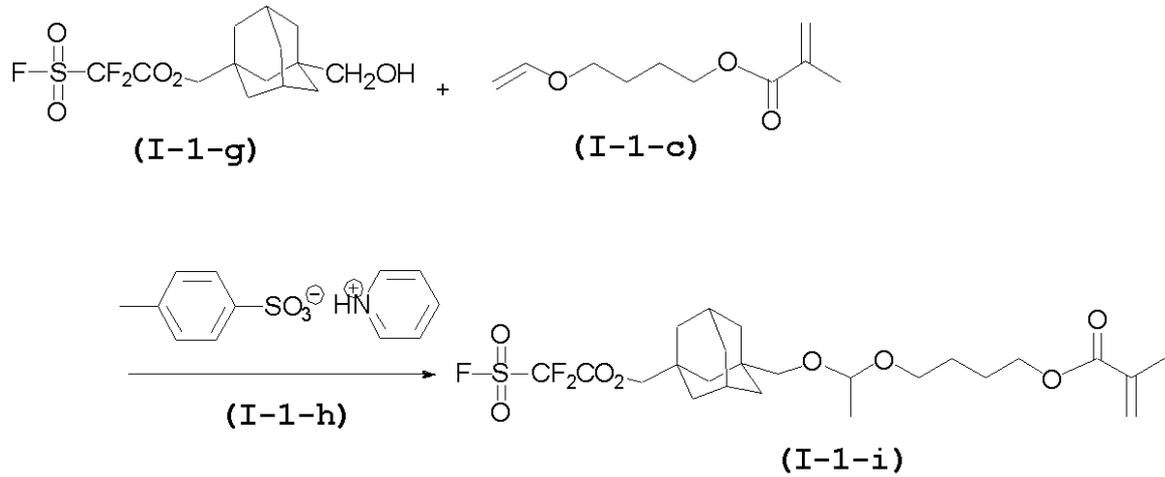


30

式(I-1-d)で表される化合物5.72部、式(I-1-e)で表される化合物4.00部、式(I-1-f)で表される化合物0.26部及びクロロホルム60部を添加し、23℃で30分間攪拌した。得られた混合溶液を、さらに、80℃で10時間脱水攪拌し、23℃まで冷却した。得られた反応物に、クロロホルム200部、イオン交換水125部及び飽和塩化ナトリウム水溶液40部を加え、23℃で30分間攪拌し、静置、分液した。回収された有機層に、イオン交換水100部を加え、23℃で30分間攪拌し、静置、分液することにより有機層を水洗した。この水洗操作を5回繰り返した。回収された有機層を濃縮することにより、式(I-1-g)で表される化合物5.54部を得た。

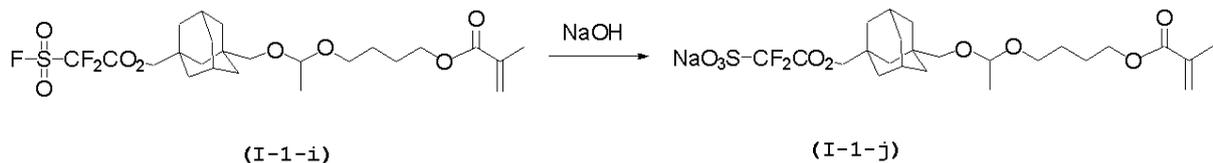
40

【0260】



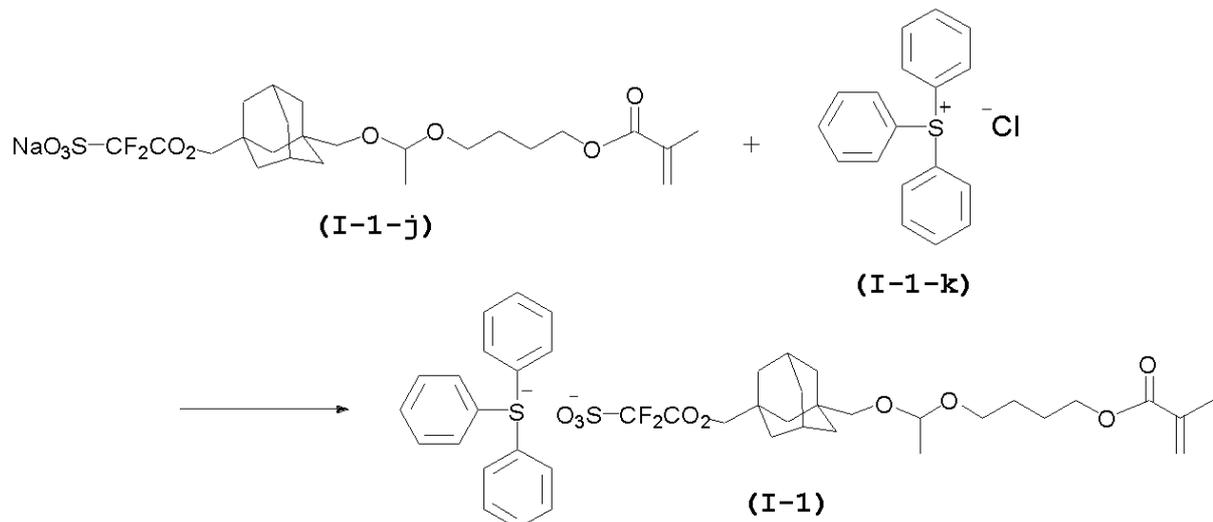
式 (I - 1 - g) で表される化合物 1 . 5 9 部、式 (I - 1 - c) で表される化合物 1 . 2 1 部、式 (I - 1 - h) で表される化合物 0 . 0 1 部及びテトラヒドロフラン 2 5 部を添加し、2 3 で 3 0 分間攪拌し、さらに、2 3 で 1 8 時間攪拌した。得られた反応物に、酢酸エチル 2 0 0 部、イオン交換水 5 0 部及び飽和炭酸水素ナトリウム水溶液 5 部を加え、2 3 で 3 0 分間攪拌し、静置、分液した。回収された有機層に、イオン交換水 1 0 0 部を加え、2 3 で 3 0 分間攪拌し、静置、分液することにより有機層を水洗した。この水洗操作を 2 回繰り返した。回収された有機層を濃縮することにより、式 (I - 1 i) で表される化合物 1 . 4 3 部を得た。

【 0 2 6 1 】



式 (I - 1 - i) で表される化合物 1 . 4 1 部、イオン交換水 3 0 部及びアセトニトリル 3 0 部を添加し、2 3 で 3 0 分間攪拌し、0 に冷却した。得られた混合物に、0 で、水酸化ナトリウム 0 . 3 4 部及びイオン交換水 3 0 部の水溶液を 1 時間かけて滴下し、さらに 0 で 3 時間攪拌した。得られた反応物に、濃塩酸 0 . 0 4 部を添加し、2 3 で 3 0 分間攪拌することにより、式 (I - 1 - j) で表される化合物を含む反応物を得た。

【 0 2 6 2 】



得られた反応物に、クロロホルム 5 0 部及び式 (I - 1 - k) で表される塩 0 . 7 8 部を添加した。その後、2 3 で 4 時間攪拌し、静置、分液した。回収された有機層に、イ

オン交換水50部を加え、23 で30分間攪拌し、静置、分液することにより有機層を水洗した。この水洗操作を8回繰り返した。得られた有機層を濃縮し、得られた残渣に、tert-ブチルメチルエーテル20部を加えて攪拌し、上澄み液を除去した。得られた残渣を濃縮した。得られた残渣に、酢酸エチル20部を加えて攪拌し、上澄み液を除去した。得られた残渣に、再度、tert-ブチルメチルエーテル20部を加えて攪拌し、上澄み液を除去した。得られた残渣をアセトニトリルに溶解し、濃縮することにより、式(I-1)で表される塩1.01部を得た。

【0263】

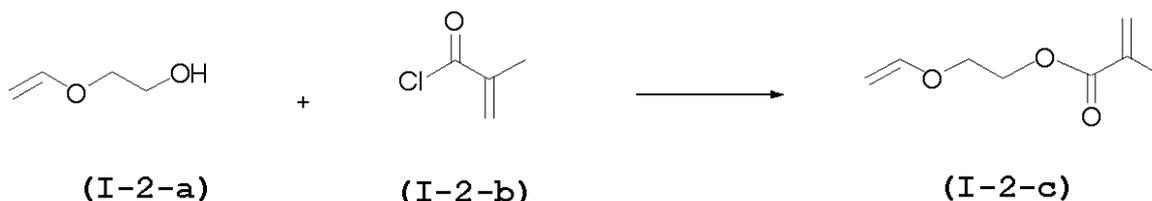
MASS (ESI (+) Spectrum) : M⁺ 263.1

MASS (ESI (-) Spectrum) : M⁻ 537.2

10

【0264】

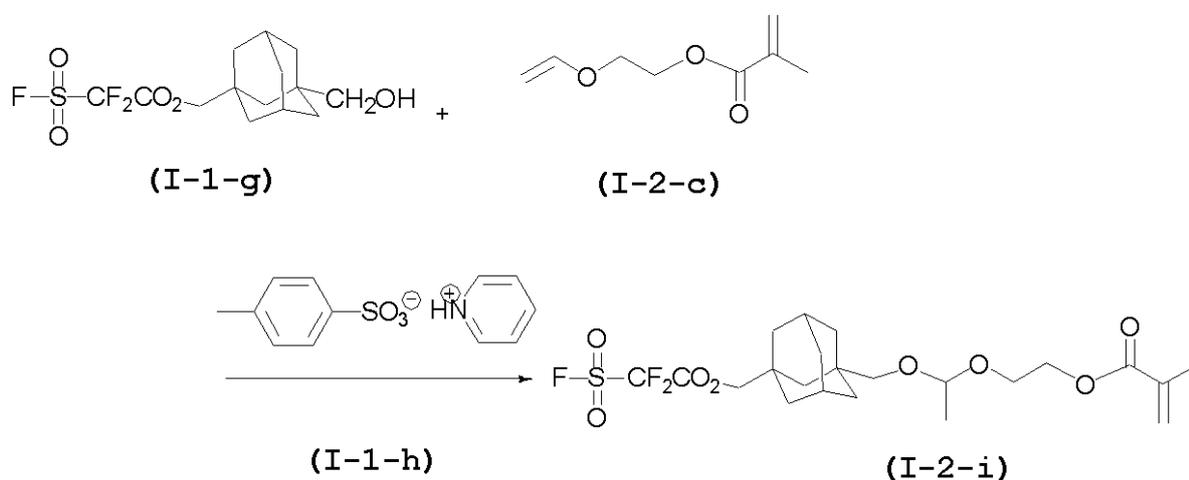
実施例2：式(I-2)で表される塩の合成



式(I-2-a)で表される化合物3.79部、テトラヒドロフラン10部及びトリエチルアミン4.79部を添加し、その後、23 で30分間攪拌し、0 に冷却した。得られた混合物に、0 で、式(I-2-b)で表される化合物4.50部を30分かけて滴下し、さらに0 で1時間攪拌した。得られた反応物に酢酸エチル100部、イオン交換水50部及び飽和塩化アンモニウム水溶液50部を加え、23 で30分間攪拌し、静置、分液した。回収された有機層に、イオン交換水100部を加え、23 で30分間攪拌し、静置、分液することにより有機層を水洗した。この水洗操作を5回繰り返した。回収された有機層を濃縮し、濃縮マスをカラム(関東化学 シリカゲル60N(球状、中性)100-210 μm 展開溶媒：n-ヘプタン/酢酸エチル=5/1)分取することにより、式(I-2-c)で表される化合物3.12部を得た。

20

【0265】



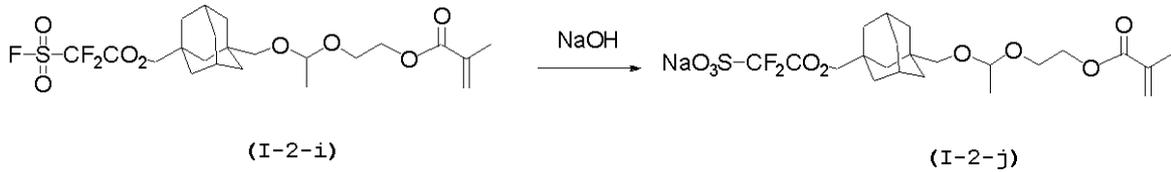
30

40

式(I-1-g)で表される化合物1.59部、式(I-2-c)で表される化合物1.03部、式(I-1-h)で表される化合物0.01部及びテトラヒドロフラン25部を添加し、23 で30分間攪拌し、さらに、23 で18時間攪拌した。得られた反応物に、酢酸エチル200部、イオン交換水50部及び飽和炭酸水素ナトリウム水溶液5部を加え、23 で30分間攪拌し、静置、分液した。回収された有機層に、イオン交換水100部を加え、23 で30分間攪拌し、静置、分液することにより有機層を水洗した。この水洗操作を2回繰り返した。回収された有機層を濃縮することにより、式(I-2-i)で表される化合物1.46部を得た。

50

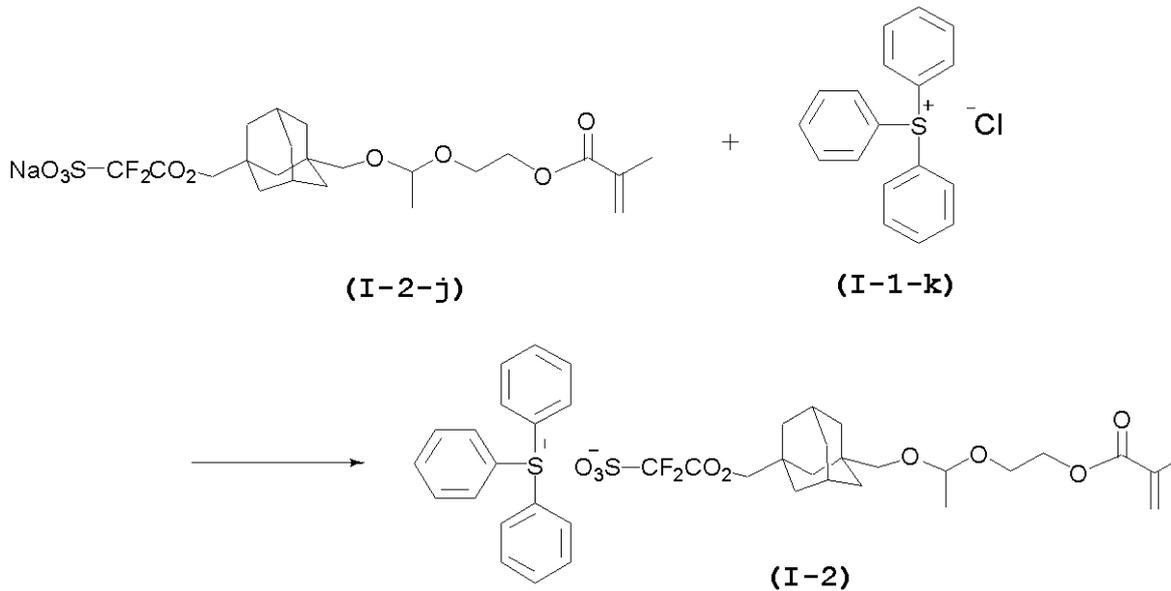
【 0 2 6 6 】



式 (I - 2 - i) で表される化合物 1 . 3 4 部、イオン交換水 3 0 部及びアセトニトリル 3 0 部を添加し、2 3 で 3 0 分間攪拌し、0 に冷却した。得られた混合物に、0 で、水酸化ナトリウム 0 . 3 4 部及びイオン交換水 3 0 部の水溶液を 1 時間かけて滴下し、さらに 0 で 3 時間攪拌した。得られた反応物に、濃塩酸 0 . 0 4 部を添加し、2 3 で 3 0 分間攪拌することにより、式 (I - 2 - j) で表される化合物を含む反応物を得た。

10

【 0 2 6 7 】



20

得られた反応物に、クロロホルム 5 0 部及び式 (I - 1 - k) で表される塩 0 . 7 8 部を添加した。その後、2 3 で 4 時間攪拌し、静置、分液した。回収された有機層に、イオン交換水 5 0 部を加え、2 3 で 3 0 分間攪拌し、静置、分液することにより有機層を水洗した。この水洗操作を 8 回繰り返した。得られた有機層を濃縮し、得られた残渣に、tert - ブチルメチルエーテル 2 0 部を加えて攪拌し、上澄み液を除去した。得られた残渣を濃縮した。得られた残渣に、酢酸エチル 2 0 部を加えて攪拌し、上澄み液を除去した。得られた残渣に、再度、tert - ブチルメチルエーテル 2 0 部を加えて攪拌し、上澄み液を除去した。得られた残渣をアセトニトリルに溶解し、濃縮することにより、式 (I - 2) で表される塩 0 . 8 9 部を得た。

30

【 0 2 6 8 】

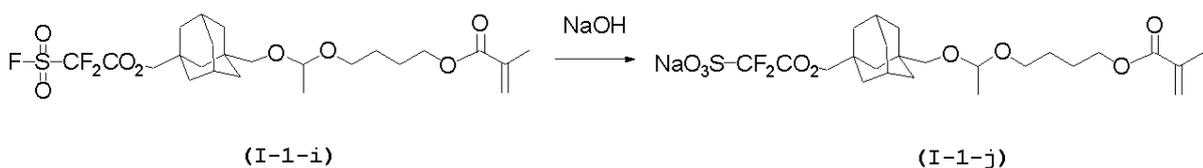
MASS (ESI (+) Spectrum) : M⁺ 263 . 1

MASS (ESI (-) Spectrum) : M⁻ 509 . 2

40

【 0 2 6 9 】

実施例 3 : 式 (I - 7 1) で表される塩の合成

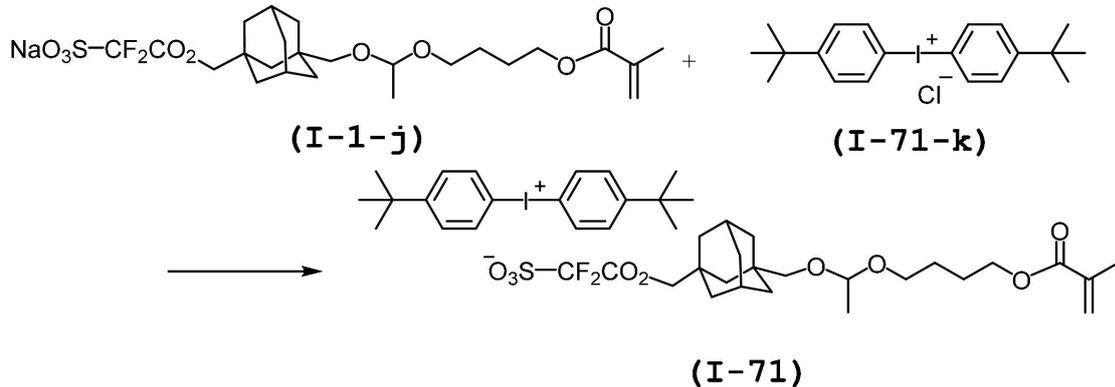


式 (I - 1 - i) で表される化合物 1 . 4 1 部、イオン交換水 3 0 部及びアセトニトリル 3 0 部を添加し、2 3 で 3 0 分間攪拌し、0 に冷却した。得られた混合物に、0

50

で、水酸化ナトリウム 0.34 部及びイオン交換水 30 部の水溶液を 1 時間かけて滴下し、さらに 0 で 3 時間攪拌した。得られた反応物に、濃塩酸 0.04 部を添加し、23 で 30 分間攪拌することにより、式 (I-1-j) で表される化合物を含む反応物を得た。

【0270】



10

得られた反応物に、クロロホルム 50 部及び式 (I-71-k) で表される塩 1.12 部を添加した。その後、23 で 4 時間攪拌し、静置、分液した。回収された有機層に、イオン交換水 50 部を加え、23 で 30 分間攪拌し、静置、分液することにより有機層を水洗した。この水洗操作を 8 回繰り返した。得られた有機層を濃縮し、得られた残渣に、tert-ブチルメチルエーテル 20 部を加えて攪拌し、上澄み液を除去した。得られた残渣を濃縮した。得られた残渣に、酢酸エチル 20 部を加えて攪拌し、上澄み液を除去した。得られた残渣に、再度、tert-ブチルメチルエーテル 20 部を加えて攪拌し、上澄み液を除去した。得られた残渣をアセトニトリルに溶解し、濃縮することにより、式 (I-71) で表される塩 1.48 部を得た。

20

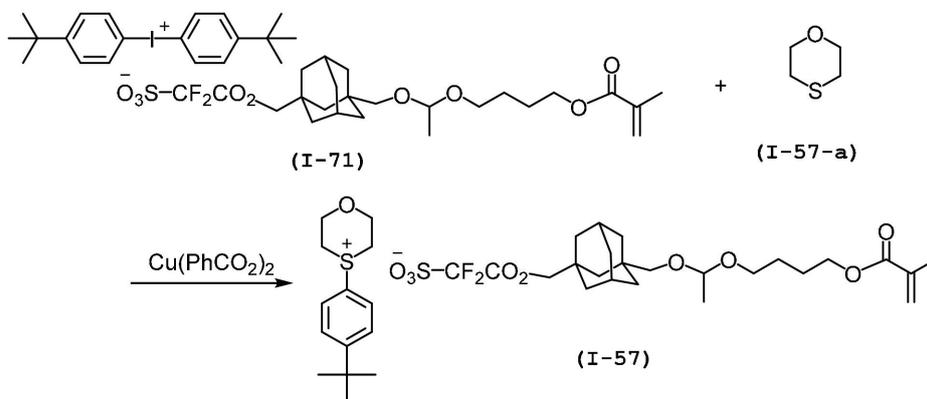
【0271】

MASS (ESI (+) Spectrum) : M⁺ 393.1

MASS (ESI (-) Spectrum) : M⁻ 537.2

【0272】

実施例 4 : 式 (I-57) で表される塩の合成



30

40

式 (I-71) で表される塩 1.27 部、式 (I-57-a) で表される化合物 0.14 部及びモノクロロベンゼン 20 部を仕込み、23 で 30 分間攪拌した。得られた混合液に、二安息香酸銅 (II) 0.01 部を添加し、更に、100 で 1 時間攪拌した。得られた反応溶液を濃縮し、得られた残渣に、クロロホルム 20 部及びイオン交換水 10 部を加えて 23 で 30 分間攪拌し、分液して有機層を取り出した。回収された有機層にイオン交換水 10 部を加えて 23 で 30 分間攪拌し、分液して有機層を取り出した。この水洗操作を 5 回繰り返した。得られた有機層を濃縮し、得られた残渣に、tert-ブチ

50

ルメチルエーテル 10 部を加えて攪拌し、上澄み液を除去した。得られた残渣を濃縮した。得られた残渣をアセトニトリルに溶解し、濃縮することにより、式 (I - 57) で表される塩 0.71 部を得た。

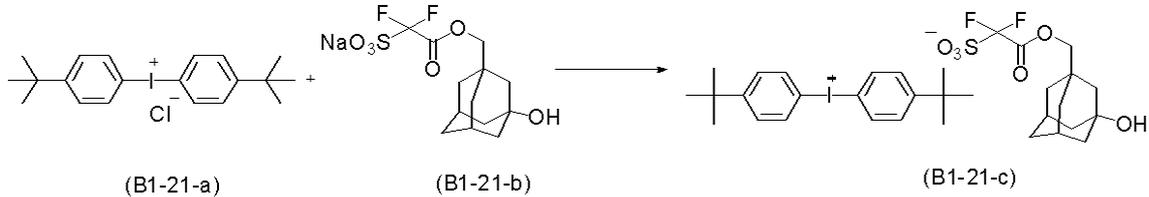
【0273】

MASS (ESI (+) Spectrum) : M^+ 237.1

MASS (ESI (-) Spectrum) : M^- 537.2

【0274】

合成例 1 [式 (B1 - 21) で表される塩の合成]

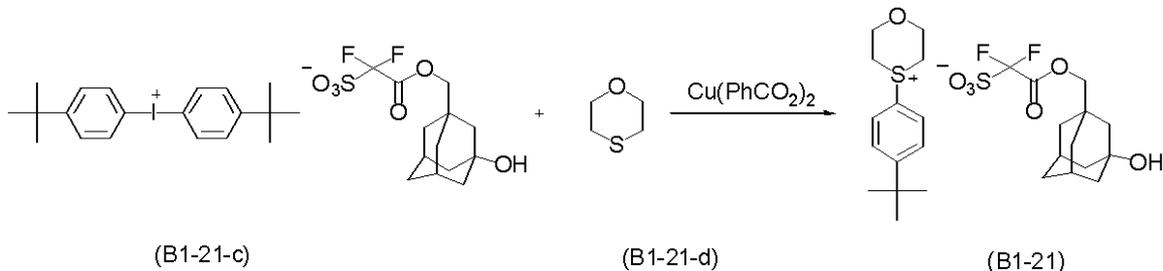


10

特開 2008 - 209917 号公報に記載された方法によって得られた式 (B1 - 21 - b) で表される化合物 30.00 部、式 (B1 - 21 - a) で表される塩 35.50 部、クロロホルム 100 部及びイオン交換水 50 部を仕込み、23 で 15 時間攪拌した。得られた反応液が 2 層に分離していたので、クロロホルム層を分液して取り出し、更に、クロロホルム層にイオン交換水 30 部を添加し、水洗した。この操作を 5 回繰り返した。クロロホルム層を濃縮し、得られた残渣に、tert - ブチルメチルエーテル 100 部を加えて 23 で 30 分間攪拌し、ろ過することにより、式 (B1 - 21 - c) で表される塩 48.57 部を得た。

20

【0275】



30

式 (B1 - 21 - c) で表される塩 20.00 部、式 (B1 - 21 - d) で表される化合物 2.84 部及びモノクロロベンゼン 250 部を仕込み、23 で 30 分間攪拌した。得られた混合液に、二安息香酸銅 (II) 0.21 部を添加し、更に、100 で 1 時間攪拌した。得られた反応溶液を濃縮し、得られた残渣に、クロロホルム 200 部及びイオン交換水 50 部を加えて 23 で 30 分間攪拌し、分液して有機層を取り出した。回収された有機層にイオン交換水 50 部を加えて 23 で 30 分間攪拌し、分液して有機層を取り出した。この水洗操作を 5 回繰り返した。得られた有機層を濃縮し、得られた残渣に、アセトニトリル 53.51 部に溶解し、濃縮した。その後、tert - ブチルメチルエーテル 113.05 部を加えて攪拌し、ろ過することにより、式 (B1 - 21) で表される塩 10.47 部を得た。

40

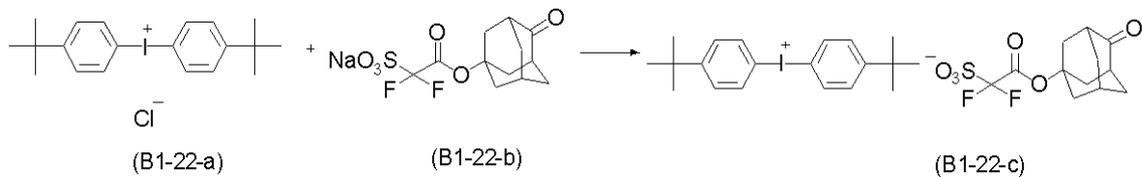
【0276】

MASS (ESI (+) Spectrum) : M^+ 237.1

MASS (ESI (-) Spectrum) : M^- 339.1

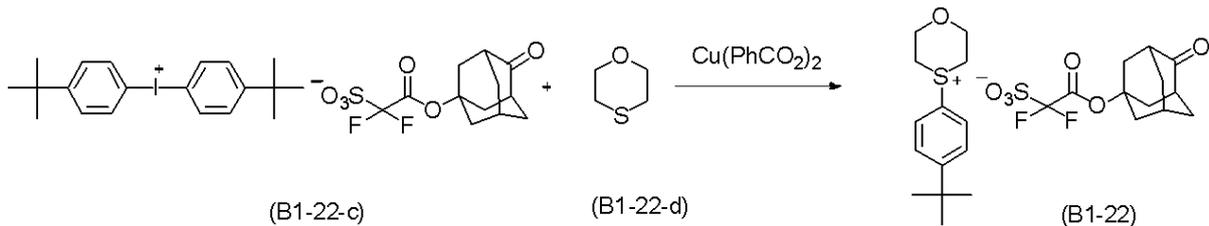
【0277】

合成例 2 [式 (B1 - 22) で表される塩の合成]



式 (B 1 - 2 2 - a) で表される塩 1 1 . 2 6 部、式 (B 1 - 2 2 - b) で表される化合物 1 0 . 0 0 部、クロロホルム 5 0 部及びイオン交換水 2 5 部を仕込み、2 3 で 1 5 時間攪拌した。得られた反応液が 2 層に分離していたので、クロロホルム層を分液して取り出し、更に、クロロホルム層にイオン交換水 1 5 部を添加し、水洗した。この操作を 5 回繰り返した。クロロホルム層を濃縮し、得られた残渣に、tert - ブチルメチルエーテル 5 0 部を加えて 2 3 で 3 0 分間攪拌し、ろ過することにより、式 (B 1 - 2 2 - c) で表される塩 1 1 . 7 5 部を得た。

【 0 2 7 8 】



式 (B 1 - 2 2 - c) で表される塩 1 1 . 7 1 部、式 (B 1 - 2 2 - d) で表される化合物 1 . 7 0 部及びモノクロロベンゼン 4 6 . 8 4 部を仕込み、2 3 で 3 0 分間攪拌した。得られた混合液に、二安息香酸銅 (I I) 0 . 1 2 部を添加し、更に、1 0 0 で 3 0 分間攪拌した。得られた反応溶液を濃縮し、得られた残渣に、クロロホルム 5 0 部及びイオン交換水 1 2 . 5 0 部を加えて 2 3 で 3 0 分間攪拌し、分液して有機層を取り出した。回収された有機層にイオン交換水 1 2 . 5 0 部を加えて 2 3 で 3 0 分間攪拌した。その後、分液して有機層を取り出した。この水洗操作を 8 回繰り返した。得られた有機層を濃縮し、得られた残渣に、tert - ブチルメチルエーテル 5 0 部を加えて攪拌した。その後、ろ過することにより、式 (B 1 - 2 2) で表される塩 6 . 8 4 部を得た。

【 0 2 7 9 】

MASS (E S I (+) S p e c t r u m) : M ⁺ 2 3 7 . 1

MASS (E S I (-) S p e c t r u m) : M ⁻ 3 2 3 . 0

【 0 2 8 0 】

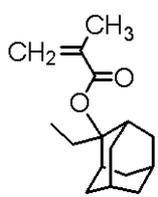
樹脂 (A) の合成

樹脂 (A) の合成に使用した化合物 (モノマー) を下記に示す。以下、これらの化合物をその式番号に応じて、「モノマー (a 1 - 1 - 2) 」等という。

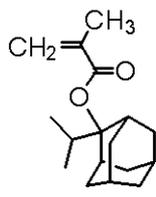
10

20

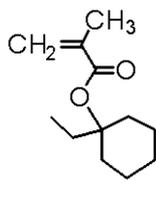
30



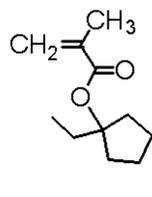
(a1-1-2)



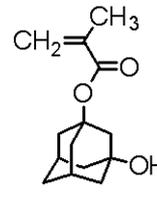
(a1-1-3)



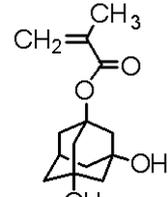
(a1-2-3)



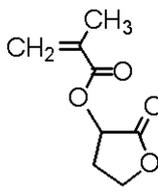
(a1-2-9)



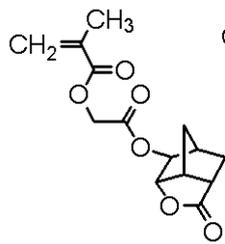
(a2-1-1)



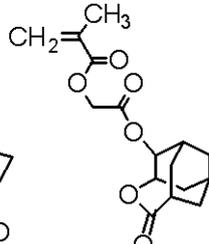
(a2-1-3)



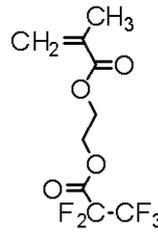
(a3-1-1)



(a3-2-3)



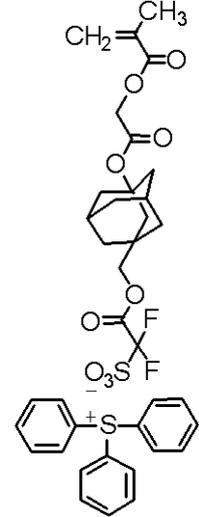
(a3-4-2)



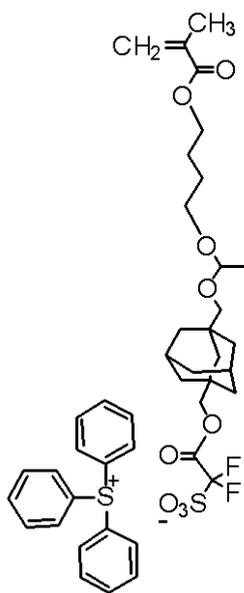
(a4-1-7)



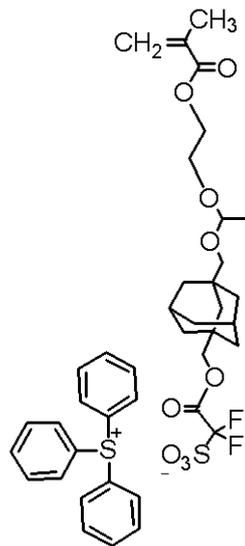
(IX-1)



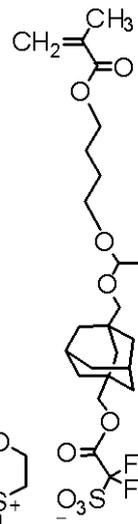
(IX-2)



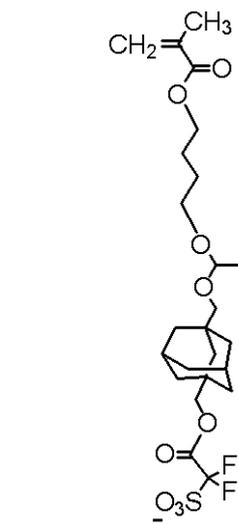
(I-1)



(I-2)



(I-57)



(I-71)

【 0 2 8 1 】

実施例 5〔樹脂 A 1 の合成〕

モノマー (a1-1-2)、モノマー (a1-2-3)、モノマー (a2-1-1)、モノマー (a3-1-1)、モノマー (a3-2-3) 及び塩 (I-1) を、そのモル比〔モノマー (a1-1-2) : モノマー (a1-2-3) : モノマー (a2-1-1) : モノマー (a3-1-1) : モノマー (a3-2-3) : 塩 (I-1)〕が、30 : 14 : 6 : 20 : 25 : 5 の割合となるように混合し、さらに、このモノマー混合物に、全モノマーの合計質量に対して、1.5 質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルア

10

20

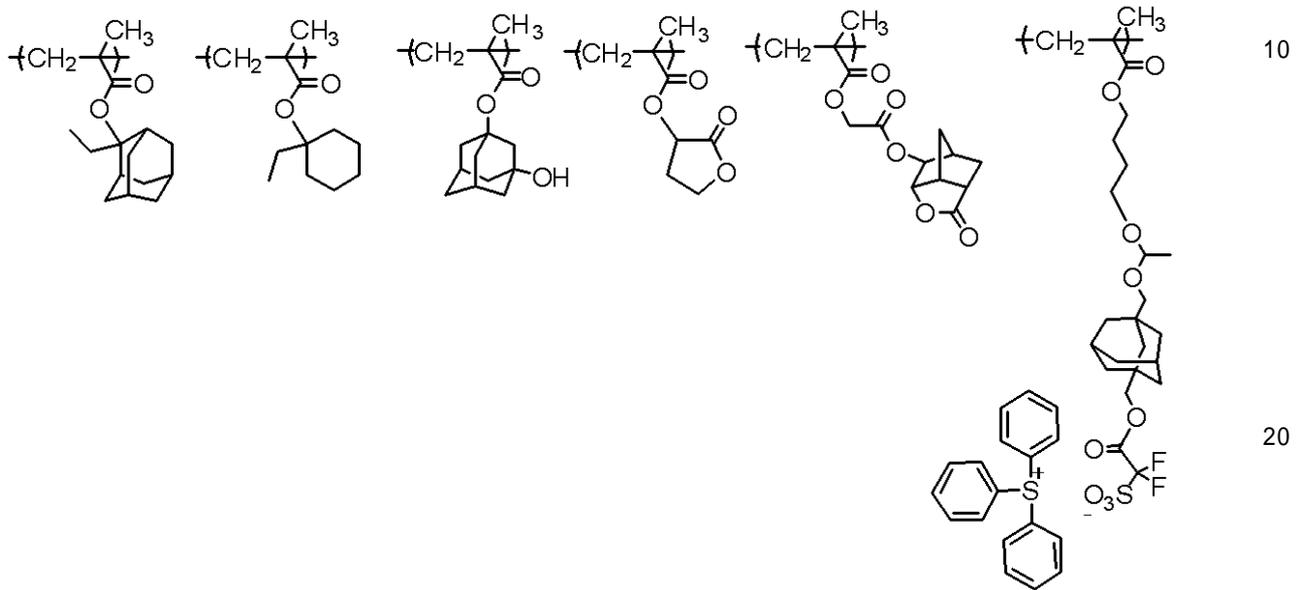
30

40

50

セテートを混合した。得られた混合物に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリルとアゾビス(2,4-ジメチルパレロニトリル)とを全モノマーの合計モル数に対して、それぞれ、1.00mol%と3.00mol%となるように添加した。これを73℃で約5時間加熱することにより重合した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 6.8×10^3 の樹脂A1を収率77%で得た。この樹脂A1は、以下の構造単位を有する。

【0282】



【0283】

実施例6〔樹脂A2の合成〕

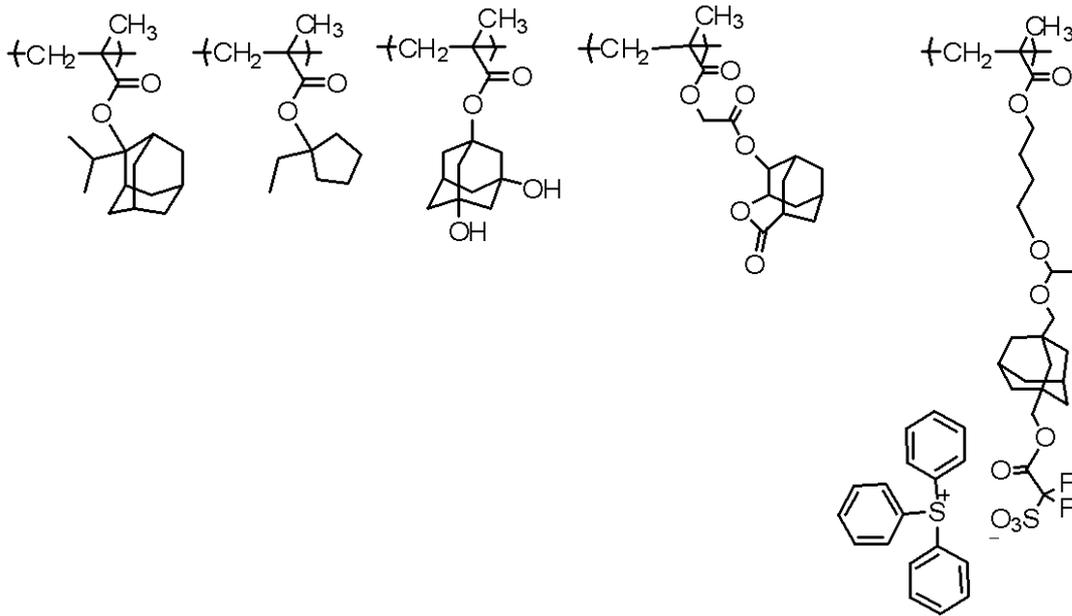
モノマーとして、モノマー(a1-1-3)、モノマー(a1-2-9)、モノマー(a2-1-3)、モノマー(a3-4-2)及び塩(I-1)を用い、そのモル比〔モノマー(a1-1-3)：モノマー(a1-2-9)：モノマー(a2-1-3)：モノマー(a3-4-2)：塩(I-1)〕が45：14：2.5：33.5：5となるように混合し、全モノマー量の1.5質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを加えて溶液とした。この溶液に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリル及びアゾビス(2,4-ジメチルパレロニトリル)を全モノマー量に対して各々、1mol%及び3mol%添加し、これらを73℃で約5時間加熱した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 7.3×10^3 の樹脂A2を収率58%で得た。この樹脂A2は、以下の構造単位を有する。

【0284】

10

20

30



10

【0285】

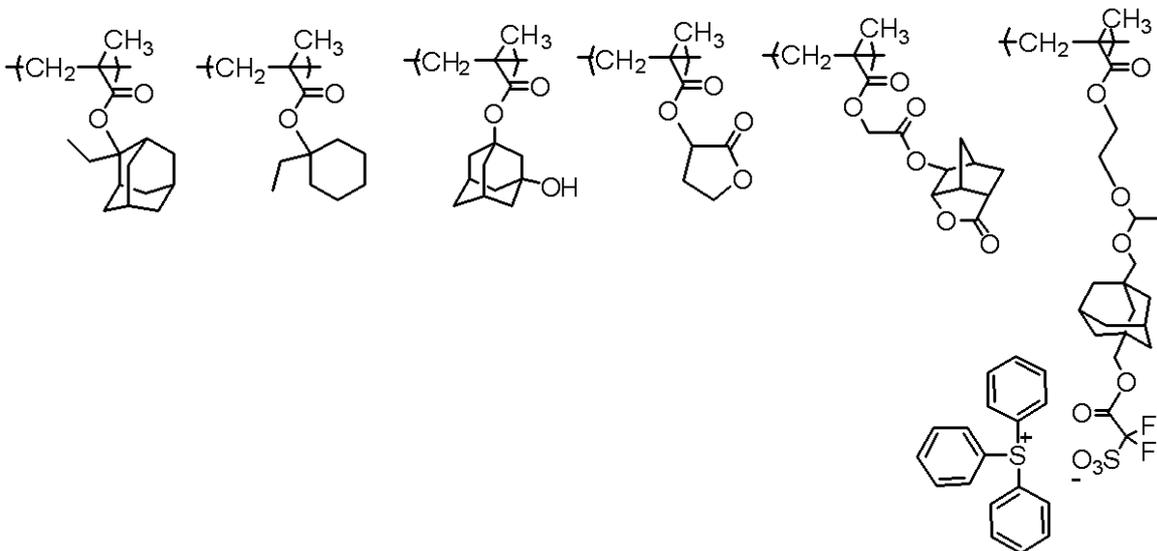
実施例7〔樹脂A3の合成〕

モノマー(a1-1-2)、モノマー(a1-2-3)、モノマー(a2-1-1)、モノマー(a3-1-1)、モノマー(a3-2-3)及び塩(I-2)を、そのモル比〔モノマー(a1-1-2)：モノマー(a1-2-3)：モノマー(a2-1-1)：モノマー(a3-1-1)：モノマー(a3-2-3)：塩(I-2)〕が、30：14：6：20：25：5の割合となるように混合し、さらに、このモノマー混合物に、全モノマーの合計質量に対して、1.5質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを混合した。得られた混合物に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリルとアゾビス(2,4-ジメチルパレロニトリル)とを全モノマーの合計モル数に対して、それぞれ、1.00mol%と3.00mol%となるように添加した。これを75℃で約5時間加熱することにより重合した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 6.5×10^3 の樹脂A3を収率75%で得た。この樹脂A3は、以下の構造単位を有する。

20

30

【0286】



40

【0287】

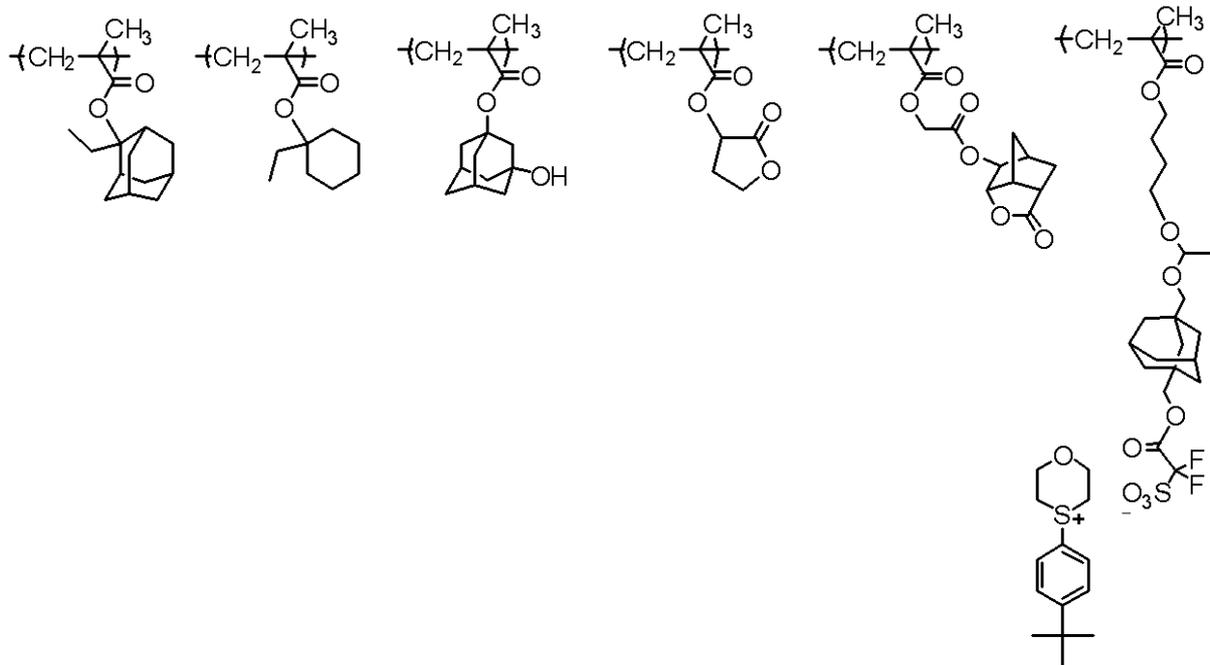
実施例8〔樹脂A4の合成〕

モノマー(a1-1-2)、モノマー(a1-2-3)、モノマー(a2-1-1)、

50

モノマー (a 3 - 1 - 1)、モノマー (a 3 - 2 - 3) 及び塩 (I - 57) を、そのモル比〔モノマー (a 1 - 1 - 2) : モノマー (a 1 - 2 - 3) : モノマー (a 2 - 1 - 1) : モノマー (a 3 - 1 - 1) : モノマー (a 3 - 2 - 3) : 塩 (I - 57)〕が、30 : 14 : 6 : 20 : 25 : 5 の割合となるように混合し、さらに、このモノマー混合物に、全モノマーの合計質量に対して、1.5 質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを混合した。得られた混合物に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリルとアゾビス(2,4-ジメチルバレロニトリル)とを全モノマーの合計モル数に対して、それぞれ、1.00 mol % と 3.00 mol % となるように添加した。これを 75 °C で約 5 時間加熱することにより重合した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 7.1×10^3 の樹脂 A 4 を収率 76 % で得た。この樹脂 A 4 は、以下の構造単位を有する。

【0288】

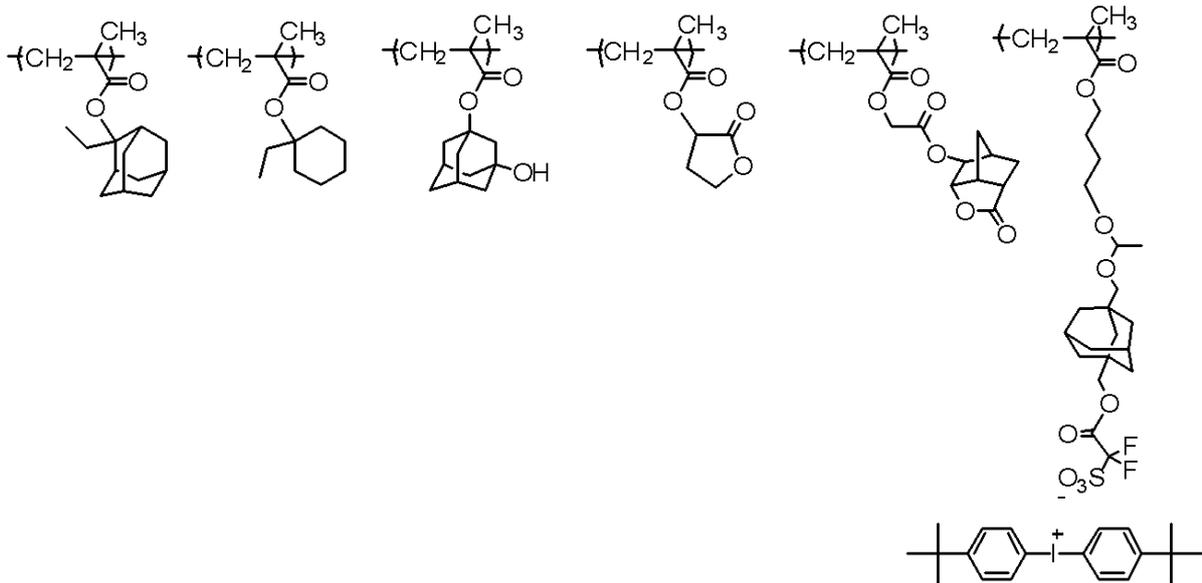


【0289】

実施例 9〔樹脂 A 5 の合成〕

モノマー (a 1 - 1 - 2)、モノマー (a 1 - 2 - 3)、モノマー (a 2 - 1 - 1)、モノマー (a 3 - 1 - 1)、モノマー (a 3 - 2 - 3) 及び塩 (I - 71) を、そのモル比〔モノマー (a 1 - 1 - 2) : モノマー (a 1 - 2 - 3) : モノマー (a 2 - 1 - 1) : モノマー (a 3 - 1 - 1) : モノマー (a 3 - 2 - 3) : 塩 (I - 71)〕が、30 : 14 : 6 : 20 : 25 : 5 の割合となるように混合し、さらに、このモノマー混合物に、全モノマーの合計質量に対して、1.5 質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを混合した。得られた混合物に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリルとアゾビス(2,4-ジメチルバレロニトリル)とを全モノマーの合計モル数に対して、それぞれ、1.00 mol % と 3.00 mol % となるように添加した。これを 75 °C で約 5 時間加熱することにより重合した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 7.5×10^3 の樹脂 A 5 を収率 68 % で得た。この樹脂 A 5 は、以下の構造単位を有する。

【0290】



10

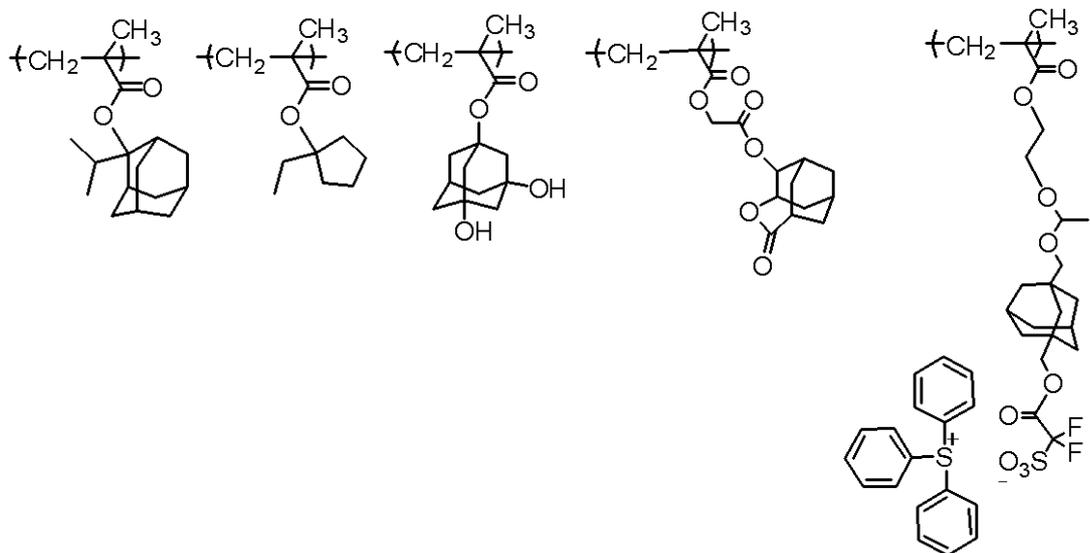
【0291】

実施例10〔樹脂A6の合成〕

モノマーとして、モノマー(a1-1-3)、モノマー(a1-2-9)、モノマー(a2-1-3)、モノマー(a3-4-2)及び塩(I-2)を用い、そのモル比〔モノマー(a1-1-3)：モノマー(a1-2-9)：モノマー(a2-1-3)：モノマー(a3-4-2)：塩(I-2)〕が45：14：2.5：33.5：5となるように混合し、全モノマー量の1.5質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを加えて溶液とした。この溶液に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリル及びアゾビス(2,4-ジメチルパレロニトリル)を全モノマー量に対して各々、1mol%及び3mol%添加し、これらを75℃で約5時間加熱した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 6.9×10^3 の樹脂A6を収率62%で得た。この樹脂A6は、以下の構造単位を有する。

20

【0292】



30

40

【0293】

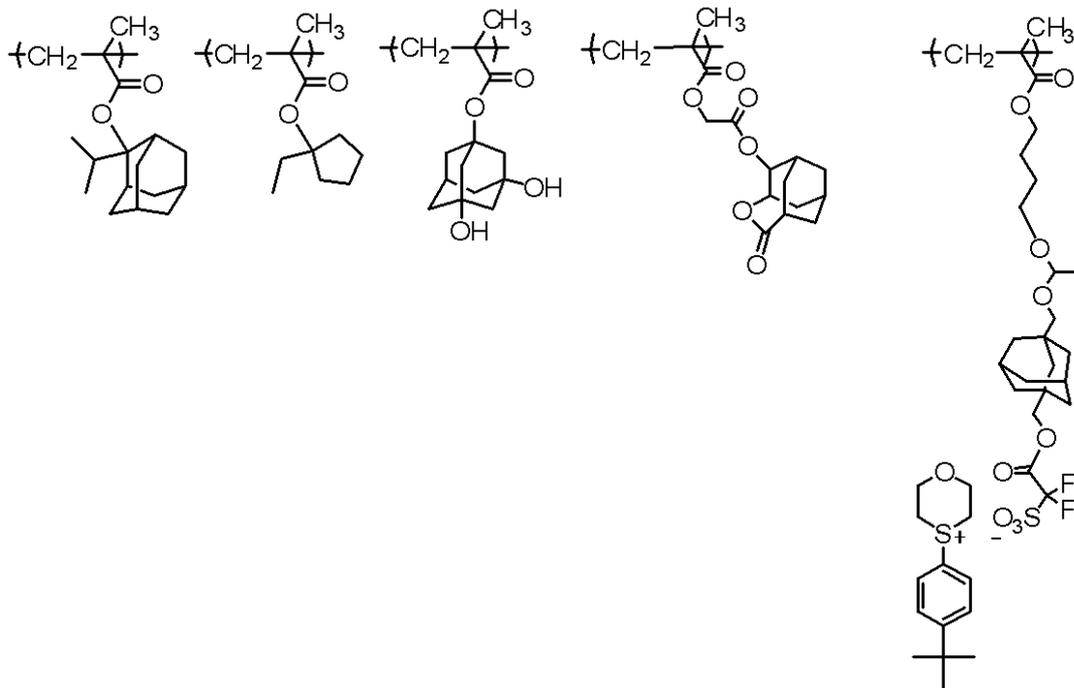
実施例11〔樹脂A7の合成〕

モノマーとして、モノマー(a1-1-3)、モノマー(a1-2-9)、モノマー(a2-1-3)、モノマー(a3-4-2)及び塩(I-57)を用い、そのモル比〔モノマー(a1-1-3)：モノマー(a1-2-9)：モノマー(a2-1-3)：モノ

50

マー（a 3 - 4 - 2）：塩（I - 57）が 45 : 14 : 2.5 : 33.5 : 5 となるように混合し、全モノマー量の 1.5 質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを加えて溶液とした。この溶液に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリル及びアゾビス（2, 4 - ジメチルバレロニトリル）を全モノマー量に対して各々、1 mol % 及び 3 mol % 添加し、これらを 75 で約 5 時間加熱した。得られた反応混合物を、大量のメタノール / 水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール / 水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 7.0×10^3 の樹脂 A 7 を収率 60 % で得た。この樹脂 A 7 は、以下の構造単位を有する。

【0294】



【0295】

実施例 12〔樹脂 A 8 の合成〕

モノマーとして、モノマー（a 1 - 1 - 3）、モノマー（a 1 - 2 - 9）、モノマー（a 2 - 1 - 3）、モノマー（a 3 - 4 - 2）及び塩（I - 71）を用い、そのモル比〔モノマー（a 1 - 1 - 3）：モノマー（a 1 - 2 - 9）：モノマー（a 2 - 1 - 3）：モノマー（a 3 - 4 - 2）：塩（I - 71）〕が 45 : 14 : 2.5 : 33.5 : 5 となるように混合し、全モノマー量の 1.5 質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを加えて溶液とした。この溶液に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリル及びアゾビス（2, 4 - ジメチルバレロニトリル）を全モノマー量に対して各々、1 mol % 及び 3 mol % 添加し、これらを 75 で約 5 時間加熱した。得られた反応混合物を、大量のメタノール / 水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール / 水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 6.9×10^3 の樹脂 A 8 を収率 55 % で得た。この樹脂 A 8 は、以下の構造単位を有する。

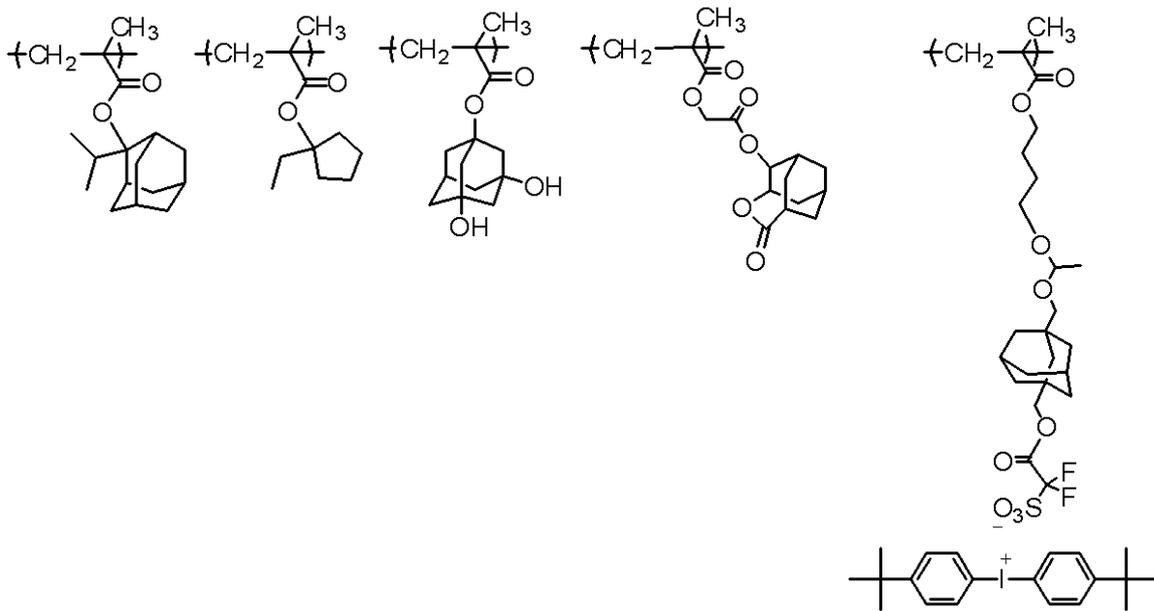
【0296】

10

20

30

40



10

【0297】

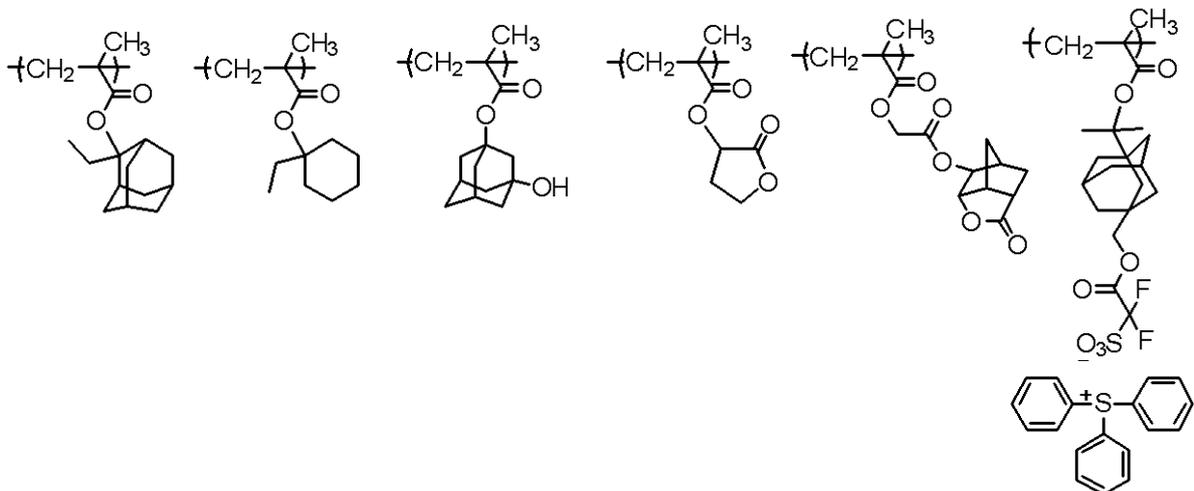
合成例3〔樹脂AX1の合成〕

モノマー(a1-1-2)、モノマー(a1-2-3)、モノマー(a2-1-1)、モノマー(a3-1-1)、モノマー(a3-2-3)及び塩(IX-1)を、そのモル比〔モノマー(a1-1-2)：モノマー(a1-2-3)：モノマー(a2-1-1)：モノマー(a3-1-1)：モノマー(a3-2-3)：塩(IX-1)〕が、30：14：6：20：25：5の割合となるように混合し、さらに、このモノマー混合物に、全モノマーの合計質量に対して、1.5質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを混合した。得られた混合物に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリルとアゾビス(2,4-ジメチルバレロニトリル)とを全モノマーの合計モル数に対して、それぞれ、1.00mol%と3.00mol%となるように添加した。これを73℃で約5時間加熱することにより重合した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 7.0×10^3 の樹脂AX1を収率71%で得た。この樹脂AX1は、以下の構造単位を有する。

20

30

【0298】



40

【0299】

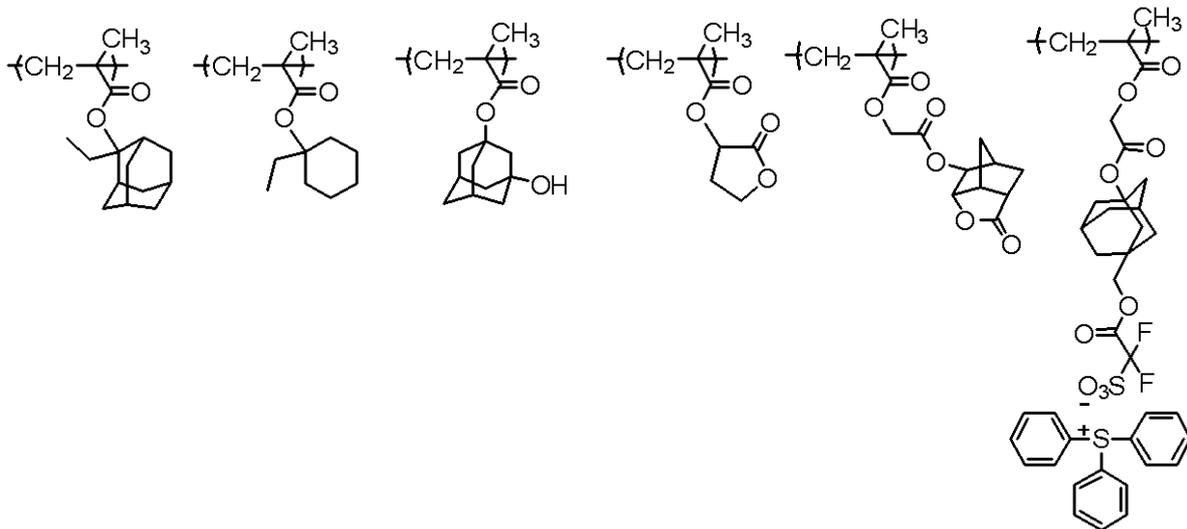
合成例4〔樹脂AX2の合成〕

モノマー(a1-1-2)、モノマー(a1-2-3)、モノマー(a2-1-1)、モノマー(a3-1-1)、モノマー(a3-2-3)及び塩(IX-2)を、そのモル比〔モノマー(a1-1-2)：モノマー(a1-2-3)：モノマー(a2-1-1)：モノマー(a3-1-1)：モノマー(a3-2-3)：塩(IX-2)〕が、30：14：6：20：25：5の割合となるように混合し、さらに、このモノマー混合物に、全モノマーの合計質量に対して、1.5質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを混合した。得られた混合物に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリルとアゾビス(2,4-ジメチルバレロニトリル)とを全モノマーの合計モル数に対して、それぞれ、1.00mol%と3.00mol%となるように添加した。これを73℃で約5時間加熱することにより重合した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 7.0×10^3 の樹脂AX2を収率71%で得た。この樹脂AX2は、以下の構造単位を有する。

50

：モノマー（a 3 - 1 - 1）：モノマー（a 3 - 2 - 3）：塩（IX - 2）が、30 : 14 : 6 : 20 : 25 : 5の割合となるように混合し、さらに、このモノマー混合物に、全モノマーの合計質量に対して、1.5質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを混合した。得られた混合物に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリルとアゾビス（2,4-ジメチルバレロニトリル）とを全モノマーの合計モル数に対して、それぞれ、1.00mol%と3.00mol%となるように添加した。これを73で約5時間加熱することにより重合した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 6.9×10^3 の樹脂AX2を収率76%で得た。この樹脂AX2は、以下の構造単位を有する。

【0300】



【0301】

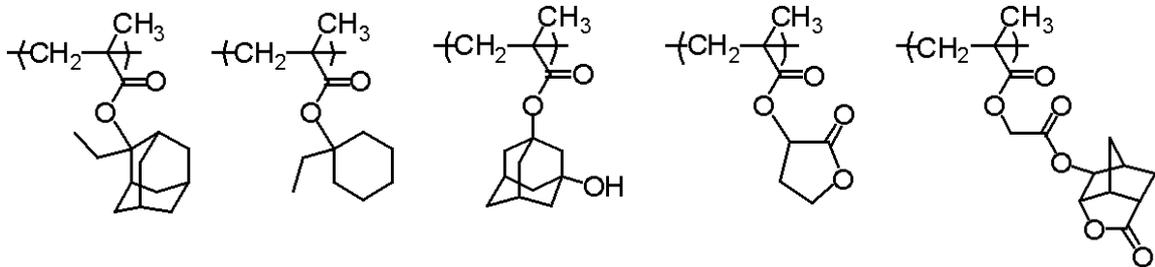
合成例5〔樹脂AX3の合成〕

モノマーとして、モノマー（a 1 - 1 - 3）、モノマー（a 1 - 2 - 9）、モノマー（a 2 - 1 - 3）、モノマー（a 3 - 4 - 2）及び塩（IX - 1）を用い、そのモル比〔モノマー（a 1 - 1 - 3）：モノマー（a 1 - 2 - 9）：モノマー（a 2 - 1 - 3）：モノマー（a 3 - 4 - 2）：塩（IX - 1）〕が45 : 14 : 2.5 : 33.5 : 5となるように混合し、全モノマー量の1.5質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを加えて溶液とした。この溶液に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリル及びアゾビス（2,4-ジメチルバレロニトリル）を全モノマー量に対して各々、1mol%及び3mol%添加し、これらを73で約5時間加熱した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリパルプし、ろ過することにより、重量平均分子量 7.0×10^3 の樹脂AX3を収率52%で得た。この樹脂AX3は、以下の構造単位を有する。

【0302】

物に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリルとアゾビス(2,4-ジメチルバレロニトリル)とを全モノマーの合計モル数に対して、それぞれ、1.00mol%と3.00mol%となるように添加した。これを73で約5時間加熱することにより重合した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリバルブし、ろ過することにより、重量平均分子量 7.8×10^3 の樹脂AA1を収率76%で得た。この樹脂AA1は、以下の構造単位を有する。

【0306】



10

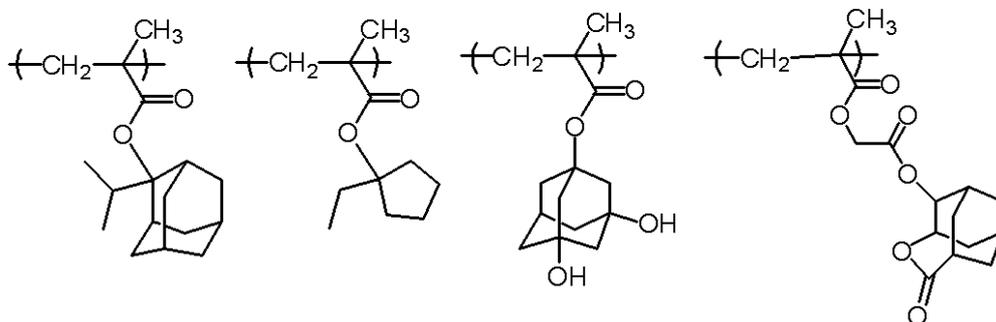
【0307】

合成例8〔樹脂AA2の合成〕

モノマーとして、モノマー(a1-1-3)、モノマー(a1-2-9)、モノマー(a2-1-3)及びモノマー(a3-4-2)を用い、そのモル比〔モノマー(a1-1-3)：モノマー(a1-2-9)：モノマー(a2-1-3)：モノマー(a3-4-2)〕が45：14：2.5：38.5となるように混合し、全モノマー量の1.5質量倍のプロピレングリコールモノメチルエーテルアセテートを加えて溶液とした。この溶液に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリル及びアゾビス(2,4-ジメチルバレロニトリル)を全モノマー量に対して各々、1mol%及び3mol%添加し、これらを73で約5時間加熱した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリバルブし、ろ過することにより、重量平均分子量 7.8×10^3 の樹脂AA2を収率65%で得た。この樹脂AA2は、以下の構造単位を有する。

20

【0308】



30

【0309】

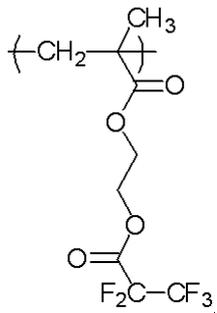
合成例9〔樹脂X1の合成〕

モノマーとして、モノマー(a4-1-7)を用い、全モノマー量の1.2質量倍のメチルイソブチルケトンを加えて溶液とした。この溶液に、開始剤としてアゾビスイソブチロニトリル及びアゾビス(2,4-ジメチルバレロニトリル)を全モノマー量に対して各々、0.7mol%及び2.1mol%添加し、これらを75で約5時間加熱した。得られた反応混合物を、大量のメタノール/水混合溶媒に注いで樹脂を沈殿させ、この樹脂をろ過した。得られた樹脂を、メタノール/水混合溶媒中でリバルブし、ろ過することにより、重量平均分子量 1.7×10^4 の樹脂X1を収率76%で得た。この樹脂X1は、以下の構造単位を有するものである。

40

【0310】

50



【 0 3 1 1 】

(レジスト組成物の調製)

以下に示す成分の各々を表 2 に示す質量部で混合して溶剤に溶解し、孔径 0 . 2 μ m のフッ素樹脂製フィルターでろ過して、レジスト組成物を調製した。

【 0 3 1 2 】

【表 2】

リスト組成物	樹脂	酸発生剤	塩 (I)	化合物(D)	PB/PEB
組成物 1	X1/AA1=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.7/0.2部	I-1=0.4部	D1=0.28部	110°C/95°C
組成物 2	X1/A1=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.9/0.4部	---	D1=0.28部	110°C/95°C
組成物 3	X1/A1=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.3/0.1部	I-1=0.2部	D1=0.28部	110°C/95°C
組成物 4	X1/A1=0.4/10部	---	I-1=0.3部	D1=0.28部	110°C/95°C
組成物 5	X1/AA1=0.4/10部	---	I-1=0.9部	D1=0.28部	110°C/95°C
組成物 6	X1/A2=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.7/0.2部	I-1=0.4部	D1=0.28部	100°C/85°C
組成物 7	X1/A2=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.9/0.4部	---	D1=0.28部	100°C/85°C
組成物 8	X1/A2=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.3/0.1部	I-1=0.2部	D1=0.28部	100°C/85°C
組成物 9	X1/A2=0.4/10部	---	I-1=0.3部	D1=0.28部	100°C/85°C
組成物 10	X1/AA2=0.4/10部	---	I-1=0.9部	D1=0.28部	100°C/85°C
組成物 11	X1/A3=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.9/0.4部	---	D1=0.28部	110°C/95°C
組成物 12	X1/A4=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.9/0.4部	---	D1=0.28部	110°C/95°C
組成物 13	X1/A5=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.9/0.4部	---	D1=0.28部	110°C/95°C
組成物 14	X1/A6=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.9/0.4部	---	D1=0.28部	100°C/85°C
組成物 15	X1/A7=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.9/0.4部	---	D1=0.28部	100°C/85°C
組成物 16	X1/A8=0.4/10部	B1-21/B1-22 =0.9/0.4部	---	D1=0.28部	100°C/85°C
比較組成物 1	X1/AX1=0.4/10部	---	IX-1=0.3部	D1=0.28部	110°C/95°C
比較組成物 2	X1/AA1=0.4/10部	---	IX-1=0.9部	D1=0.28部	110°C/95°C
比較組成物 3	X1/AX2=0.4/10部	---	IX-2=0.3部	D1=0.28部	110°C/95°C
比較組成物 4	X1/AA1=0.4/10部	---	IX-2=0.9部	D1=0.28部	110°C/95°C
比較組成物 5	X1/AX3=0.4/10部	---	IX-1=0.3部	D1=0.28部	100°C/85°C
比較組成物 6	X1/AA2=0.4/10部	---	IX-1=0.9部	D1=0.28部	100°C/85°C
比較組成物 7	X1/AX4=0.4/10部	---	IX-2=0.3部	D1=0.28部	100°C/85°C
比較組成物 8	X1/AA2=0.4/10部	---	IX-2=0.9部	D1=0.28部	100°C/85°C

【0313】

<樹脂(A)>

A1~A8、AX1~AX4、AA1、AA2、X1：樹脂A1~樹脂A8、樹脂AX1~樹脂AX4、樹脂AA1、樹脂AA2、樹脂X1

<酸発生剤(B)>

I-1：式(I-1)で表される塩

IX-1：式(IX-1)で表される塩：特開2011-215619号公報の実施例に従って合成

IX-2：式(IX-2)で表される塩：特開2014-197168号公報の実施例に従って合成

B1-21：式(B1-21)で表される塩

B1-22：式(B1-22)で表される塩

10

20

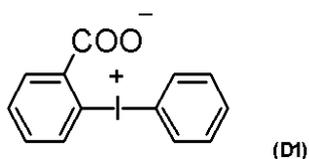
30

40

50

<クエンチャー (C)>

D1 : (東京化成工業(株)製)



<溶剤>

プロピレングリコールモノメチルエーテルアセテート	265部	
プロピレングリコールモノメチルエーテル	20部	10
2-ヘプタノン	20部	
-ブチロラクトン	3.5部	

【0314】

<レジストパターンの製造及びその評価>

12インチのシリコン製ウェハ上に、有機反射防止膜用組成物 [ARC-29 ; 日産化学(株)製] を塗布して、205、60秒の条件でベークすることによって、厚さ78nmの有機反射防止膜を形成した。次いで、有機反射防止膜の上に、上記のレジスト組成物を乾燥(プリベーク)後の膜厚が85nmとなるようにスピコートした。

得られたシリコンウェハをダイレクトホットプレート上にて、表2の「PB」欄に記載された温度で60秒間プリベーク(PB)した。こうしてレジスト組成物膜を形成したウェハに、液浸露光用ArFエキシマステッパー [XT:1900Gi ; ASML社製、NA=1.35、3/4 Annular X-Y偏光] を用いて、露光量を段階的に変化させてラインアンドスペースパターンを液浸露光した。なお、液浸媒体としては超純水を使用した。

露光後、ホットプレート上にて、表2の「PEB」欄に記載された温度で60秒間ポストエクスポージャーベーク(PEB)を行い、さらに2.38質量%テトラメチルアンモニウムヒドロキシド水溶液で60秒間のパドル現像を行い、レジストパターンを得た。

【0315】

得られた各レジストパターン膜において、50nmのラインアンドスペースパターンが1:1となる露光量となる露光量を実効感度とした。

【0316】

<ラインエッジラフネス評価(LER)>

リソグラフィプロセス後のレジストパターンの壁面を走査型電子顕微鏡で観察し、レジストパターンの側壁の凹凸の振れ幅(nm)を求めた。この振れ幅の結果を、表3に示す。

【0317】

【表 3】

	レジスト組成物	LER
実施例 13	組成物 1	3.42
実施例 14	組成物 2	3.28
実施例 15	組成物 3	3.30
実施例 16	組成物 4	3.33
実施例 17	組成物 5	3.48
実施例 18	組成物 1 1	3.32
実施例 19	組成物 1 2	3.22
実施例 20	組成物 1 3	3.48
比較例 1	比較組成物 1	4.24
比較例 2	比較組成物 2	4.78
比較例 3	比較組成物 3	4.68
比較例 4	比較組成物 4	4.74

10

【0318】

<ネガ型レジストパターンの製造/レジスト組成物の液浸露光評価>

12インチのシリコンウェハ上に、有機反射防止膜用組成物 [ARC-29; 日産化学(株)製] を塗布して、205、60秒の条件でベークすることによって、厚さ78nmの有機反射防止膜を形成した。次いで、前記の有機反射防止膜の上に、上記のレジスト組成物を乾燥(プリベーク)後の組成物層の膜厚が100nmとなるようにスピコートした。塗布後、このシリコンウェハをダイレクトホットプレート上にて、表2の「PB」欄に記載された温度で60秒間プリベークして、シリコンウェハ上に組成物層を形成した。

20

シリコンウェハ上に形成された組成物層に、液浸露光用ArFエキシマレーザーステッパー [XT:1900Gi; ASML社製、NA=1.35、Annular $\sigma_{out} = 0.85$ $\sigma_{in} = 0.65$ XY-pol.照明] で、トレンチパターン(ピッチ120nm/トレンチ幅40nm)を形成するためのマスクを用いて、露光量を段階的に変化させて露光した。なお、液浸媒体としては超純水を使用した。

30

露光後、ホットプレート上にて、表2の「PEB」欄に記載された温度で60秒間ポストエクスポージャーベークを行った。次いで、このシリコンウェハ上の組成物層を、現像液として酢酸ブチル(東京化成工業(株)製)を用いて、23で20秒間ダイナミックディスプレイ法によって現像を行うことにより、ネガ型レジストパターンを製造した。

【0319】

得られたレジストパターンにおいて、トレンチパターンの幅が40nmとなる露光量を実効感度とした。

【0320】

<ラインエッジラフネス評価(LER)>

リソグラフィプロセス後のレジストパターンの壁面を走査型電子顕微鏡で観察し、レジストパターンの側壁の凹凸の振れ幅(nm)を求めた。この振れ幅の結果を、表4に示す。

40

【0321】

【表 4】

	レジスト組成物	LER
実施例 2 1	組成物 5	2.92
実施例 2 2	組成物 6	2.76
実施例 2 3	組成物 7	2.79
実施例 2 4	組成物 8	2.82
実施例 2 5	組成物 9	2.98
実施例 2 6	組成物 1 4	2.78
実施例 2 7	組成物 1 5	2.69
実施例 2 8	組成物 1 6	2.81
比較例 5	比較組成物 5	3.34
比較例 6	比較組成物 6	3.88
比較例 7	比較組成物 7	3.58
比較例 8	比較組成物 8	3.78

10

【 0 3 2 2 】

上記の結果から、本発明のレジスト組成物によれば、ラインエッジラフネスが良好であることがわかる。

【産業上の利用可能性】

20

【 0 3 2 3 】

本発明のレジスト組成物は、ラインエッジラフネスが良好であり、半導体の微細加工に有用である。

フロントページの続き

(51) Int.Cl.			F I		
<i>G 0 3 F</i>	<i>7/038</i>	<i>(2006.01)</i>	<i>G 0 3 F</i>	<i>7/038</i>	<i>6 0 1</i>
<i>G 0 3 F</i>	<i>7/20</i>	<i>(2006.01)</i>	<i>G 0 3 F</i>	<i>7/20</i>	<i>5 2 1</i>
<i>C 0 9 K</i>	<i>3/00</i>	<i>(2006.01)</i>	<i>C 0 9 K</i>	<i>3/00</i>	<i>K</i>

(56) 参考文献 特開 2 0 1 3 - 1 9 0 7 8 2 (J P , A)
特開 2 0 1 6 - 1 0 8 3 2 5 (J P , A)

(58) 調査した分野 (Int.Cl. , DB 名)
C 0 7 C 3 0 9 / 1 7
C 0 8 F 2 0 / 0 0